鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（217）
国道270号（宮崎バイパス）道路改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書３

中津野（なかつの）遺跡

低地部・低湿地部編
第２分冊

（南さつま市金峰町）

2022年３月

鹿児島県立埋蔵文化財センター

総　目　次

【第１分冊】
巻頭図版１・２・３・４
序文
報告書抄録
遺跡位置図
例言・凡例
目次
第１章　発掘調査の経過
　第１節　調査に至るまでの経緯
　第２節　確認調査・本調査
　第３節　整理・報告書作成
第２章　遺跡の位置と環境
　第１節　地理的環境
　第２節　歴史的環境
　第３節　事業路線内遺跡の概要
第３章　調査の方法と層序
　第１節　調査の方法
　第２節　層序
第４章　古代～近世の調査
　第１節　遺構
　第２節　遺物
第５章　縄文時代晩期～古墳時代の調査
　第１節　遺構
　第２節　遺物
【第２分冊】
目次
第６章　縄文時代早期～後期の調査
　第１節　遺構
　第２節　遺物（土器・土製品等）
　第３節　遺物（石器・石製品）
【第３分冊】
目次
第７章　木製品保存処理
第８章　自然科学分析
第９章　総括
写真図版

第　２　分　冊　目　次

第６章　縄文時代早期～後期の調査 …… 1
　第１節　遺構 …… 1
　1　集石 …… 1
　2　土坑 …… 1
　3　埋設土器 …… 1
　4　遺物集中箇所 …… 3
　5　集積遺構 …… 26
　6　特殊遺構：大型軽石加工品 …… 27
　第２節　遺物（土器・土製品等） …… 32
　1　縄文時代後期の土器・土製品等 …… 32
　2　縄文時代中期以前の土器・土製品 …… 149
　第３節　遺物（石器・石製品） …… 183
　1　打製石鏃 …… 183
　2　石錐 …… 192
　3　尖頭器 …… 192
　4　異形石器 …… 195
　5　石匙 …… 195
　6　スクレイパー …… 195
　7　使用痕剥片・加工痕のある剥片 …… 196
　8　石核 …… 196
　9　磨製石斧 …… 197
　10　擦切石器 …… 204
　11　打製石斧 …… 204
　12　磨石・敲石 …… 214
　13　礫器 …… 218
　14　石皿・台石 …… 221
　15　軽石製品 …… 221
　16　石製品 …… 235

挿　図　目　次

第2-1図　縄文時代後期の遺構配置図 …… 2
第2-2図　集石２・３号 …… 3
第2-3図　土坑31・32号及び土坑31号出土遺物 …… 4
第2-4図　土坑33号・埋設土器及び出土遺物 …… 5
第2-5図　遺物集中と包含層出土土器の
　　接合状況図（１）…… 6
第2-6図　遺物集中と包含層出土土器の
　　接合状況図（２）…… 7
第2-7図　遺物集中１～３ …… 8
第2-8図　遺物集中４ …… 9
第2-9図　遺物集中５ …… 11
第2-10図　遺物集中６（１）…… 13
第2-11図　遺物集中６（２）…… 14
第2-12図　遺物集中６（３）…… 15
第2-13図　遺物集中６（４）…… 16
第2-14図　遺物集中６（５）…… 17
第2-15図　遺物集中７（１）…… 18
第2-16図　遺物集中７（２）…… 19
第2-17図　遺物集中７（３）…… 20
第2-18図　遺物集中８ …… 21
第2-19図　遺物集中９（１）…… 24
第2-20図　遺物集中９（２）…… 25
第2-21図　遺物集中９（３）…… 26
第2-22図　遺物集中10 …… 27
第2-23図　集積遺構及び出土遺物 …… 28
第2-24図　特殊遺構：大型軽石加工品 …… 29
第2-25図　縄文時代土器・土製品出土状況図 …… 33
第2-26図　縄文時代後期土器（Ⅰ類・Ⅱ類）
　　出土状況図 …… 34
第2-27図　縄文時代後期土器（Ⅲ類・Ⅳ類）
　　出土状況図 …… 35
第2-28図　縄文時代後期土器（Ⅴ類・Ⅵ類）
　　出土状況図 …… 36
第2-29図　縄文時代後期土器（Ⅶ類・底部）
　　出土状況図 …… 37
第2-30図　縄文時代後期土製品・縄文時代
　　早期～中期土器出土状況図 …… 38
第2-31図　Ⅰ類土器（１）…… 39
第2-32図　Ⅰ類土器（２）…… 41
第2-33図　Ⅰ類土器（３）…… 42
第2-34図　Ⅰ類土器（４）…… 43
第2-35図　Ⅰ類土器（５）…… 44
第2-36図　Ⅰ類土器（６）…… 45
第2-37図　Ⅱ類土器（１）…… 47
第2-38図　Ⅱ類土器（２）…… 49
第2-39図　Ⅱ類土器（３）…… 50
第2-40図　Ⅲ類土器（１）…… 52
第2-41図　Ⅲ類土器（２）…… 53
第2-42図　Ⅲ類土器（３）…… 54
第2-43図　Ⅲ類土器（４）…… 55
第2-44図　Ⅲ類土器（５）…… 56
第2-45図　Ⅲ類土器（６）…… 57
第2-46図　Ⅲ類土器（７）…… 58
第2-47図　Ⅲ類土器（８）…… 59
第2-48図　Ⅲ類土器（９）…… 60
第2-49図　Ⅲ類土器（10）…… 61
第2-50図　Ⅲ類土器（11）…… 62
第2-51図　Ⅲ類土器（12）…… 63
第2-52図　Ⅲ類土器（13）…… 64
第2-53図　Ⅲ類土器（14）…… 65
第2-54図　Ⅲ類土器（15）…… 67
第2-55図　Ⅲ類土器（16）…… 68
第2-56図　Ⅲ類土器（17）…… 69
第2-57図　Ⅲ類土器（18）…… 70
第2-58図　Ⅲ類土器（19）…… 71
第2-59図　Ⅲ類土器（20）…… 72
第2-60図　Ⅲ類土器（21）…… 73
第2-61図　Ⅲ類土器（22）…… 74
第2-62図　Ⅲ類土器（23）…… 75
第2-63図　Ⅲ類土器（24）…… 77
第2-64図　Ⅲ類土器（25）…… 78
第2-65図　Ⅲ類土器（26）…… 79
第2-66図　Ⅲ類土器（27）…… 81
第2-67図　Ⅲ類土器（28）…… 82
第2-68図　Ⅲ類土器（29）…… 83
第2-69図　Ⅲ類土器（30）…… 84
第2-70図　Ⅲ類土器（31）…… 85
第2-71図　Ⅳ類土器（１）…… 87
第2-72図　Ⅳ類土器（２）…… 88
第2-73図　Ⅳ類土器（３）…… 89
第2-74図　Ⅳ類土器（４）…… 91
第2-75図　Ⅳ類土器（５）…… 92
第2-76図　Ⅳ類土器（６）…… 93
第2-77図　Ⅳ類土器（７）…… 94
第2-78図　Ⅳ類土器（８）…… 95
第2-79図　Ⅳ類土器（９）…… 96
第2-80図　Ⅳ類土器（10）…… 97
第2-81図　Ⅳ類土器（11）…… 99
第2-82図　Ⅳ類土器（12）…… 100
第2-83図　Ⅴ類土器（１）…… 102

第2-84図　Ⅴ類土器（2）…… 104
第2-85図　Ⅴ類土器（3）…… 105
第2-86図　Ⅴ類土器（4）…… 106
第2-87図　Ⅴ類土器（5）…… 107
第2-88図　Ⅴ類土器（6）…… 109
第2-89図　Ⅴ類土器（7）…… 110
第2-90図　Ⅴ類土器（8）…… 111
第2-91図　Ⅴ類土器（9）…… 112
第2-92図　Ⅵ類土器（1）…… 114
第2-93図　Ⅵ類土器（2）…… 116
第2-94図　Ⅵ類土器（3）…… 117
第2-95図　Ⅵ類土器（4）…… 118
第2-96図　Ⅵ類土器（5）…… 119
第2-97図　Ⅵ類土器（6）…… 121
第2-98図　Ⅵ類土器（7）…… 122
第2-99図　Ⅵ類土器（8）…… 124
第2-100図　Ⅵ類土器（9）…… 125
第2-101図　Ⅵ類土器（10）…… 126
第2-102図　Ⅵ類土器（11）…… 127
第2-103図　Ⅵ類土器（12）…… 129
第2-104図　Ⅵ類土器（13）…… 130
第2-105図　Ⅵ類土器（14）…… 131
第2-106図　Ⅵ類土器（15）…… 132
第2-107図　Ⅵ類土器（16）…… 133
第2-108図　Ⅵ類土器（17）…… 134
第2-109図　Ⅵ類土器（18）…… 136
第2-110図　Ⅵ類土器（19）…… 137
第2-111図　Ⅵ類土器（20）…… 139
第2-112図　Ⅵ類土器（21）…… 140
第2-113図　Ⅵ類土器（22）…… 142
第2-114図　Ⅶ類土器（1）…… 144
第2-115図　Ⅶ類土器（2）…… 145
第2-116図　底部（1）…… 146
第2-117図　底部（2）…… 147
第2-118図　底部（3）…… 148
第2-119図　底部（4）…… 150
第2-120図　底部（5）…… 151
第2-121図　底部（6）…… 152
第2-122図　土製品（1）…… 153
第2-123図　土製品（2）…… 154
第2-124図　土製品（3）…… 155
第2-125図　土製品（4）…… 156
第2-126図　土製品（5）…… 157
第2-127図　土製品（6）…… 158
第2-128図　土製品（7）…… 159
第2-129図　縄文時代中期以前の土器・土製品（1）…… 161
第2-130図　縄文時代中期以前の土器・土製品（2）…… 162
第2-131図　縄文時代後期石器・石製品出土状況図（1）…… 184
第2-132図　縄文時代後期石器・石製品出土状況図（2）…… 185
第2-133図　縄文時代後期石器・石製品出土状況図（3）…… 186
第2-134図　縄文時代後期石器・石製品出土状況図（4）…… 187
第2-135図　打製石鏃（1）Ⅰ類…… 188
第2-136図　打製石鏃（2）Ⅰ類・Ⅱ類…… 190
第2-137図　打製石鏃（3）Ⅱ類…… 191
第2-138図　打製石鏃（4）Ⅱ類…… 192
第2-139図　打製石鏃（5）Ⅲ類…… 193
第2-140図　打製石鏃（6）Ⅲ類…… 194
第2-141図　打製石鏃（7）Ⅳ類・Ⅴ類…… 195
第2-142図　打製石鏃（8）Ⅵ類…… 196
第2-143図　石錐（1）…… 197
第2-144図　石錐（2）尖頭器・異形石器…… 198
第2-145図　石匙・スクレイパー（1）…… 199
第2-146図　スクレイパー（2）…… 200
第2-147図　使用痕剥片・加工痕のある剥片（1）…… 201
第2-148図　使用痕剥片・加工痕のある剥片（2）…… 202
第2-149図　石核（1）…… 203
第2-150図　石核（2）…… 204
第2-151図　磨製石斧（1）Ⅰ類…… 205
第2-152図　磨製石斧（2）Ⅱ類…… 206
第2-153図　磨製石斧（3）Ⅲ類・Ⅳ類…… 207
第2-154図　磨製石斧（4）Ⅳ類…… 208
第2-155図　擦切石器…… 209
第2-156図　打製石斧（1）Ⅰ類…… 210
第2-157図　打製石斧（2）Ⅰ類…… 211
第2-158図　打製石斧（3）Ⅰ類・Ⅱ類…… 212
第2-159図　打製石斧（4）Ⅲ類…… 213
第2-160図　磨石・敲石（1）…… 214
第2-161図　磨石・敲石（2）…… 215
第2-162図　磨石・敲石（3）…… 216
第2-163図　磨石・敲石（4）…… 217
第2-164図　礫器…… 218
第2-165図　石皿・台石（1）…… 219
第2-166図　石皿・台石（2）…… 220
第2-167図　石皿・台石（3）…… 221
第2-168図　軽石製品（1）Ⅰ類…… 222
第2-169図　軽石製品（2）Ⅰ類…… 223
第2-170図　軽石製品（3）Ⅱ類…… 224
第2-171図　軽石製品（4）Ⅱ類…… 225
第2-172図　軽石製品（5）Ⅲ類…… 226

第2-173図　軽石製品（6）Ⅲ類…… 227
第2-174図　軽石製品（7）Ⅲ類…… 228
第2-175図　軽石製品（8）Ⅲ類…… 229
第2-176図　軽石製品（9）Ⅳ類…… 230
第2-177図　軽石製品（10）Ⅳ類・Ⅴ類…… 231
第2-178図　軽石製品（11）Ⅴ類…… 232
第2-179図　軽石製品（12）Ⅴ類・Ⅵ類…… 233
第2-180図　石製品…… 234

表　目　次

第2-1表　縄文時代後期遺構内出土遺物観察表（土器・土製品）（1）…… 30
第2-2表　縄文時代後期遺構内出土遺物観察表（土器・土製品）（2）…… 31
第2-3表　縄文時代後期遺構内出土遺物観察表（石器・石製品）…… 31
第2-4表　縄文時代遺物観察表（土器・土製品）（1）…… 163
第2-5表　縄文時代遺物観察表（土器・土製品）（2）…… 164
第2-6表　縄文時代遺物観察表（土器・土製品）（3）…… 165
第2-7表　縄文時代遺物観察表（土器・土製品）（4）…… 166
第2-8表　縄文時代遺物観察表（土器・土製品）（5）…… 167
第2-9表　縄文時代遺物観察表（土器・土製品）（6）…… 168
第2-10表　縄文時代遺物観察表（土器・土製品）（7）…… 169
第2-11表　縄文時代遺物観察表（土器・土製品）（8）…… 170
第2-12表　縄文時代遺物観察表（土器・土製品）（9）…… 171
第2-13表　縄文時代遺物観察表（土器・土製品）（10）…… 172
第2-14表　縄文時代遺物観察表（土器・土製品）（11）…… 173
第2-15表　縄文時代遺物観察表（土器・土製品）（12）…… 174
第2-16表　縄文時代遺物観察表（土器・土製品）（13）…… 175
第2-17表　縄文時代遺物観察表（土器・土製品）（14）…… 176
第2-18表　縄文時代遺物観察表（土器・土製品）（15）…… 177
第2-19表　縄文時代遺物観察表（土器・土製品）（16）…… 178
第2-20表　縄文時代遺物観察表（土器・土製品）（17）…… 179
第2-21表　縄文時代遺物観察表（土器・土製品）（18）…… 180
第2-22表　縄文時代遺物観察表（土器・土製品）（19）…… 181
第2-23表　縄文時代遺物観察表（土器・土製品）（20）…… 182
第2-24表　中津野遺跡における石材分類…… 183
第2-25表　縄文時代遺物観察表（石器・石製品）（1）…… 235
第2-26表　縄文時代遺物観察表（石器・石製品）（2）…… 236
第2-27表　縄文時代遺物観察表（石器・石製品）（3）…… 237
第2-28表　縄文時代遺物観察表（石器・石製品）（4）…… 238
第2-29表　縄文時代遺物観察表（石器・石製品）（5）…… 239
第2-30表　縄文時代遺物観察表（石器・石製品）（6）…… 240
第2-31表　縄文時代遺物観察表（石器・石製品）（7）…… 241
第2-32表　縄文時代遺物観察表（石器・石製品）（8）…… 242
第2-33表　縄文時代遺物観察表（石器・石製品）（9）…… 243
第2-34表　縄文時代遺物観察表（石器・石製品）（10）…… 244
第2-35表　縄文時代遺物観察表（石器・石製品）（11）…… 245
第2-36表　縄文時代遺物観察表（石器・石製品）（12）…… 246

第６章　縄文時代早期～後期の調査

第１節　遺構

縄文時代早期から後期の調査で検出した遺構は，縄文時代後期の所産と考えられるもののみであった。集石２基，土坑３基，埋設土器１基，遺物集中10か所，石材剥片が出土した集積遺構１か所，特殊遺構１基を検出した。これらの遺構は12区から26区にかけて検出されたが，その大半は18区から21区に集中する。遺構の配置図は，第2-1図に示した。

なお，本報告書では遺構番号を通し番号としていることから，この時期の集石は２号から，土坑は31号から番号を付してある。また，遺物番号は1001から，挿図番号は2-1図から番号を付してある。

１　集石

集石２号（第2-2図）

集石２号はＤ－26区で検出され，礫18個で構成される。遺構の主体部は0.9×0.4mの細長い楕円形状を呈し，礫16個からなる。礫の上下動は少なく，掘り込みも見られない。

集石３号（第2-2図）

集石３号はＣ－18区で検出され，礫15個で構成される。遺構の主体部にある礫13個は，0.4m四方の中にほぼ収まっている。その中心部からやや北側に樹痕があることから，礫数個が散逸した可能性がある。礫の上下動は少なく，掘り込みも見られない。

２　土坑

土坑31号（第2-3図1001・1002）

土坑31号は，Ｄ－21区で検出した。卵型の楕円を呈する平面形は，長軸0.9m，短軸0.6mを測る。土坑の大部分は深さ５㎝程度と浅いが，南西端部に長軸0.48m，短軸0.25m，深さ約0.25mの小ピットが掘り込まれているのが特徴的である。

土坑の中央部で，床面及び床面から若干浮いた状態で深鉢の完形品２個体が出土した。1001は口径15.5㎝，底径７㎝，高さ20㎝を測る松山式土器の完形品である。やや開く断面三角形の口縁部，若干膨らむ胴部，安定した平底からなり，口縁部外面には連続する斜位の貝殻腹縁部による刺突文が施されている。胴部の内外面に貝殻条痕がみられる。1002は口径18.2㎝，底径9.4㎝，高さ18.2㎝を測る松山式土器の完形品である。1001よりも口径が大きいが高さが低いことから，やや寸胴にみえる。断面三角形を呈する口縁部の外面には，連続する斜位の貝殻刺突文が施されている点は1001と同様である。底部から胴部への立ち上がり部分に若干くびれが見られる点と胴部の内外面にあまり貝殻条痕が見られずナデ仕上げになっている点が1001との相違点である。

土坑の性格・機能については不明であるが，土坑の端部に小ピットが存在することと深鉢の完形品が２点も出土していることが特徴的であるといえる。

土坑32号（第2-3図）

土坑32号は，土坑31号と同様にＤ－21区で検出した。直径が約0.15mの柱穴状の円形ピットである。検出面からの深さは７㎝を測る。特徴的なことはピットにほぼ収まる角礫が出土したことである。角礫は検出面から約18㎝も上位から検出されており，いわゆる「立石」状を呈する状況で記録されている。当時の地表面と本土坑の検出面との間には，若干ギャップがあると思われる。周縁部に他の遺構や特殊な遺物の出土は確認されなかった。当時角礫が地表から飛び出した状態であったのか，あるいは全てピット内（地中）に埋まっていたのかについては不明である。

土坑33号（第2-4図1003～1008）

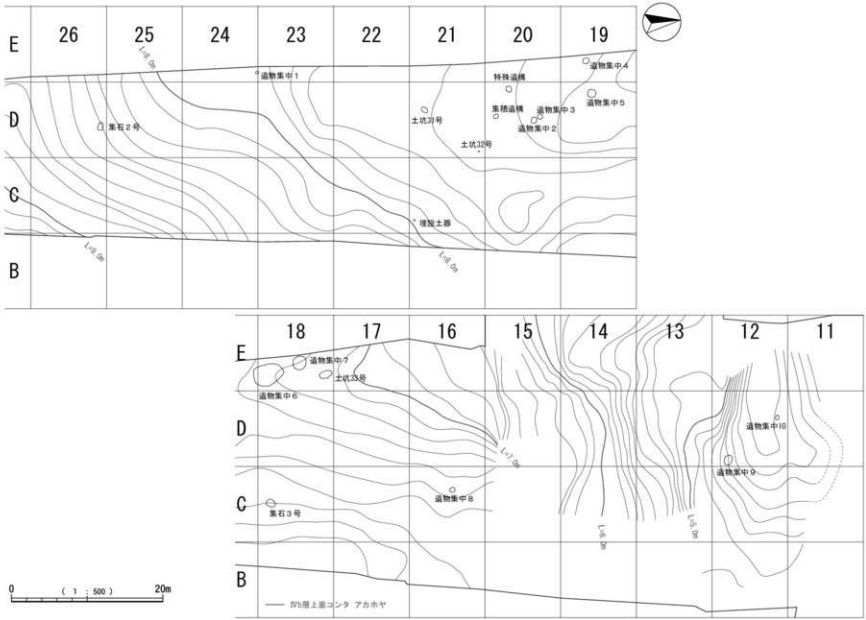
土坑33号は，他の２基とは離れたＥ－18区で検出した。平面形は長軸が1.67m，短軸が１mの長楕円形状を呈する。深さが12～22㎝程度で，やや扁平な断面形を呈している。土坑の南西隅は撹乱を受けている。

20点弱の遺物が出土しているが，特徴的な土器６点を掲載した。1003～1005は，深鉢の口縁部片である。いずれも棒状工具による沈線で文様を構成するもので，指宿式土器と考えられる。1005は，若干山形を呈する波状口縁の一部である。内外面ともにほぼ丁寧なナデ仕上げを行っている。1006は，底径が11.6㎝を測る深鉢の底部である。幅約３㎝の接地面がドーナツ状に巡る底面を有し，中央部は直径５㎝，高さ0.7㎝ほどの上げ底状を呈している。1007と1008は，小型深鉢の底部片である。1007は，底径５㎝で若干上げ底気味（0.3㎝程度）の底部である。胴部への立ち上がり部分を打ち欠き，円形状に仕上げた可能性も考えられる。また，意図的かどうかが不明ながら，底部外面中央部に刺突文状の凹部が見られる。1008は，推定底径5.5㎝の底部片である。底部外面中央部が，ごくわずかに上げ底気味を呈している。底部片の側面を打ち欠き，円盤形土製品様を呈している。長軸が5.5㎝，短軸が４㎝を測り，小判形になるように仕上げてあるのが特徴的である。

３　埋設土器（第2-4図1009）

Ｃ－21区において検出した。土器が出土した遺構は，直径0.25m前後の円形ピットと考えられるものである。その北側は樹痕によって撹乱された状態で検出された。深さは，最大で７㎝であった。

1009は，遺構内から出土した深鉢の底部片である。第2-4図に示したように，天地を逆に伏せた状態で出土し



第２－１図　縄文時代後期の遺構配置図

た。遺構本来の深さが不明なこともあり，遺構と底部片との関係についての詳細は不明であるが，意図的に埋設したものと考えたい。底径は11.5cm，胴部の立ち上がりが最大7.7cmの高さを測る。内外面共に丁寧なナデ仕上げを行っている。底面から底端部にかけて器表が一部剥落している点が特徴的である。

4　遺物集中箇所

遺物が集中して出土した部分が，低湿地部の12区から２か所，低地部の16区から23区にかけて８か所の計10か所確認された。ここでは遺物集中１～10として報告する。

なお，遺物集中内の土器と包含層出土の土器との接合状況について第2-5・6図に示した。

遺物集中１（第2-7図1010）

1010はⅣｂ層上面，Ｅ－23区とＥ－24区の境界付近でまとまって出土した土器である。数点が接合しなかったが，１個体と考えられる。復元口径が19.2cm，残存器高が18.6cmを測る深鉢で，口縁は平口縁である。底部と胴部下半が欠損した状態であった。口縁部は断面三角形状を呈するが，文様は施されていない。内外面ともに浅い貝殻条痕が残るが，全体的に丁寧なナデ仕上げが行われている。以上の特徴から，松山式土器の無文土器と考えられる。当初，土坑の存在も想定されたが，精査したところ樹痕であることが判明したことから，遺物包含層中の土器集中箇所として捉えた。

遺物集中２（第2-7図1011）

遺物集中２はほぼ１個体の土器がＤ－20区のⅢ層上面から，約40.0cm四方の中にまとまって出土したものである。遺物集中３とは近接した関係にある。

1011が接合した土器の実測図で，口径27.2cmを測る深鉢である。口縁部下約２cmに径25.4cmのくびれ部があり，同下約10cmで27.4cmの胴部最大径となる。残存部の器高は18.2cmである。内外面ともに丁寧なナデ仕上げが行われているが，大きな特徴は，口縁部下約９cmの幅で帯状に施された文様を特徴とする。文様は幅約0.3cmの沈線と先端が鋭利な竹串状工具による刺突文の組み合わせからなり，口唇部には最低２か所の波頂部が存在する。波頂部を基準として展開される文様は，直線文と逆三角形文の構成を軸として施されている。全体的な特徴から指宿式土器の範疇と考えられるが，刺突文との組み合わせは複雑かつ重厚な印象を与えている。胎土に白色や茶色の砂粒を含むが，特に白色砂粒は目立っている。

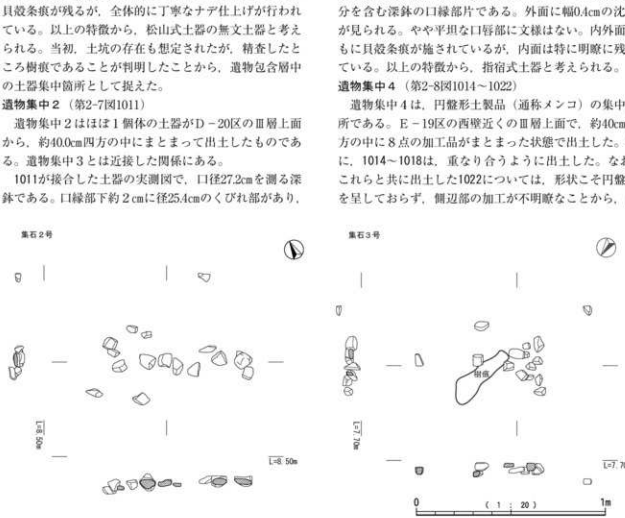
遺物集中３（第2-7図1012・1013）

遺物集中３は，約20点の土器片がＤ－20区のⅢ層上面でまとまって出土した。

1012は16点の土器片が接合したもので，復元口径18.4cmを測る。ほぼ直口する深鉢の口縁部で，文様は施されない。比較的平坦な口唇部も無文である。内外面ともに丁寧なナデ仕上げが施されているが，粘土幅約15cm程度の接合痕が数か所で観察される。1013は，山形波頂部分を含む深鉢の口縁部片である。外面に幅0.4cmの沈線が見られる。やや平坦な口唇部に文様はない。内外面ともに貝殻条痕が施されているが，内面は特に明瞭に残っている。以上の特徴から，指宿式土器と考えられる。

遺物集中４（第2-8図1014～1022）

遺物集中４は，円盤形土製品（通称メンコ）の集中箇所である。Ｅ－19区の西壁近くのⅢ層上面で，約40cm四方の中に８点の加工品がまとまった状態で出土した。特に，1014～1018は，重なり合うように出土した。なお，これらと共に出土した1022については，形状こそ円盤形を呈しておらず，側辺部の加工が不明瞭なことから，口



第2-2図　集石２・３号

土坑31号

遺物出土状況(下段)

平面図

(上段)

1002

1001

L=7.80m

埋土
黄褐色土(Ⅱ層相当)と明黄褐色砂質土(Ⅲa層相当)の混土。
しまりは弱い。

1001

土坑32号

平面図

遺物出土状況

L=7.80m

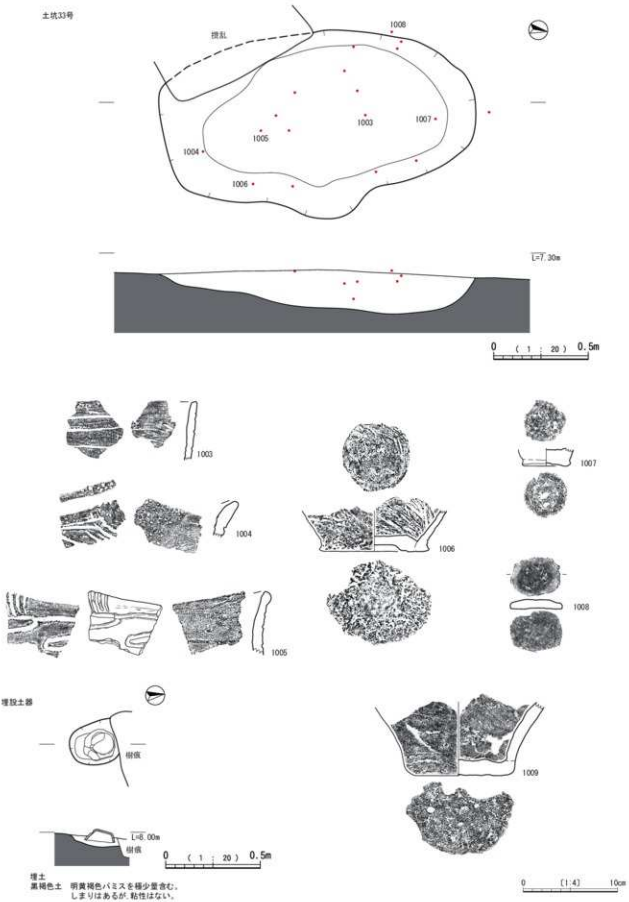
埋土
黒褐色土　しまりがあり,粘性もややある。

1002

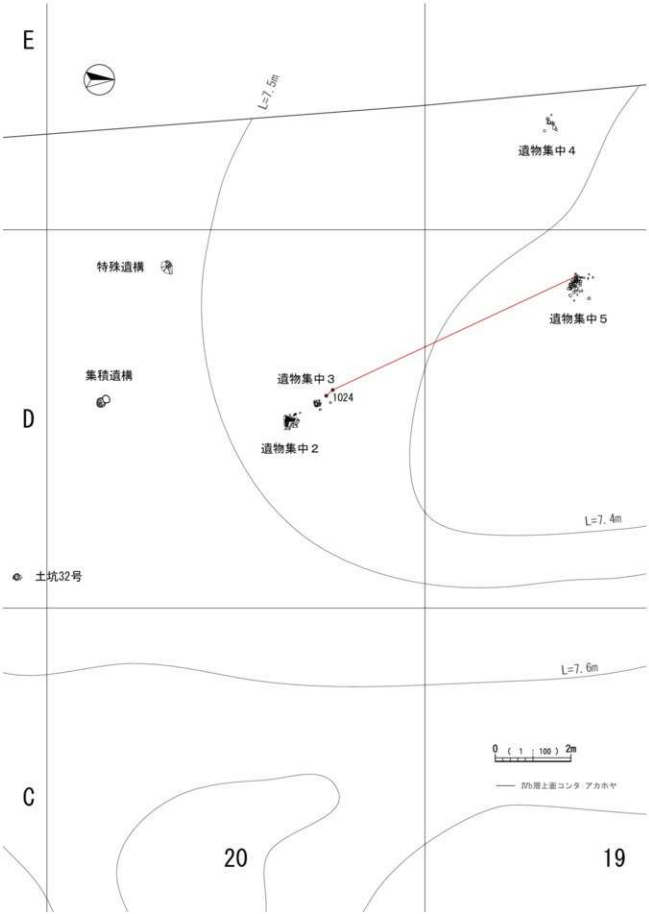
0　(1:20)　0.5m

0　(1:4)　10cm

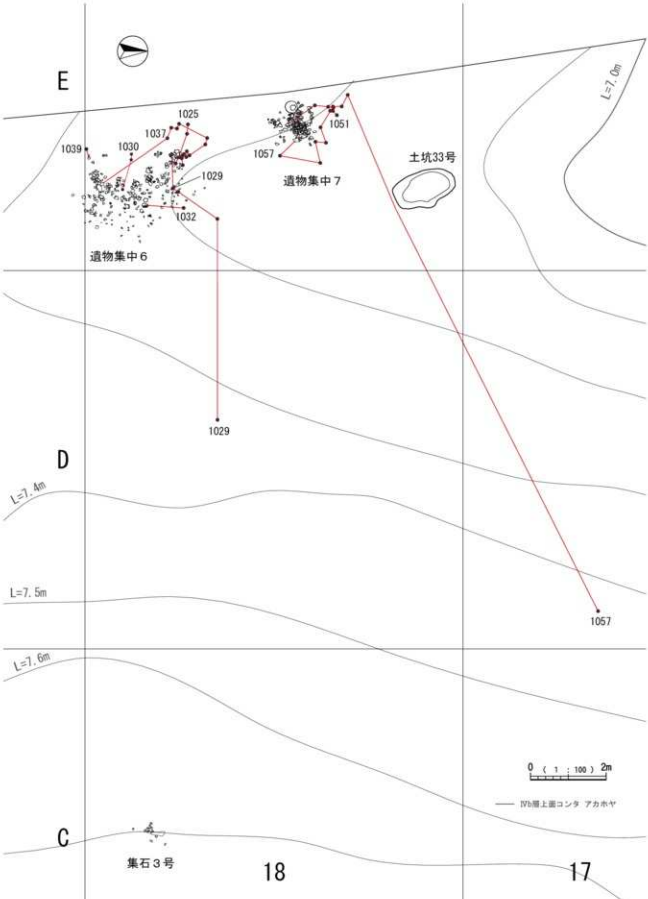
第2-3図　土坑31・32号及び土坑31号出土遺物



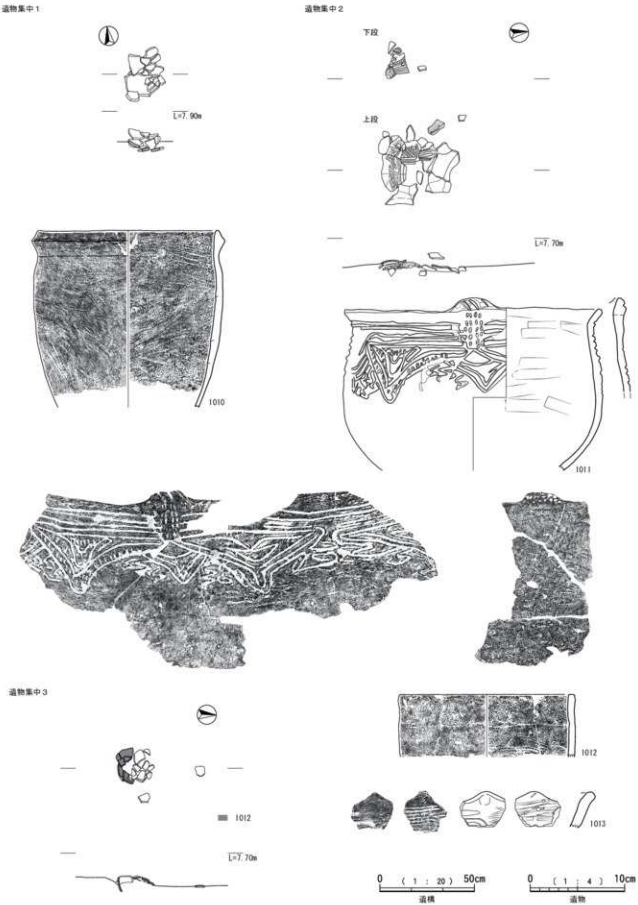
第2-4図　土坑33号・埋設土器及び出土遺物



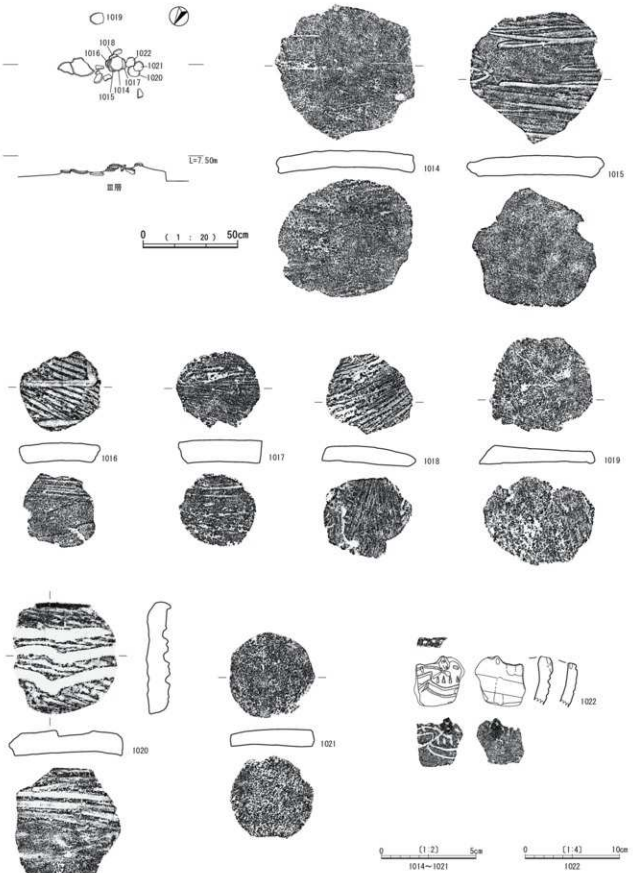
第2-5図　遺物集中と包含層出土土器の接合状況図（１）



第2-6図　遺物集中と包含層出土土器の接合状況図（２）


遺物集中1
L=7.90m
遺物集中2
下段
上段
L=7.70m
1010
1011
遺物集中3
1012
L=7.70m
1012
1013
0 (1:20) 50cm
遺構
0 (1:4) 10cm
遺物

第2-7図　遺物集中1～3


1019
1018
1016
1022
1021
1020
1017
1014
1015
D
L=7.50m
III層
0 (1:20) 50cm
1014
1015
1016
1017
1018
1019
1020
1021
1022
0 (1:2) 5cm
1014～1021
0 (1:4) 10cm
1022

第2-8図　遺物集中4

縁部片として取り上げているが，加工品の準備品としての意味合いも否定できない。1014は，直径7.3cmのほぼ円形を呈する加工品である。内外面ともに丁寧なナデ調整が施された深鉢の胴部片と考えられる。側辺部は多少凹凸感があるが，丁寧な打ち欠き作業を行っている。遺物がまとまって出土したほぼ中央部，かつ最も上位から出土した。1015は，長軸7.3cm，短軸6.8cmを測る略円形の加工品である。1014とほぼ同規模で，その直下から出土した。表には幅0.1cmの細沈線による直線文が施されている。深鉢の口縁部下～胴部上半にかけての部位と考えられる。内面は丁寧なナデ調整が見られる。側辺には丁寧な打ち欠き作業の痕が残る。1016は，長軸4.3cm，短軸3.8cmを測るほぼ円形の加工品で，1015の直下から出土した。上部から出土した1014や1015と比較すると約60%ほどの大きさである。表には貝殻条痕の上に幅0.25cmの直線文が施されている。深鉢の口縁部下に位置すると考えられる。裏面には貝殻条痕とケズリ状のナデ調整の跡が見られる。側辺には丁寧な打ち欠き作業の跡が残る。まとまって出土した1017・1018とほぼ同規模を呈する。内外面ともに貝殻条痕を施した後に丁寧なナデ仕上げを行っている。深鉢の胴部片と考えられる。側辺は丁寧な打ち欠き作業の痕が残る。1017は，長軸4.3cmを測るほぼ円形の加工品である。1018は，長軸4.9cm，短軸4.1cmを測るほぼ略円形の加工品である。まとまって出土した1016・1017とほぼ同規模を呈する。内外面ともに貝殻条痕が見られるが，内面はナデ仕上げが行われ，条痕は浅い。一部接合痕も観察できる。深鉢の胴部片と考えられる。側辺は丁寧な打ち欠き作業の痕が残る。1019は，他の加工品とは若干（15cm程度）離れて出土した。長軸6.1cm，短軸5.1cmを測る深鉢の胴部片である。内外面ともに丁寧なナデ仕上げが施されている。形状は1014・1015と類似しているが，1019の方が80%ほどの形状と小さい。1020～1022の３点は，1014～1016の集合よりやや西側で出土した。1020は，長軸６cm，短軸5.8cmを測る略円形の加工品である。内外面ともに貝殻条痕の後，一部丁寧なナデ仕上げが見られる。深鉢の口縁部片を利用した加工品で，表には幅0.4cmを測る３本の沈線が見られる。側辺は丁寧な打ち欠き作業の痕が残る。1021は，長軸4.7cmを測るほぼ円形の加工品である。内外面ともに丁寧なナデ調整が施されている。深鉢の胴部片と考えられる。側辺は一部研磨した部分が見られるほど丁寧に仕上げられている。以上が円盤形土製加工品と考えられる８点である。

1022は，若干内湾する山形波頂部を含む深鉢の口縁部片である。外面には幅0.1～0.2cmの細沈線と先端の鋭利な竹串状工具による刺突文を組み合わせた文様が施されている。刺突文は，口唇部にも見られる。前述のとおり，８点の円盤形土製加工品とはやや内容が異なる土器片である。しかし，加工品と共にまとまって出土していることを考慮すると，加工の途中，あるいは加工の準備品的な様相もあり，注目される。以上，文様が施された1015・1016・1020・1022は指宿式土器と考えられることから，９点のまとまりは指宿式土器期の所産である可能性が高い。

遺物集中５（第2-9図1023・1024）

遺物集中５は，Ｄ－19区のⅢ層上面で土器がまとまって出土したものである。２個体を図化することができた。

1023は集合の中心をなす土器で，復元口径30.8cmを測る深鉢である。底部から胴部下半は欠損している。残存部の器高は25.5cmである。口縁部外面には，幅約0.4cmの沈線によるいわゆる靴形文が横方向に連続して施されている。靴形１単位の長さは，６～９cmとやや不規則である。口唇部には最低２か所の波頂部（約1.0cmの山形）が存在する。頂部の内面には２本の短沈線が縦位に施されている。内外面ともに丁寧かつ明瞭な貝殻条痕が施されているが，口縁部直下内外面では，横方向の丁寧なナデ仕上げが行われている。1024は口径22.2cmを測り，胴部が大きく張り出す「壺」状の器形を有する土器である。口縁部下に２本の平行沈線を配し，さらにその下位に沈線間を充填するように貝殻腹縁部による刺突文を施したものである。内外面ともに丁寧なケズリ，ナデ調整が見られる。胎土には白色の砂粒が含まれている。

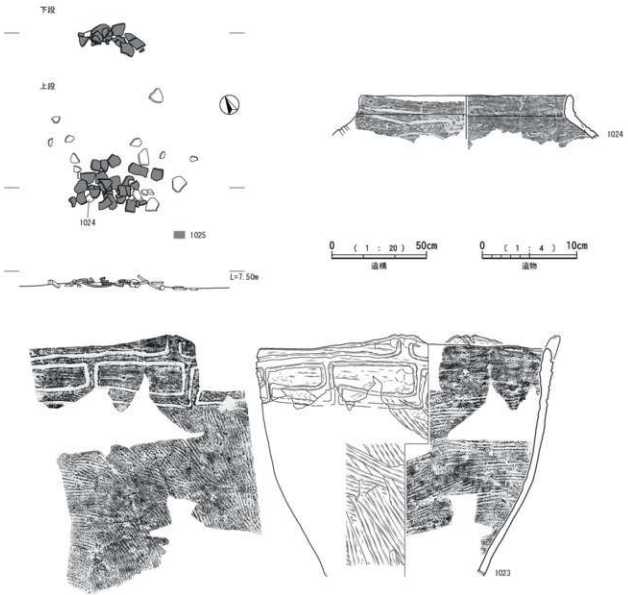
遺物を取り上げた後，下面の断ち割り調査を行ったが，掘り込み等の変化は確認できなかった。

遺物集中６（第2-10～14図1025～1046）

遺物集中６はＥ－18区の西壁近く，Ⅱｂ層下部からⅢ層上部にかけて多くの土器がまとまって出土した箇所で，今回取り上げる集中箇所の中では規模が最大で出土量も最も多かった。

1025～1030は，口縁部下にいわゆる靴形文が施されている土器群である。文様の全容は明らかでないが，1031～1036も同文様系統と考えられる土器である。1025は，口径28.8cmを測る深鉢である。残存器高は，25.7cmで底部付近は欠けている。文様は口縁部下に口縁部と平行する１本の沈線（幅0.3cmほど）が施され，その下位に左向き長靴様の靴形文が横方向に連続して施されている。最大径が口縁部下９cmほどの胴部にあり，口縁部はやや内傾気味である。口唇部は無文で，舌状の断面形を呈する。内外面ともに丁寧なナデ調整が見られる。外面にはススの付着が確認できる。胎土に白色や茶色の砂粒を含む。1026は，口径36.2cm，底径９cm，器高32.4cmを測る深鉢の完形品である。約1.5m四方の広がりの中で出土した20数点が接合した。文様はⅢ層部下に口縁部と平行する１本の沈線（幅0.3cmほど）が施され，その下位に左向き長靴様の靴形文が横方向に連続して施されている。基本的には1025と同様であるが，1026は最大径が口

縁部にあり，底部から開きながら口縁部へと立ち上がるバケツ状の器形を呈している。口唇部は無文で，やや舌状の断面形を呈する。内外面ともに若干貝殻条痕が残るものの，丁寧なナデあるいはケズリ（特に外面は顕著）調整が見られる。胎土に白色や茶色の粒子を含む。1027は，復元口径25.8cm，残存器高14.4cmを測る深鉢である。口縁部は，ほぼ直口して立ち上がっている。口唇部断面形は，舌状を呈し無文である。1025・1026と同様に口縁部下の沈線，靴形文という組み合わせの文様を有するが，施文がやや雑で，安定感に欠ける文様となっている。外面には貝殻条痕が残り，一部ナデ仕上げを行っている。また，内面は丁寧なナデ仕上げにより，平滑な面を形成している。胎土に白色砂粒を多く含む。1028も左向きの靴形文を有する深鉢の口縁部片である。口唇部断面形は，舌状で無文である。外面に横位の貝殻条痕を残しながら，丁寧なナデ仕上げを行っている。内面は口縁部付近が横位，その下位が縦位のケズリ調整痕が明瞭に残る。胎土に白色砂粒を含む。1029・1030は，口縁部下に右向き長靴様の靴形文を有する土器である。また，1031もそれに類似する資料と考えられる。1029は，復元口径33.1cmを測る深鉢の口縁部片である。平坦な口唇部の器厚が約1.5cmあり，胴部の約２倍を有するという特徴をもつ。口縁部下に口縁部と平行する１本の沈線（幅0.2cmほど）が施され，その下位に右向き長靴様の靴形文が横方向に連続して施されている。最大径が口縁部にあるバケツ状の器形を有するものと考えられる。内外面ともに丁寧なナデ仕上げが行われている。白色砂粒を多く含む。1030は，復元口径31cm，残存器高18.7cmを測る深鉢である。やや平坦な面を有する口唇部は無文である。口縁部下に口縁部と平行する幅0.3cmほどの１本の沈線が施され，その下位に右向き長靴様の靴形文が横方向に連続して施されている。ただ，1025～1029の靴形文と異な



第2-9図　遺物集中５

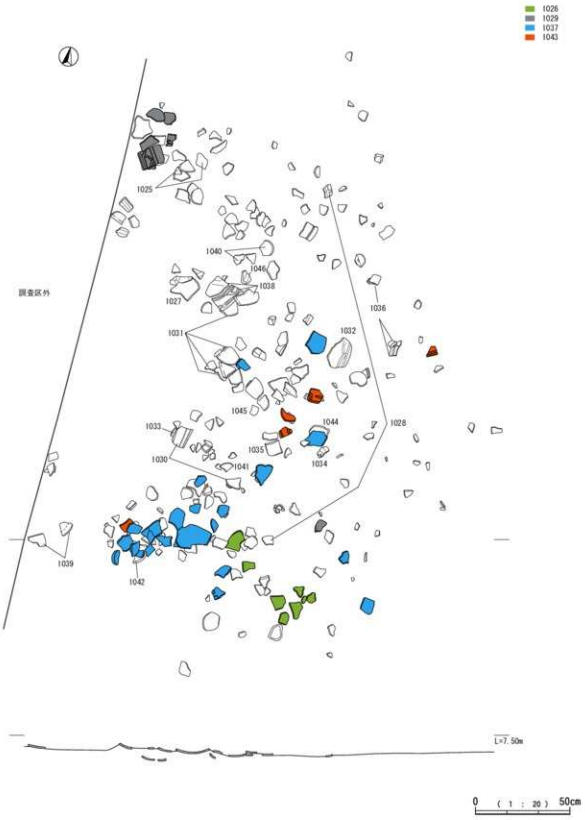
り，右向きの長靴部分の沈線に鋸歯状あるいは曲線的にアレンジが見られるのが特徴的である。1029と同様に，最大径が口縁部にあるバケツ状の器形を有するものと考えられる。外面は丁寧なナデ仕上げを行っているが，若干貝殻条痕が残っている。内面には貝殻条痕が比較的明瞭に残っている。白色や茶色の砂粒を含む。1031は最大径が口縁部下約７cmの胴部にある器形で，口縁部が内湾気味に立ち上がる深鉢である。口唇部はやや平坦で無文である。口縁部下に口縁部と平行する幅0.4cmほどの１本の沈線が施され，その下位に右向き長靴様の靴形文と考えられる沈線が施された深鉢片である。施文はやや雑然としており，安定感に欠けている。内外面ともに明瞭な貝殻条痕が見られる。外面には，ススの付着が見られる。なお，本遺物は，放射性炭素年代測定を実施した。1032は，復元口径29.5cmを測る深鉢である。残存器高は11.5cmである。最大径が，口縁部下約5.5cmの胴部にある。口縁部はやや内湾気味となっているが，端部は「く」の字状に若干開く形状を呈している。口唇部断面はやや丸味を帯びている。口縁部下に口縁部と平行する幅0.3cmほどの１本の沈線が施され，その下位に２本の平行沈線が，靴形文を意識したような状態で施されている。胎土に白色や茶色の砂粒を含む。

1033～1036は，靴形文あるいはそれに類する文様を有すると考えられる土器片である。1033は口縁部下に口縁部と平行する幅0.4cmほどの１本の沈線が施され，その下位に向き不明ではあるが靴形文様の沈線文が見られる。断面形がやや舌状を呈する口唇部近くで若干外へ開く。内外面に貝殻条痕が残る。1034は，口縁部下に幅0.4cmほどの３本の平行沈線が見られる口縁部小片である。断面形が舌状を呈する口唇部には，内外をまたいで幅１cm強の粘土紐の貼付文が見られる。口縁部は，若干外傾気味に立ち上がっている。内外面に丁寧なナデ調整痕が見られる。1035は，口縁部がごくわずかに内傾する器形を有する。口唇部断面形は舌状を呈し，無文である。口縁部下に２本の平行沈線が斜位に施されるもので，全形は「コ」ないし「ロ」字を１単位とする文様が横位に展開されるパターンと考えられる。内外面共に貝殻条痕が残る。茶色の砂粒を多く含む。1036は，復元口径32.0cmを測る口縁部片である。口唇部断面形は舌状を呈し，無文である。ほぼ直口する器形を有している。口縁部下に口縁部と平行する幅0.4～0.5cmほどの１本の沈線が施され，その下位に靴形文様の沈線文が展開すると考えられる。外面及び口縁部内面はナデ調整痕，内面にはケズリ調整痕が残る。

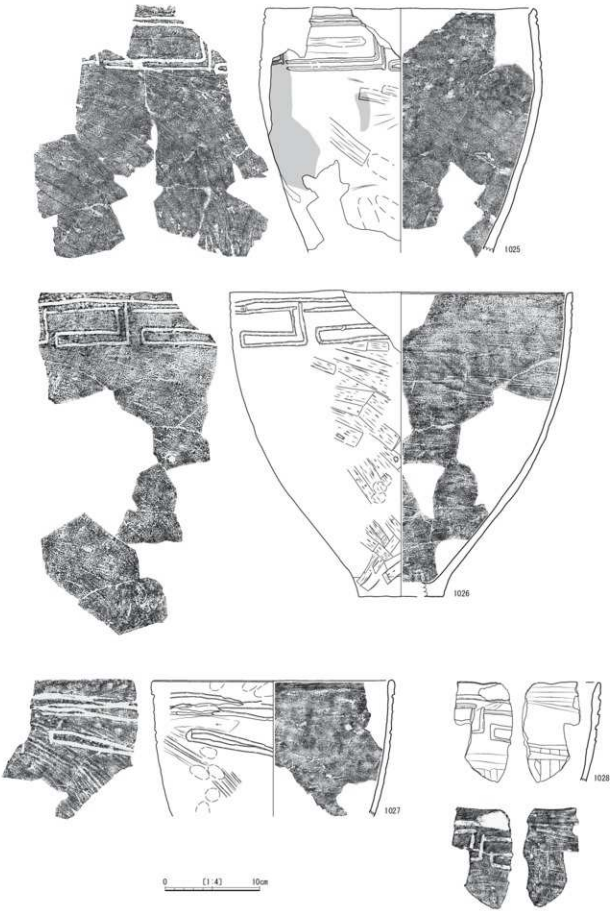
1037と1038は口縁部下に施す沈線の組み合わせによって，三角形文を展開させている土器である。1037は，復元口径32.4cm，底径10.8cm，器高30.1cmを測る深鉢の完形品である。若干くびれを有する底部から口縁部に向けてバケツ状に開く器形を有する。E－18区の西壁に隣接して出土した。口唇部断面形は舌状で，無文である。文様は口縁部下に口縁部と平行する幅0.4cmほどの１本の沈線と，さらにその下位に５cmほどの間隔を置いて施された長さ６～９cmほどの短沈線間に，長さ５～７cm程度の短沈線を組み合わせることにより，「三角形：△」ないし「逆三角形：▽」を横方向に交互に配置し主文様を施している。底部は厚さ１cmほどであるが，内面中央部が盛り上がり，厚さ1.8cmを測る。底部外面には，網代痕が明瞭に残る。胎土に白色及び茶色の砂粒を含む。1038は復元口径26.6cm，残存器高14.5cmを測る深鉢で，1037と同様に口縁部がバケツ状に立ち上がる器形を有し，文様も基本的に三角形をモチーフにした構成となっている。文様を施した後に器面調整を行っていることから，沈線が器面に埋没している部分が見られる。内外面ともにケズリ調整痕が残り，部分的に光沢も見られるが，接合痕が残るほど調整の粗い部分もある。胎土に白色や茶色（特に多い）の砂粒を含む。

1039は，口縁部下に幅0.4cmほどの２本の沈線を平行に組み合わせた文様をもつ。わずかではあるが一部に波頂部があり，先端に凹点状の刺突文が施されている。内外面共にナデ調整痕が残るが，器面にやや凹凸があり，接合痕が残る部分も見られる。器面調整は全体的に粗い。

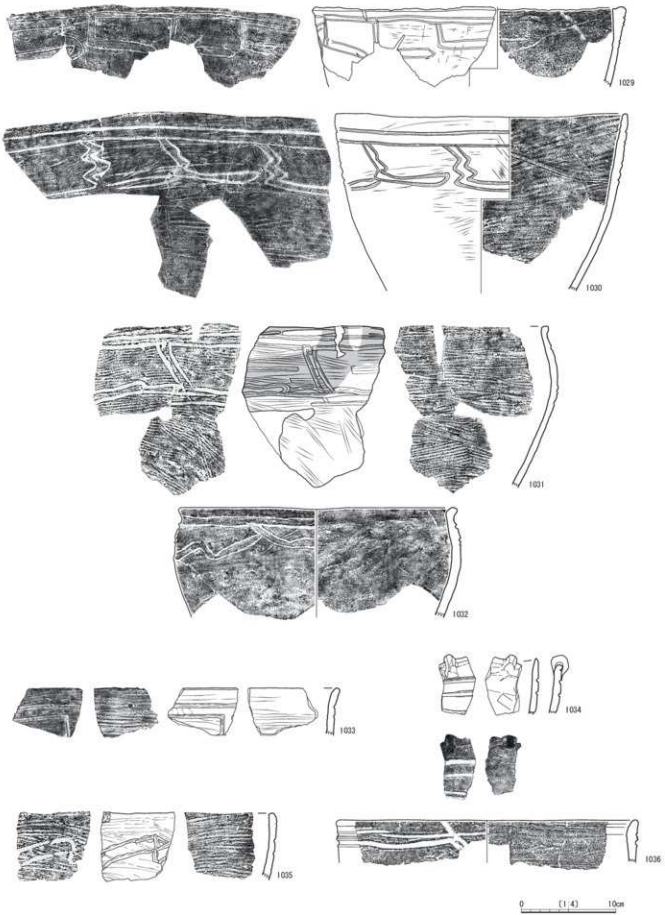
1040～1046は，底部片である。1040は，復元底径８cmを測る。全体的には平底であるが，約0.1cm程度，底面の中央部が若干上げ底気味となっている。底端部は緩やかで，外側へやや開きながら立ち上がっている。残存器高は５cmである。胴部外面は貝殻条痕の後，ケズリ仕上げが行われている。これは底面も同様な仕上げで，一部に光沢が生じている。周縁部に若干網代の痕跡が残る。また，底面には白色の細かな粒子が付着している。胴部内面は丁寧なナデ仕上げが行われている。底部内面には，指押さえ痕が見られ凹凸が残る。土器製作時に底部円盤を外側から包み込むように整形した痕跡が残る。胎土に白色及び茶色（特に多い）の砂粒を含む。1041は，底面に明瞭な網代痕が残る平底の底部片である。立ち上がり部分に若干くびれ部が見られる。胴部外面は縦方向の丁寧なナデ仕上げが行われている。胴部内面は後世の鉄分付着のため，不明瞭な部分もあるが，ナデ仕上げと考えられる。胎土に白色砂粒を含む。1042は，復元底径11.4cmを測る平底の底部片である。直線的に開く底部外面には，横方向の丁寧なナデ調整を行う。底面には若干網代の痕跡が残る。1043は，復元底径8.8cm，残存器高8.7cmを測る。底面中央部が0.3cm程度中空となり，若干上げ底気味となっている。底面には若干網代の痕跡が見られる。土器製作時に底部円盤を外側から包み込むように整形した痕跡が残る。内外面ともに比較的粗目の貝殻条痕が施されている。胎土に白色及び茶色の砂粒を含む。



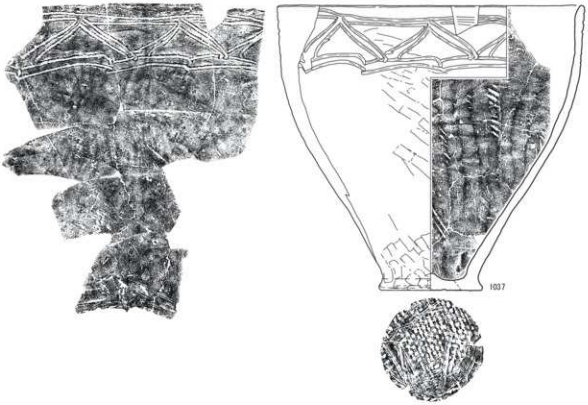
第2-10図　遺物集中６（１）

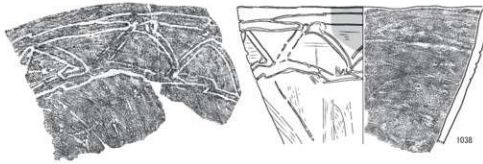


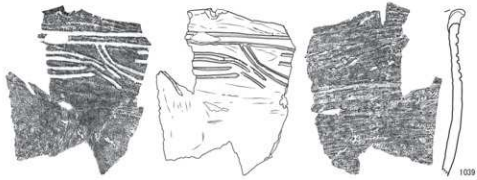
第2-11図　遺物集中6（2）



第2-12図　遺物集中６（３）

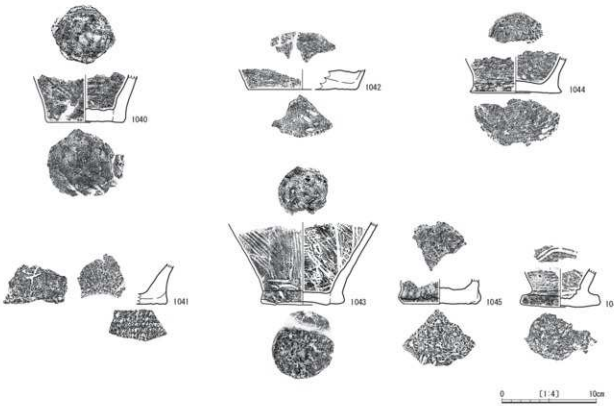






0 (1:4) 10cm

第2-13図　遺物集中６（４）



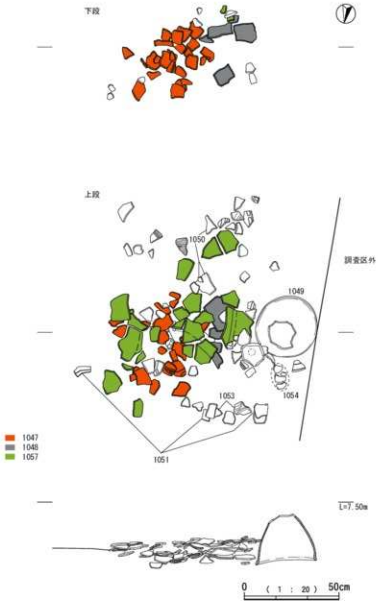
第2-13図 遺物集中６（４）

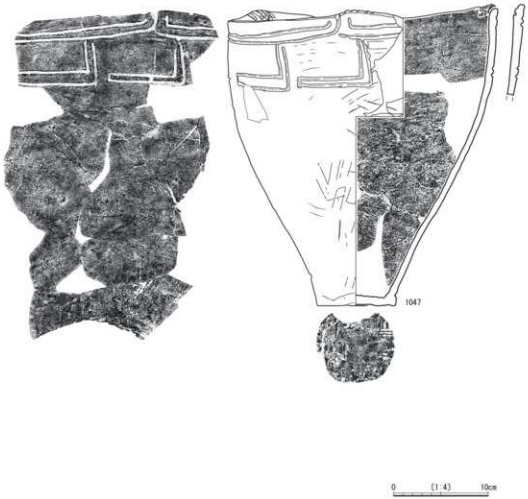
長さ約60cmの範囲に広がる土器片14点が接合したものである。1044は，復元底径9.6cmを測る底部片である。平底を基本とするが，底面中央部が約0.2cm程度上げ底気味になっている。底面には網代の痕跡が若干残るが，丁寧なナデ仕上げを行っている。部分的には光沢もある。立ち上がり部分に若干のくびれ部が見られる。胴部外面には横方向の丁寧な貝殻条痕が施されたのち，一部はナデ調整で光沢が生じている部分もある。内面には丁寧なナデ調整が見られる。別個体ではあるが，胎土や色調において，また底面の白色粒子付着，胎土に白色及び茶色（特に多い）の砂粒を含むという点も含め，1040と類似した特徴をもつ。1045は，復元底径8.6cmを測る平底の底部片である。若干残る胴部への立ち上がり部分には，微妙にくびれ部らしい抉りが見られる。ただし，底端部直上には指押さえ的な凹凸が見られることから，外形ラインについての詳細は不明である。底面には若干網代圧痕が残る。内面は後世の鉄分付着が激しく，器面の詳細は観察不能である。1046は，復元底径8.5cmを測る底部片である。底面中央部と外縁部が0.2cm程度上がっており，底部としてはやや安定感に欠ける仕上げとなっている。底部から胴部への立ち上がり部分に，入り込み１cm程度の大きなくびれ部が存在することが特徴的である。底面には若干網代痕が残り，白色粒子が付着している点は，1040や1044と類似した特徴である。胴部外面には横位の丁寧な貝殻条痕と若干のケズリ痕が見られる。内面も横位の貝殻条痕とケズリ痕が見られるが，底部と胴部に境界線に残る貝殻条痕はかなり深いことから，施文具である二枚貝の腹縁部の肋がどのような状態であったかを示すヒントを与えてくれる事例と言えよう。

遺物集中７（第2-15～17図1047～1058）

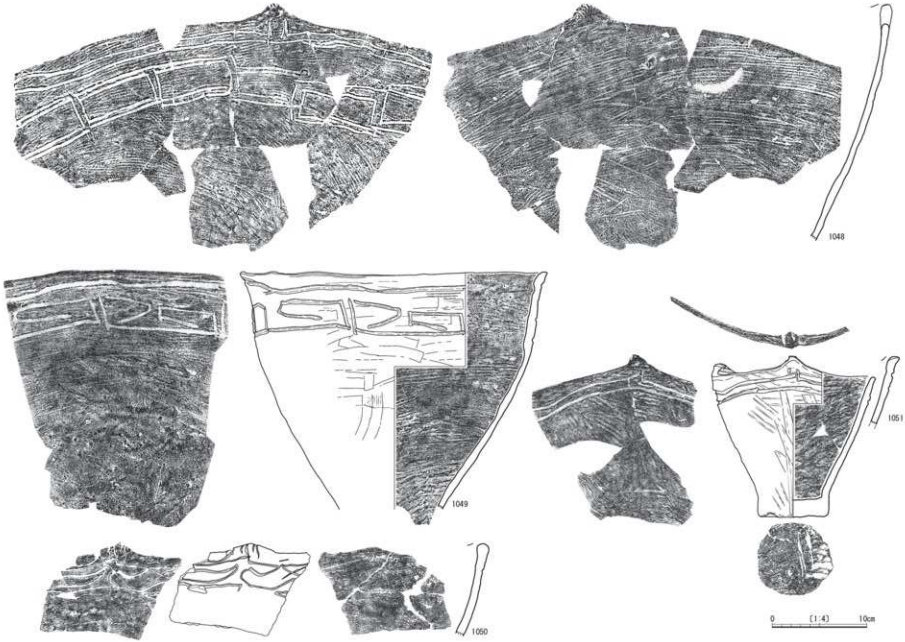
遺物集中７は，Ｅ－18区の西壁近くのⅢ層上面でまとまって出土した箇所である。

1047～1053は，深鉢である。1047は，復元口径28.5cm，底径8.2cm，残存器高31.8cmを測る深鉢の完形品である。３か所の波頂部をもち，底部から口縁部へ，バケツ状に立ち上がる器形を有する。口縁部はほぼ直口である。口唇部の断面形は舌状を呈し無文を基本とするが，波頂部には片方の端部に凹点のある５本の短沈線が網み目状に施されている。底面中央0.2cmほど上げ底気味になっている。中央部分を中心に丁寧なケズリ痕や光沢が見られるが，網代の痕跡も部分的に残っている。口縁部下に口縁部と平行する幅0.3cmほどの２本の沈線が施され，その下位に左向き長靴様の靴形文が施されている。内外面ともに貝殻条痕の後，内面がナデ，外面がケズリの丁寧な器面調整が見られ，器形・文様共に端正でバランスの取れた深鉢である。胎土に白色砂粒を多く含む。約50cmの範囲にまとまって出土した。1048は，口縁部から胴部までの比較的大きめの深鉢片である。口縁部下に口縁部と平

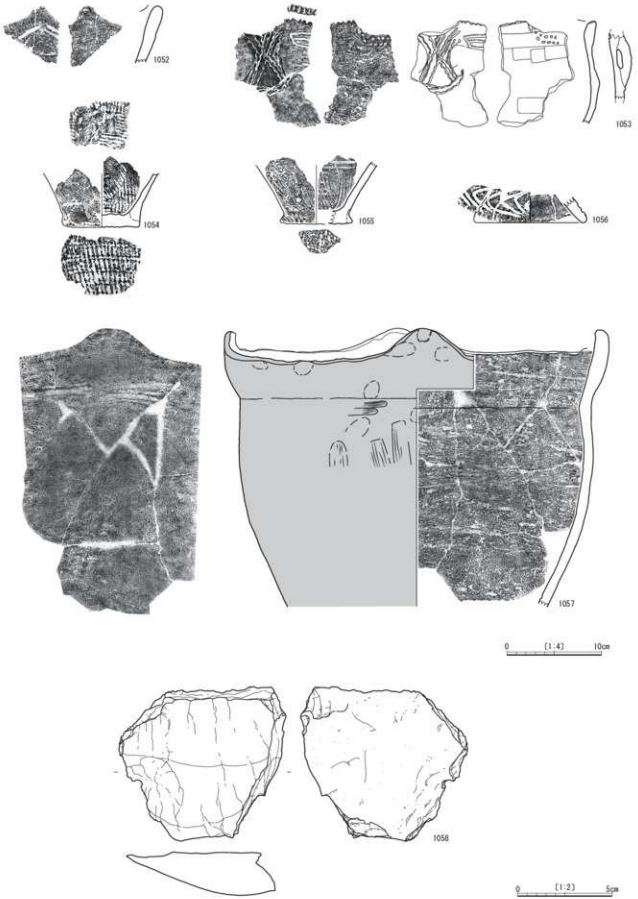




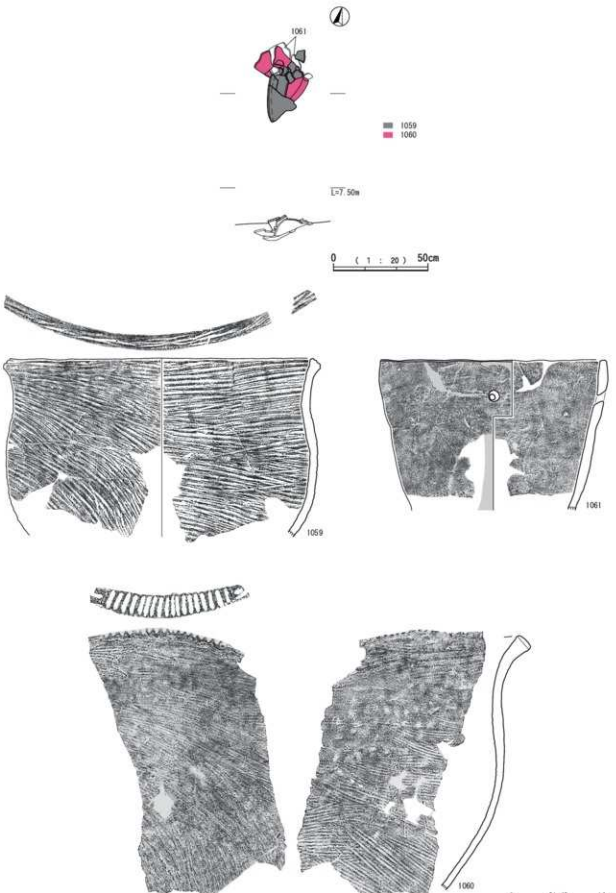
第2-15図 遺物集中７（１）



第2-16図　遺物集中７（２）



第2-17図　遺物集中７（３）



第2-18図　遺物集中８

行する２本の沈線（幅0.2～0.3cmほど）が施され，その下位に「回」字状の連続文が横位に展開するもので，残存部からの想定では，上面観がやや楕円形状を呈している可能性も考えられる。１か所の波頂部しか確認できないが，全体では３か所の可能性が高い。波頂部には複数の細線による刻み目が密に施されている。胴部下半から開きながら立ち上がる器形を有する。口縁部は，若干内湾気味である。内外面に貝殻条痕による器面調整の後，ケズリによる仕上げを行った痕跡が残り，胎土に茶色の砂粒を多く含む。約40cm四方の範囲にまとまって出土した。1049は，口径32.4cm，残存器高25.1cmの深鉢である。底部は欠損するが，完形の状態に近く，意図的に伏せて置いたような状態で出土した。口縁部が若干外傾するバケツ状の器形を呈している。口縁端部は若干肥厚し，わずかに外反する口唇部の断面形は舌状である。口縁部下に口縁部と平行する幅0.3～0.4cmほどの１本の沈線が施され，その下位に天地逆の靴形文の沈線文が横位に展開するものである。内外面ともに貝殻条痕の後，ナデ調整の痕跡が見られるが，内面には粘土の接合痕も明瞭に残り，凹凸も多い。なお，本遺物は，放射性炭素年代測定を実施した。1050はやや外側へ開き，波頂部１か所を含む口縁部片である。バケツ状の深鉢と考えられる。口縁部下に0.2cm弱の浅くて細い沈線により，靴形文を意識したと考えられる文様帯として横方向に展開している。やや肥厚させた波頂部には，４本の短沈線が施されている。内外面ともに丁寧なナデ調整が施されている。1051は，復元口径17.3cm，底径7.5cm，器高17.0cmを測る小形深鉢の完形品である。３か所と考えられる波頂部の２か所が残存していた。波頂部には２本の短沈線による刻みが施されている。口唇部断面形はやや丸みを帯びている。口縁部は，底部からバケツ状に立ち上がり外傾する。胴部から口縁部にかけての器厚は0.6～0.7cmほどであるが，底部は２cm弱と厚い。底部外面には丁寧なケズリ痕が見られるが，原体不明の沈（凹）線状圧痕が残る。白色及び茶色の砂粒を含む。口縁部下に口縁部と平行する２本の沈線（幅0.3cmほど：一部短沈線の組み合わせ）文が施されている。内外面共に丁寧なケズリ調整が見られるが，外面の一部には貝殻条痕が残る。1052は，波頂部を含む口縁部片である。口縁部下に１ないし２本の細沈線が見られるが，破片が小さいため文様の展開は不明である。若干肥厚する波頂部に文様は見られない。口唇部断面形はやや丸みを帯びる。1053は，口縁部下に縦長に貼付された把手を有する口縁部片である。口縁部下約６～７cmの胴部に最大径があり，口縁部は一度内傾したのち，若干外傾しながら立ち上がる。把手のある口縁部内面には，竹串状の鋭利な工具による連続刺突文が施されている。断面がやや蒲鉾状になる口唇部には連続して刻みを施している。口縁部下に口縁部と平行する３本の沈線がみられ，把手には貝殻腹縁部による２列を１単位とする刺突文により「X」字状文様を施している。

1054・1055は，深鉢の底部である。1054は，復元底径8.2cmを測る。胴部外面にはケズリや指押さえ等の調整痕が残る。底部から胴部へと立ち上がる内面には，貝殻腹縁部による調整痕が明瞭に残る。底部内面には指押さえ痕が見られる。底部外面には，明瞭な網代の痕跡が残る。底面の厚さは約1.3cmであるが，残存する胴部の器厚は0.4～0.5cmと薄手である。1055は，復元底径7.7cmを測る。底部からくびれ部を経て胴部へと立ち上がる器形を有する。内外面ともに貝殻条痕やケズリによる調整痕が残る。全体的に粗い整形である。底面は全体の５分の１ほどしか残存しないが，網代の痕跡が残る。

1056は，台付皿の脚台と考えられるものである。接地面は平坦である。脚裾部に「く」の字状の沈線を連続して横位に施した文様をもつ。器表面の一部に白色土が微妙に残る部分が見られる。内外面共に丁寧なナデ仕上げを行っている。

1057は，長軸110cm，短軸70cmの広がりから出土した無文の深鉢である。口径39.7cmを測る。胴部下半から底部を欠いている。残存器高は29.5cmである。口縁部は４か所の突起状頂部をもち，いずれも若干内湾しているが，全体的にはやや外へ開く口縁部をもつ。また，口縁部には５～６cmの幅で無文の肥厚帯が作られ，アクセントとなっている。口縁部肥厚帯下位はややくびれが入る。口唇部は幅１cmほどのやや丸味を帯びた平坦面を有する。胎土に0.2～0.5mm程度の白色及び茶色の砂粒を多く含む。外面はナデ，内面はケズリによる調整痕が残る。胎土が粗く全体的に器面にザラザラ感があるが，整形は丁寧で安定したフォームを有する。1047や1048の深鉢よりもわずかに上位で出土した。

1058は，灰白色を呈する粘板岩質のホルンフェルスである。亜円礫から節理に沿って剥出されたやや厚みのある剥片である。上辺及び右側辺・下辺はいずれも折れ面となっているが，意図的に切断されたものか偶発的に生じた折れか不明である。明瞭な使用痕は見られない。

遺物集中８（第2-18図1059～1061）

遺物集中８は，Ｃ－16区のⅢ層中から深鉢３個体が出土した箇所である。

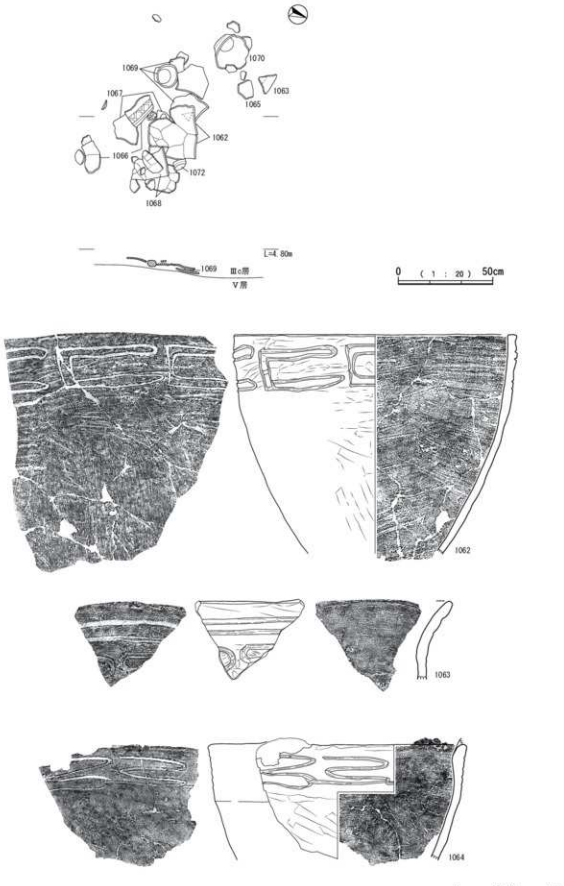
1059は，復元口径32cmを測る深鉢である。残存器高が18.8cmである。若干くびれる頸部をもちながらやや胴部が張り，口縁部が外反する。１～1.2cmの幅を有する口唇部はフラットな部分もあるが，若干膨らみをもつ平縁口縁である。器面の内外そして口唇部も含め，横位ないし斜位の極めて明瞭な貝殻条痕を地文とし，あたかも文様効果を意識して丁寧に仕上げている感もある。1060は口径の復元までには至らなかったが，残存部の形状から，1059と同様に口径30cmは下らない大きさの深鉢と考

えられる大片である。器形も1059と同様に，若干くびれる頸部をもちながらやや胴部が張り，口縁部が外反する。山形口縁部分の頂部を中心とする口唇部には連続する短沈線状の刻みが施され，その外側（平縁部分）に沈線と貝殻腹縁部による刺突文の組合せが見られる。しかし残存部が少なく，詳細は不明である。内外面ともに貝殻条痕による器面調整が残るが，口縁部内面には指頭圧痕やヤデ調整痕が見られる。また，胴部外面下半には，斜め上方向のケズリ痕が見られる。外面の口縁部下や胴部下半にススの付着が見られる。なお，本遺物は，放射性炭素年代測定を実施した。1061は，復元口径23.8cm，残存器高15.7cmを測る深鉢である。胴部から口縁部へかけてバケツ状に開く器形を有し，無文である。口縁部の下約4.5cmの位置に円形の補修孔が確認できる。内外面ともに丁寧なナデ調整が施されている。

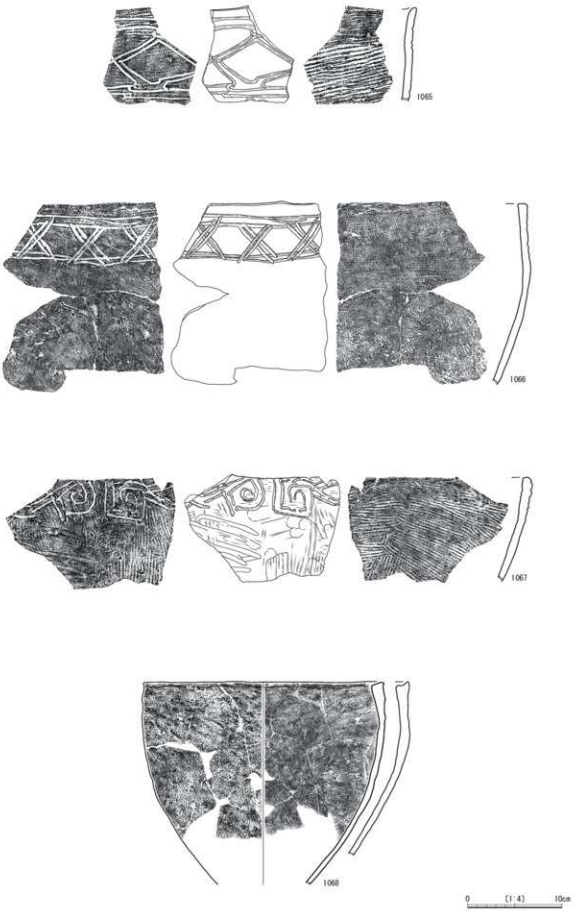
遺物集中９（第2-19～21図1062～1072）

遺物集中９は，Ｄ－12区のⅢｃ層下部から土器がまとまって出土した箇所である。

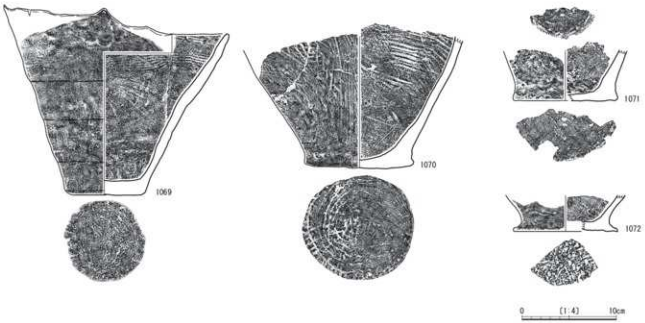
1062は，復元口径29.8cm，残存器高23.2cmを測る深鉢である。口縁部下に２本の平行沈線（幅0.3cmほど）による逆「コ」の字状の文様を横位に連続して施す土器である。口縁部はほぼ直口して立ち上がり，バケツ状の器形を有する。口縁部の断面形は，ほぼ平坦で無文である。内外面ともに貝殻条痕の地文を若干残しながらも，外面は主として縦方向，内面は横方向のケズリ調整が見られる。胎土に白色砂粒を多く含む。1063は，やや外反する深鉢の口縁部片である。口縁部下に幅0.5cmと比較的太めの沈線を２段施し，さらにその下位に靴形文的な文様を展開させているものである。破片のため文様の全容は不明である。口唇部は舌状を呈し無文である。内外面ともに丁寧なナデ調整を行っている。1064は，復元口径27.4cm，残存器高12.2cmを測る。口縁部が若干外傾するが，全体的にはバケツ状の器形を有するものと考えられる。口縁部下約６cmにごく緩い屈曲部が見られる。この屈曲部より上位には幅0.2～0.3cmの沈線で，逆「Ｓ」字状の曲線を一単位とする文様を横位に展開させ，文様帯を形成している。また，内面の口縁部下約２cm部分には稜線があり，これを境に口唇部はやや肥厚させて仕上げている。口唇部は基本的に無文であるが，口縁部の一部には突起部があり，貝殻腹縁部による刺突文が見られる。多くは欠損しており，頂部の全容は不明である。内外面ともにナデ及びケズリによる調整痕が残る。1065はやや外傾する口縁部で，口唇部は舌状を呈し無文である。口縁部下に２本の平行沈線を約６cmの間隔を置いて２段施し，その間に同じく２本の平行沈線で菱形状の文様を描いている。外面は貝殻条痕が一部に残るが，おおむね丁寧なナデ調整を行っている。また，内面には明瞭な貝殻条痕が残るが，口縁部下の約３cmはナデ調整により仕上げている。1066は若干内傾する口縁部を有し，基本的にはバケツ状を呈する器形となると考えられる深鉢である。比較的フラットな無文の口唇部をもつ。口縁部下に２本の平行沈線を約３cmの間隔を置いて２段施し，その間に同じく２本の平行沈線で「X」字状の文様を横方向に連続して描いている。内外面ともにナデ調整により仕上げているが，外面には貝殻条痕が若干残る部分がある。1067は，若干内湾する口縁部を有する比較的小型の深鉢である。口唇部は舌状を呈し無文である。口縁部下に幅0.1～0.2cmの細沈線による２本の平行直線及び曲線で渦巻文をモチーフとした文様を展開させたものである。文様自体は線が途切れたり，幅が一定でなかったりして安定感に欠ける。内外面ともに貝殻条痕が見られ，特に内面には明瞭に残る。外面はナデ及びケズリによる器面調整を行っているが，全体的に粗い仕上げとなっている。1068は，復元口径25.2cm，残存器高21.4cmを測る深鉢である。内湾する口縁部先端は，口唇部の外面端部に粘土を加えることにより肥厚口縁となっている。口唇部は，フラットな部分と加えられた粘土との境界が沈線状に凹んでいる部分が見られる。胴部文様は全く見られず，いわゆる無文土器の範疇である。内外面ともに丁寧なナデ調整が見られるが，いずれも若干ではあるが器表の剥落が観察される部分もある。胎土に白色の砂粒を含む。なお，本遺物は，放射性炭素年代測定を実施した。1069は，復元口径23.8cm，底径8.4cm，器高20.1cmを測る深鉢である。口縁部は波状を呈するが，頂部の数については整形が不安定なこともあり不明である。口唇部は舌状を呈し無文である。胴部文様は見られず，1068と同様にいわゆる無文土器である。内外面ともに貝殻条痕やケズリ痕，指頭圧痕やナデ調整痕など，様々な調整痕が観察されるが，全体的には不安定な整形・仕上げで凹凸感が残り，輪積整形の痕跡が数か所で観察される。胎土に白色の粒子を含む。底面の形状はフラットを基本とするが，接地面と考えられる底面外縁の幅0.5～0.8cmを除き，若干上げ底気味となりケズリ痕が残る。1070は，深鉢の胴部下半から底部の大片である。底径は11.6cmで残存器高は13.9cmを測る。底部から胴部への立ち上がり部分に若干くびれが見られる。外部底面は外縁の一部が若干浮きあがり，やや安定感に欠ける。もじり網の中心部を利用した痕跡が見られるが，全体的に丁寧なケズリ調整を行い面を整えることにより光沢が見られる部分もある。底面全体に白色の粒子が付着している。胴部の内外面も貝殻条痕を残しながら，全体的に丁寧なケズリ調整痕が見られる。底部内面は，特にナデ調整を加えることで平滑な仕上げとなっている。1071は，復元底径11.0cmを測る底部である。底部から胴部への立ち上がり部分に若干くびれが見られる。残存部のみの観察ではあるが，内外面ともに比較的粗いナデ調整痕が見られる。胎土に



第2-19図　遺物集中９（１）



第2-20図　遺物集中９（２）



第2-21図　遺物集中９（３）

白色砂粒を含む。安定した接地面を有する底面には網代痕がわずかに残るが，ケズリ調整による丁寧な仕上げを行うことにより光沢が見られる。底面の一部に白色粒子が付着している。1072は，復元底径11cmを測る底部である。底部から胴部への立ち上がり部に大きなくびれを有する土器である。内外面ともに丁寧なナデ仕上げを行っている。底面には網代痕が明瞭に残る。

遺物集中10（第2-22図1073～1075）

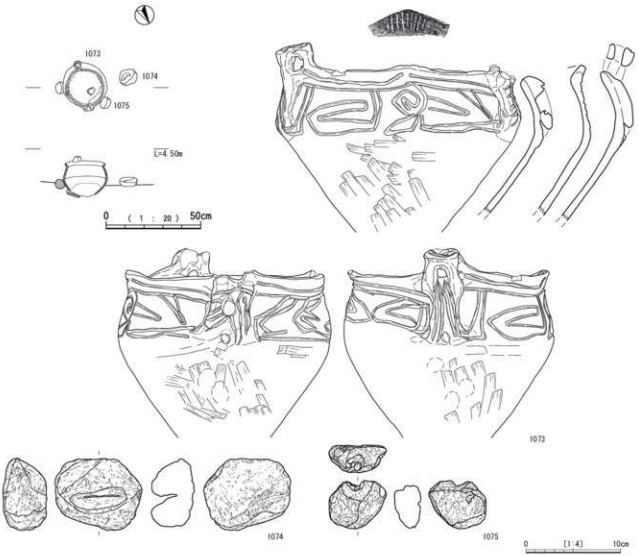
遺物集中10は，Ｄ－12区のⅢｂ層中から深鉢と２点の軽石加工品がまとまって出土した箇所である。

1073は底部を欠きながらも口縁部から胴部下半まで良好に残る深鉢で，ほぼ正位の状態で出土した。平縁口縁が基本形であるが，若干山形となる２か所の頂部と把手を形成する２か所の突起部をもつ。頂部と突起部はそれぞれ対になっている。平縁部分の復元口径は21.4cmを測る。底部から大きく開きながら立ち上がり，胴部上半部に最大径（22.2cm）をもち，内傾しながら口縁部へと立ち上がり，外反する口縁端部へと続く。口唇部は舌状の断面形を基本とし，無文である。口縁端部が外反することから，口唇部から約２cmの内面に屈曲による稜線が残る。前述した２か所の頂部と突起部のうち，頂部の１か所と突起部の１か所は欠損した状態で出土した。また，突起部の残り１か所についても一部欠損した状態であった。頂部は0.7cmほどの山形部を設けたもので，内面に長さ1.5～２cm，幅0.1cm程度の９本の短細沈線が縦位に連続して施されている。突起部は胴部最大径部分から口唇部を結ぶ把手状の貼付文部とその上位に位置し，口唇部（付近）から立ち上がる４つの脚がリング状の頂部を支える突出部の２段階の構成からなっている。把手状貼付文には縦あるいは横位の沈線（幅0.2cm程度）が施されている。文様は胴部最大径部より上位，口唇部までの幅７cmを文様帯とし，幅0.2cm程度の沈線文で構成されている。基本は２本の平行直線（一部曲線）とし，渦巻文や靴形文をモチーフとした文様が展開されている。頂部の下には渦巻文を配しているが，施文自体は全体的に粗く，整然さには欠けている。内外面ともにケズリ及びナデ調整による仕上げが施されている。胎土に白色砂粒を多く含む。

1074と1075は，軽石加工品である。いずれも1073の深鉢に添うような形で出土した。1074は，最大長9.2cm，最大幅7.2cm，最大厚4.65cmを測る軽石加工品である。平面形は，隅丸長方形状を呈する。長軸中央部に長さ６cm，幅２cm程度の溝状の彫り込みが見られる。溝の深さは最大2.5cm，最深部が幅２mmで，「Ｖ」字状の断面形を呈する。裏面及び長軸側の２面には，加工痕と考えられる平坦面が見られる。1075は，最大長6.05cm，最大幅5.14cm，最大厚2.75cmを測る。一部に加工痕と考えられる半欠の孔状抉りが見られる。同じく加工痕の可能性のある平坦面も複数あることから，軽石加工品とした。この２点の軽石加工品と1073の深鉢との関係性については明らかでない。

５　集積遺構（第2-23図1076～1079）

直径23cm，深さ５cmの浅いピット内から，４点の剥片がまとまって出土したもので，ここでは集積遺構として



第2-22図　遺物集中10

報告する。

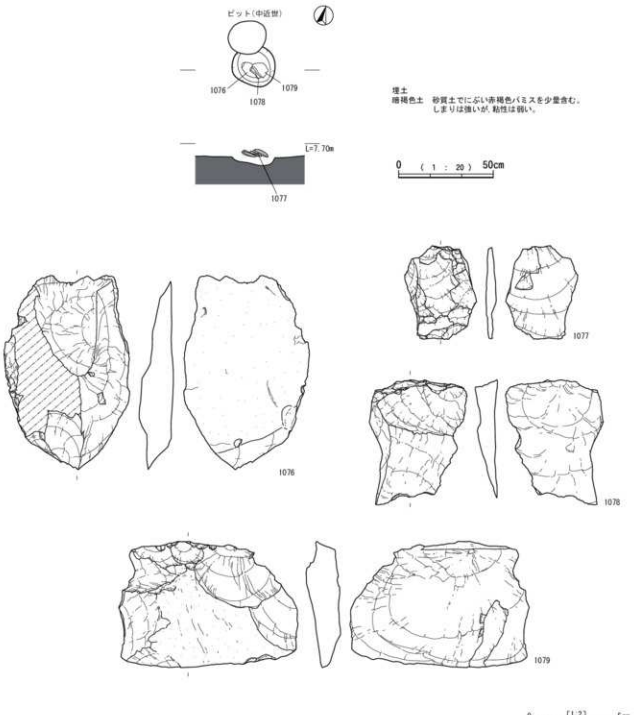
1076は，黒色を呈する頁岩系の質のよいホルンフェルスの剥片である。背面は自然面で，亜円礫の礫面を打面として剥出されたやや厚みのある剥片に，先行する剥離面上から加撃し半月形の厚みのある剥片を得ている。下縁部分に荒い剥離がやや不規則に加えられており，削器に類する使用が行われた可能性がある。縁辺にはやや摩耗が生じているようにも見えるが，明確な判断はできなかった。1077は，灰色の粘板岩質のホルンフェルスの剥片である。薄手の不定形な剥片を素材とし，右側辺には折れが生じているが，意図的に折り取られた可能性もある。剥片の末端辺にあたる下縁はフェザーエンドを呈するが，左半分には折れが生じている。石質及び背面側を中心に鉄分が付着することから詳細な使用の痕跡は不明である。1078は灰色を呈するホルンフェルスで，特徴的な灰白色の網目状の縞が発達する。先行する剥離面を打面として剥出されたやや縦長の剥片で，下辺及び右側辺は鋭利な縁辺となっており，折れや微細な剥離がみられる。しかし，摩耗はなく，使用によるものか偶発的なものかは不明である。1079は，砂岩質の白灰色を呈するホルンフェルスである。背面には右辺側からの節理面部分を含む大きな剥離面に上辺を打点とする剥離が加えられている。主要剥離はこれと同一打面からの剥離で，幅広のやや厚みのある剥片が剥出されている。左右側辺は鋭利な側辺を呈するが，末端辺はヒンジフラクチャーを呈し，やや丸味を帯びる。明瞭な加工痕・使用痕は認められない。

6　特殊遺構：大型軽石加工品（第2-24図1080）

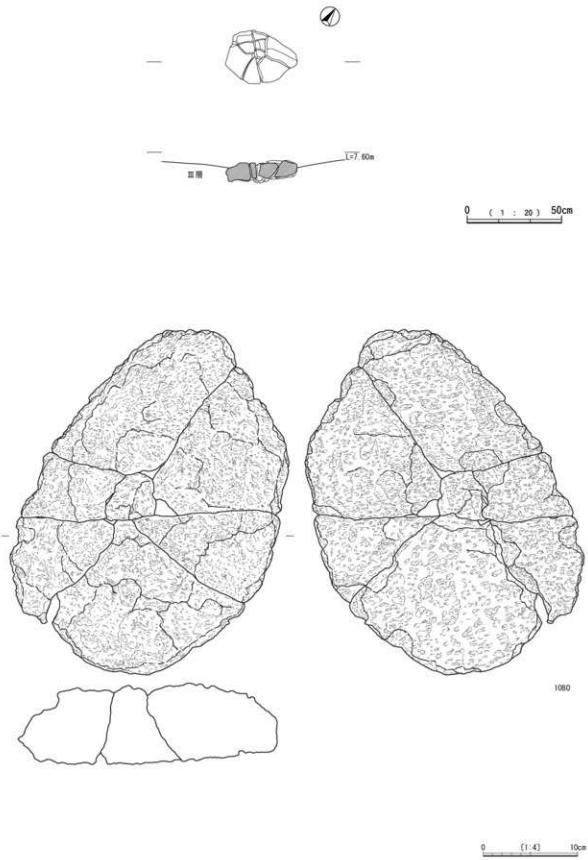
D－20区のⅢ層上面で出土した大型の軽石加工品である。単なる加工品であれば，通常通りの遺物としてのみ

の取り扱いであるが，大型であることや大きく６分割されていること，そして軽石が現地で細工された行為であることを否定できない状況であることもあり，ここでは「特殊遺構」として取り上げた。

1080は最大長36.6cm，最大幅29.5cm，最大厚8.6cmを測り，重量は1,385ｇである。やや窪んだ中央部のブロックを中心として，放射状に６分割計７つのブロックからなっている。分割面と底面のみに比較的多く鉄分が付着している。分割面は鉈かナイフでカットしたケーキのように直線的なブロックもある。性格・用途については不明である。



第2-23図　集積遺構及び出土遺物



第2-24図　特殊遺構：大型軽石加工品

第2-1表　縄文時代後期遺構内出土遺物観察表（土器・土製品）（1）

挿図番号	掲載番号	遺構名	出土区	層種	部位	時代	型式	法量(cm) 口径(底径)	器高(底厚)	最高(最大径)	調整 外面	内面	文様	色調 外面	内面	焼成	胎土 長石	石英	雲母	角閃石	赤色粒	透石	雲母	小礫	その他	備考
2-3	1001	土坑31号	D-21	深鉢	完形	後期	粕山式	15.5	7.0	20.0	条痕	条痕	刺突	灰黄褐	にぶい黄褐	良好	○	○					○			
	1002	土坑31号	D-21	深鉢	完形	後期	粕山式	18.2	9.4	18.2	ナデ	ナデ	刺突	にぶい赤褐	黒褐	良好	○	○	○							
2-4	1003	土坑33号	E-18	深鉢	口縁部	後期	指宿式	－	－	－	条痕, ナデ	条痕, ナデ	沈線	灰褐	にぶい褐	良好	○	△			○					
	1004	土坑33号	E-18	深鉢	口縁部	後期	指宿式	－	－	－	ナデ	ナデ	沈線, 刺突	黒褐	明赤褐	良好	○	○	△			○				
	1005	土坑33号	E-18	深鉢	口縁部	後期	指宿式	－	－	－	ナデ	ナデ	沈線	橙	にぶい褐	良好	○	○	○							
	1006	土坑33号	E-18	深鉢	底部	後期	－	－	11.6	(4.3)	条痕, ナデ	条痕, ナデ	－	にぶい赤褐	褐灰	良好	○	△			○					
	1007	土坑33号	E-18	深鉢	底部	後期	－	－	5.0	(1.9)	ナデ	ナデ	－	褐	褐	良好	○	△	◎	○						
	1008	土坑33号	E-18	円筒形土製品	底部	後期	－	5.5	4.0	1.0	打ち欠きナデ	打ち欠きナデ	－	橙	橙	良好	△	△	○	○	◎					
	1009	埋設土器	C-21	深鉢	頸～底部	後期	－	－	11.5	(7.7)	丁寧なナデ	丁寧なナデ	－	明赤褐	にぶい橙	やや不良	○	○	◎	○						
2-7	1010	遺物集中1号	E-23 E-24	深鉢	□一調部	後期	粕山式	19.2	－	(18.6)	条痕→ナデ	条痕→ナデ	－	明赤褐	橙	不良	○	○		○						
	1011	遺物集中1号	D-20	深鉢	□一調部	後期	指宿式	27.2	－	(18.2)	丁寧なナデ	丁寧なナデ	沈線, 刺突	褐	黒褐	良好	○	○	△							
	1012	遺物集中1号	D-20	深鉢	□一調部	後期	指宿式	18.4	－	(6.5)	丁寧なナデ	丁寧なナデ	－	にぶい橙	にぶい橙	良好	○	○	△	○						
	1013	遺物集中1号	D-20	深鉢	口縁部	後期	指宿式	－	－	－	刻目圧痕, 条痕	条痕	沈線	浅黄橙	にぶい黄橙	普通	○	○	△							
2-8	1014	遺物集中4号	E-19	円筒形土製品	胴部	後期	－	7.3	6.6	0.9	丁寧なナデ打ち欠き	丁寧なナデ打ち欠き	－	灰褐	黒褐	普通	○	○					○			
	1015	遺物集中4号	E-19	円筒形土製品	□縁部付近	後期	－	7.3	6.8	1.0	丁寧なナデ打ち欠き	丁寧なナデ打ち欠き	沈線	にぶい褐	灰白	良好		○								
	1016	遺物集中4号	E-19	円筒形土製品	□縁部付近	後期	－	4.3	3.8	0.9	条痕, 打ち欠き	条痕→ナデ打ち欠き	沈線	黒褐	明灰黄	普通	○	△		△	△					
	1017	遺物集中4号	E-19	円筒形土製品	胴部	後期	－	4.3	4.0	1.2	条痕→ナデ打ち欠き	条痕→ナデ打ち欠き	－	にぶい赤褐	黒褐	普通	○			○						
	1018	遺物集中4号	E-19	円筒形土製品	胴部	後期	－	4.9	4.1	0.9	条痕, 打ち欠き	条痕, ナデ打ち欠き	－	にぶい褐	褐灰	良好	○	○	△	△						
	1019	遺物集中4号	E-19	円筒形土製品	胴部	後期	－	6.1	5.1	1.0	丁寧なナデ打ち欠き	丁寧なナデ打ち欠き	－	黒褐	黒褐	良好	○	○	△	△						
	1020	遺物集中4号	E-19	円筒形土製品	口縁部	後期	－	6.0	5.8	1.1	条痕→ナデ打ち欠き	条痕→ナデ打ち欠き	沈線	灰オリーブ褐	灰白	良好	○	○		△						
	1021	遺物集中4号	E-19	深鉢	口縁部	後期	－	4.7	4.5	0.9	丁寧なナデ研磨	丁寧なナデ研磨	－	暗灰黄	灰黄	良好	○	○		○		○				
	1022	遺物集中4号	E-19	深鉢	口縁部	後期	指宿式	－	－	－	ナデ	ナデ	沈線, 刺突	黒褐	にぶい黄褐	普通	○	○		△						
2-9	1023	遺物集中5号	D-19	深鉢	□一調部	後期	指宿式	30.8	－	(25.5)	条痕, ナデ	条痕, ナデ	沈線	明褐	にぶい赤褐	良好	◎							○		
	1024	遺物集中5号	D-20	鉢	口縁部	後期	指宿式	22.2	－	(4.6)	ケズリ, ナデ	ケズリ, ナデ	沈線, 刺突	明赤褐	橙	良好	○	○		○		○		○		
2-11	1025	遺物集中6号	E-18	深鉢	□一調部	後期	指宿式	28.8	－	(25.7)	丁寧なナデ	丁寧なナデ	沈線	橙	灰褐	良好	○	○	△							スス
	1026	遺物集中6号	E-18	深鉢	完形	後期	指宿式	36.2	9.0	32.4	ナデ, ケズリ	ナデ	沈線	にぶい褐	灰黄褐	良	◎	○		○						
	1027	遺物集中6号	E-18	深鉢	□一調部	後期	指宿式	25.8	－	(14.4)	条痕, ナデ 刻目圧痕	ナデ	沈線	褐灰	褐灰	良好	○	○	○							
	1028	遺物集中6号	E-18	深鉢	口縁部	後期	指宿式	－	－	－	条痕 丁寧なナデ	ケズリ, ナデ	沈線	褐灰	灰黄褐	良好	○	○	○							
2-12	1029	遺物集中6号	E-18	深鉢	口縁部	後期	指宿式	33.1	－	(8.4)	丁寧なナデ	丁寧なナデ	沈線	褐	にぶい褐	普通	○	○	○	○	○					
	1030	遺物集中6号	E-18	深鉢	□一調部	後期	指宿式	31.0	－	(18.7)	条痕 丁寧なナデ	条痕	沈線	明赤褐	橙	やや不良	○	○	○	○	○					
	1031	遺物集中6号	E-18	深鉢	□一調部	後期	指宿式	－	－	－	条痕	条痕	沈線	褐	黒褐	普通	○	○	○					○		スス 反対No.8
	1032	遺物集中6号	E-18	深鉢	□一調部	後期	指宿式	29.5	－	(11.5)	ナデ	ナデ	沈線	灰白	浅黄橙	良好	△	○	○					○		
	1033	遺物集中6号	E-18	深鉢	口縁部	後期	指宿式	－	－	－	条痕	条痕	沈線	褐灰	褐灰	良好	○	○	○			○				
	1034	遺物集中6号	E-18	深鉢	口縁部	後期	指宿式	－	－	－	丁寧なナデ	刻目圧痕 丁寧なナデ	沈線	灰黄褐	灰黄褐	良好	△	△	○							貼付突起
	1035	遺物集中6号	E-18	深鉢	口縁部	後期	指宿式	－	－	－	条痕	条痕	沈線	にぶい褐	にぶい褐	良好	○	△		○				○		
	1036	遺物集中6号	E-18	深鉢	口縁部	後期	指宿式	32.0	－	(4.6)	ナデ	ケズリ, ナデ	沈線	にぶい赤褐	にぶい橙	良好	○	○	○	○	○					
2-13	1037	遺物集中6号	E-18	深鉢	完形	後期	指宿式	32.4	10.8	30.1	ナデ	ナデ	沈線	にぶい赤褐	橙	普通	○	○		△		○				網代痕
	1038	遺物集中6号	E-18	深鉢	□一調部	後期	指宿式	26.6	－	(14.5)	ケズリ, ナデ	ケズリ, ナデ	沈線	明赤褐	赤褐	良好	○	○	○			○	○			スス
	1039	遺物集中6号	D-18	深鉢	□一調部	後期	指宿式	－	－	－	ナデ	ナデ	沈線, 刺突	褐	にぶい赤褐	良好	○	○	○					△		
2-14	1040	遺物集中6号	E-18	深鉢	底部	後期	－	－	8.0	(5.0)	条痕→ケズリ	ナデ, 刻目圧痕	－	にぶい黄橙	にぶい黄橙	良好	○		○		○					網代痕 口唇土
	1041	遺物集中6号	E-18	深鉢	底部	後期	－	－	－	－	丁寧なナデ	ナデ	－	暗灰黄	褐	やや不良	○	○	○							網代痕
	1042	遺物集中6号	E-18	深鉢	底部	後期	－	－	11.4	(2.0)	丁寧なナデ	ナデ	－	褐	明褐	やや不良	○	○	○							網代痕

第2-2表　縄文時代後期遺構内出土遺物観察表（土器・土製品）（2）

挿図番号	掲載番号	遺構名	出土区	層種	部位	時代	型式	法量(cm) 口径(底径)	底径(胴径)	器高(厚さ(径))	調整 外面	内面	文様	色調 外面	内面	焼成	胎土 長石	石英	雲母	角閃石	赤色粒	褐色土	雲母	小礫	その他	備考
2-14	1043	遺物集(8)(9)	E-18	深鉢	胴～底部	後期	－	－	8.8	(8.7)	条痕	条痕	－	明褐	黄灰	普通	○	○								綱代痕
	1044	遺物集(8)(9)	E-18	深鉢	底部	後期	－	－	9.6	(3.9)	条痕 丁寧なナデ	丁寧なナデ	－	灰褐	に.(乳)褐	良好	○	○		○						綱代痕 白色土
	1045	遺物集(8)(9)	E-18	深鉢	底部	後期	－	－	8.6	(2.6)	指頭圧痕	ナデ	－	に.(乳)褐	黄褐	良好	○	○	△							綱代痕
	1046	遺物集(8)(9)	E-18	深鉢	底部	後期	－	－	8.5	(4.0)	条痕, ケズリ	条痕, ケズリ	－	灰黄褐	に.(乳)褐	良好		△			○		○		綱代痕 白色土
2-15	1047	遺物集(8)(9)	E-18	深鉢	完形	後期	指宿式	28.5	8.2	31.8	条痕→ケズリ	条痕→ナデ	沈線, 刺み	橙	橙	普通	○	○	○							綱代痕
2-16	1048	遺物集(8)(9)	E-18	深鉢	□～胴部	後期	指宿式	－	－	－	条痕→ケズリ	条痕→ナデ	沈線, 刺み	褐褐	灰褐	普通	○	○		○			○			
	1049	遺物集(8)(9)	E-18	深鉢	□～胴部	後期	指宿式	12.4	－	(25.1)	条痕→ナデ	条痕→ナデ 指頭圧痕	沈線	明赤褐	橙	良好	○	○								スス 図PHNo.79
	1050	遺物集(8)(9)	E-18	深鉢	□縁部	後期	指宿式	－	－	－	丁寧なナデ	丁寧なナデ	沈線	明赤褐	に.(乳)赤褐	良好	○	○	○							
	1051	遺物集(8)(9)	E-18	深鉢	完形	後期	指宿式	17.3	7.5	17.0	条痕, ケズリ	条痕, ケズリ	沈線 凹線状圧痕	橙	灰褐	良好	○	○	○							
2-17	1052	遺物集(8)(9)	E-18	深鉢	□縁部	後期	指宿式	－	－	－	ナデ	ナデ	沈線	橙	に.(乳)橙	普通	○	○	○	○						
	1053	遺物集(8)(9)	E-18	深鉢	□縁部	後期	指宿式	－	－	－	ナデ	ナデ	沈線, 刺突	橙	褐灰	普通	○	○	○	○						粕手
	1054	遺物集(8)(9)	E-18	深鉢	底部	後期	－	－	8.2	(5.3)	ケズリ 指頭圧痕	条痕, 指頭圧痕	－	に.(乳)橙	に.(乳)橙	普通	○	△	○				○			綱代痕
	1055	遺物集(8)(9)	E-18	深鉢	底部	後期	－	－	7.7	(6.6)	条痕→ケズリ	条痕→ケズリ	－	に.(乳)黄橙	橙	良好	○	○	○							綱代痕
	1056	遺物集(8)(9)	E-18	台付鉢	脚部	後期	指宿式	－	12.0	(2.7)	丁寧なナデ	丁寧なナデ	沈線	明赤褐	明赤褐	普通	○	△	○	○				△		白色土
	1057	遺物集(8)(9)	E-18	深鉢	□～胴部	後期	指宿式	39.7	－	(29.5)	ナデ, 指頭圧痕	ケズリ	－	に.(乳)褐	に.(乳)褐	良好	○		○				○		スス	
2-18	1059	遺物集(8)(9)	C-16	深鉢	□～胴部	後期	松山式	32.0	－	(18.8)	条痕	条痕	－	灰褐	に.(乳)褐	良好	○									
	1060	遺物集(8)(9)	C-16	深鉢	□～胴部	後期	松山式	－	－	－	条痕, ナデ ケズリ	条痕, ナデ 指頭圧痕	沈線, 刺突	オリーブ黒	黒	良好	○	○	○	○						スス 図PHNo.25
	1061	遺物集(8)(9)	C-16	深鉢	□～胴部	後期	指宿式	23.8	－	(15.7)	丁寧なナデ	丁寧なナデ	－	に.(乳)赤褐	黒褐	やや不良	△	○	○	○						補修孔 スス
2-19	1062	遺物集(8)(9)	D-12	深鉢	□～胴部	後期	指宿式	29.8	－	(23.2)	条痕, ケズリ	条痕, ケズリ	沈線	褐	褐灰	良好	○	○	○	○						
	1063	遺物集(8)(9)	D-12	深鉢	□縁部	後期	指宿式	－	－	－	ナデ	ナデ	沈線	褐灰	に.(乳)黄橙	不良	△	△	○			△				
	1064	遺物集(8)(9)	D-12	深鉢	□～胴部	後期	指宿式	27.4	－	(12.2)	ナデ, ケズリ	ナデ, ケズリ	沈線, 刺突	黒褐	黄灰	良好	△	○	○			○				
2-20	1065	遺物集(8)(9)	D-12	深鉢	□～胴部	後期	指宿式	－	－	－	条痕 丁寧なナデ	条痕 丁寧なナデ	沈線	褐灰	灰黄褐	良好	○	○	△	△						
	1066	遺物集(8)(9)	D-12	深鉢	□縁部	後期	指宿式	－	－	－	条痕, ナデ	ナデ	沈線	に.(乳)橙	に.(乳)黄橙	やや不良	○	△		○						
	1067	遺物集(8)(9)	D-12	深鉢	□縁部	後期	指宿式	－	－	－	条痕, ナデ ケズリ	条痕	沈線	に.(乳)橙	に.(乳)黄橙	やや不良	△	△	△			○				
	1068	遺物集(8)(9)	D-12	深鉢	□～胴部	後期	指宿式	25.2	－	(21.4)	丁寧なナデ	丁寧なナデ	－	黒褐	黒褐	普通	△	○	○							図PHNo.21
2-21	1069	遺物集(8)(9)	D-12	深鉢	完形	後期	指宿式	23.8	8.4	20.1	条痕, ケズリ 指頭圧痕, ナデ	条痕, ケズリ 指頭圧痕, ナデ	－	黒褐	褐灰	やや不良	○	△		○						
	1070	遺物集(8)(9)	D-12	深鉢	胴～底部	後期	－	－	11.6	(13.9)	条痕, ケズリ	条痕, ケズリ	－	に.(乳)黄褐	灰黄褐	良好	○	○	○	○						もじり痕
	1071	遺物集(8)(9)	D-12	深鉢	底部	後期	－	－	11.0	(5.3)	ナデ	ナデ	－	に.(乳)赤褐	に.(乳)赤褐	良好	○	△					○			綱代痕
	1072	遺物集(8)(9)	D-12	深鉢	底部	後期	－	－	11.0	(3.8)	ナデ	ナデ	－	に.(乳)黄褐	に.(乳)橙	良好	△	○		○						綱代痕
2-22	1073	遺物集(8)(9)	D-12	深鉢	□～胴部	後期	指宿式	21.4	－	(20.0)	ケズリ, ナデ	ケズリ, ナデ	沈線	に.(乳)褐	灰褐	良好	○	○		○						粕手

第2-3表　縄文時代後期遺構内出土遺物観察表（石器・石製品）

挿図番号	掲載番号	遺構名	区	層種	石材	法量(cm) 最大長	最大幅	最大厚	重量(g)	摘要
2-17	1058	遺物集中7	E-18	剥片	ホルンフェルス	8.15	8.80	2.25	188.19	
2-22	1074	遺物集中10	D-12	軽石加工品	軽石	7.60	9.20	4.65	86.12	
	1075	遺物集中10	D-12	軽石加工品	軽石	5.10	6.05	2.75	17.58	
2-23	1076	集積遺構	D-20	剥片	ホルンフェルス	10.30	6.65	1.80	114.25	
	1077	集積遺構	D-20	剥片	ホルンフェルス	4.95	3.80	0.50	11.60	
	1078	集積遺構	D-20	剥片	ホルンフェルス	6.60	5.15	1.20	34.32	
	1079	集積遺構	D-20	剥片	ホルンフェルス	6.65	9.50	1.80	127.57	
2-24	1080	特殊遺構	D-20	大型軽石加工品	軽石	36.60	29.50	8.60	1385.00	

第２節　遺物（土器・土製品等）

縄文時代早期から後期にかけての遺物は15区から29区の低地部ではⅢ層及びⅣａ層，11区から15区の低湿地部ではⅢａ層及びⅢｂ層から主に出土した。土器・土製品の出土状況は第2-25図から第2-30図に，石器・石製品の出土状況は第2-131図から第2-134図に示した。

１　縄文時代後期の土器・土製品等

縄文時代前期から後期に属する土器の中でも縄文時代後期に属するものが極めて多い。特にＤ・Ｅ－12・13区に集中して出土した。

（１）土器

縄文時代後期の土器については主に口唇部から口縁部の文様に着目し，器形・器面調整も考慮して下記のⅠ類からⅦ類に分類した。底部は，それのみでⅠ～Ⅶ類に分類できないことから一括して取り扱う。

Ⅰ類土器

縄文を施した文様に区画を設け，区画外を磨消して無文とした磨消縄文である。

Ⅱ類土器

凹線で文様を構成する一群である。さらに，文様帯の有無で大別した。

Ⅲ類土器

主に２本１組の沈線で文様を構成する一群である。

Ⅳ類土器

縦位の沈線３条と横位の沈線２条で文様を構成する一群である。

Ⅴ類土器

連続刺突のみで文様を構成する一群である。

Ⅵ類土器

上下を刺突等で区画し，区画内に沈線・刺突・凹点で文様を構成する一群である。

Ⅶ類土器

Ⅰ類土器からⅥ類土器に含まれない後期中葉から後半に該当する土器をまとめた。

以下，分類に従って特徴を記述する。

【Ⅰ類土器】

Ⅰ類土器は，文様構成で次のⅠａ～Ⅰｆ類に細分した。

Ⅰａ類

文様を３本一組の沈線と縄文で構成するものである。口唇部を肥厚させ，その内面には段をもつ。深鉢・鉢・浅鉢がある。

Ⅰｂ類

文様を２本一組の沈線と縄文あるいはヘナタリによる回転押圧文で構成するものである。口唇部を肥厚させるが，その内面に段をもたない。口縁部は外反，内湾，直立するものがある。

Ⅰｃ類

全体的に肥厚させた口縁部に沈線と縄文で施文するものである。

Ⅰｄ類

文様を渦巻文もしくは渦巻状の文様を沈線と縄文で構成するものである。文様は胴下位まで及ぶ。

Ⅰｅ類

沈線と縄文で文様を構成するが，沈線間が狭くなる。内湾する口縁部は端部で肥厚し，胴部は大きく張りながら底部に至る器形をもつ。波状口縁を呈するものは，波頂部の下位に把手もしくは渦巻文を施す。

Ⅰｆ類

沈線と縄文で文様を構成するが，Ⅰａ類～Ⅰｅ類に分類できなかったものである。

以下，分類に従い報告する。なお，掲載番号1082は，放射性炭素年代測定を実施した。

Ⅰａ類土器（第2-31図1081～1085）

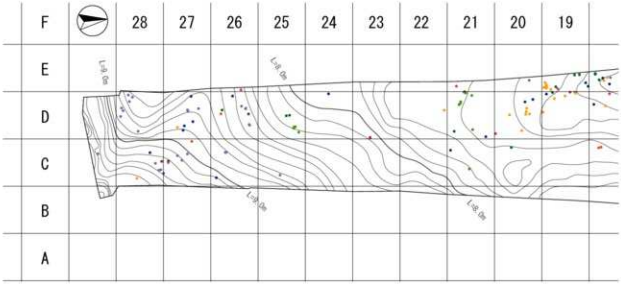
1081～1083は口唇部が肥厚し，内面に段をもつものである。いずれも小片のため３本一組の沈線は確認できないが，内面に段をもつことから本類とした。1081は口縁部が外反し，外面には沈線と縄文で文様を構成する。口唇部の内面寄りに沈線を巡らせ，外端には縄文を施す。1082は，やや外反する口縁部をもつ。肥厚した口唇部には沈線と縄文が施される。口縁部外面はミガキによる器面調整を行い，下位には沈線の痕跡が残る。1083は小片のため口縁部に施される文様は不明だが，幅広い口唇部には縄文を施す。口縁部の外面はミガキよる器面調整が行われる。

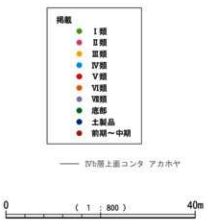
1084は，鉢である。底部と胴部は接合しないが，同一個体と考え図化した。口径17.8㎝，底径10.6㎝を測る。口縁部は直立し，胴部は大きく膨らみながら平底の底部に至る器形である。突起をもつ橋状把手を２か所に貼り付けるが，その上面から下面に向けて孔が穿たれる。口縁部には縦位の短沈線と横位の沈線で文様を描く。胴部には３本一組の沈線とヘナタリの転圧文で文様が施される。口唇部にもヘナタリの転圧文が施される。1085は浅鉢で，肥厚する口唇部に３本一組の沈線と縄文が施される。

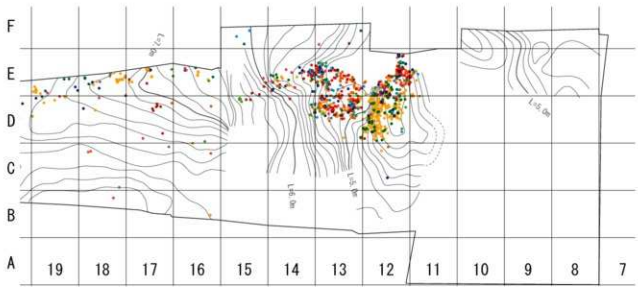
1081・1083・1085はＬＲの縄文原体を横方向に転がし，1082はＲＬの縄文原体を横方向に転がす。また，1081は器面に縄文を施した後，区画を設け，そして区画外を磨り消している。1082・1083・1085は，区画内に縄文を施さない。

Ⅰｂ類土器（第2-31～33図1086～1106）

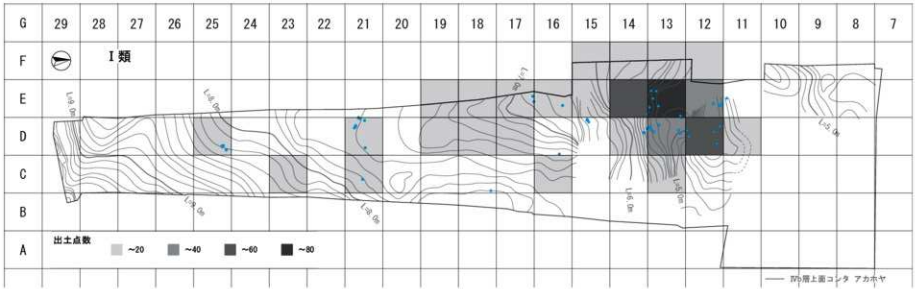
1086～1090は肥厚する口唇部に沈線を巡らせ，口縁部が外反するものである。1086～1089は，平口縁である。1086は口縁部の上部が磨り消され，その下に２本一組の

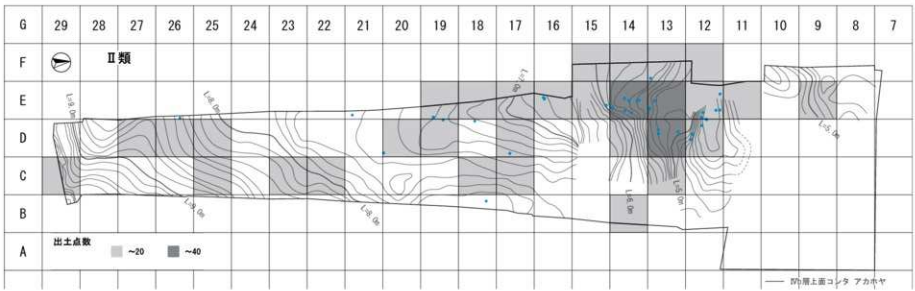






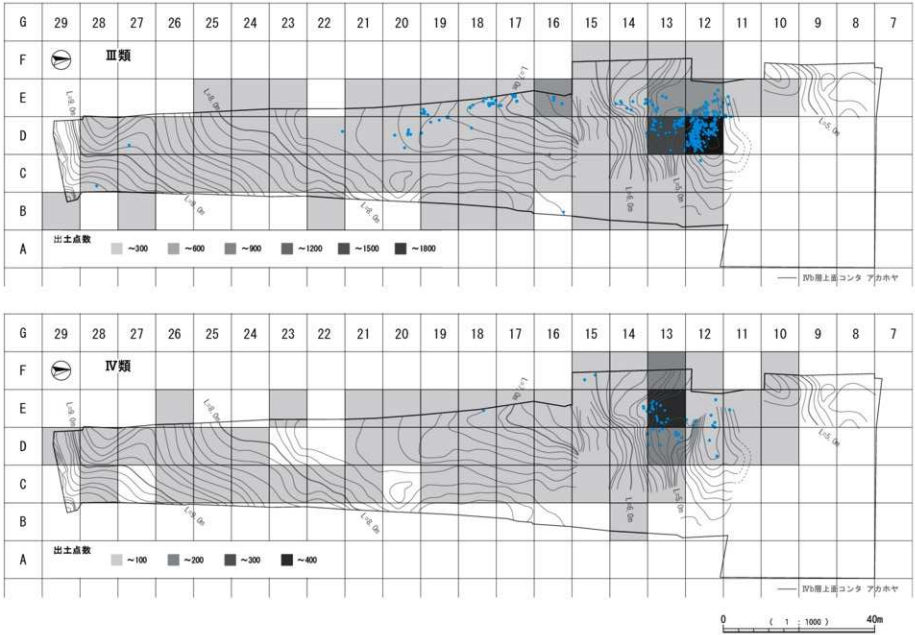
第2-25図　縄文時代土器・土製品出土状況図



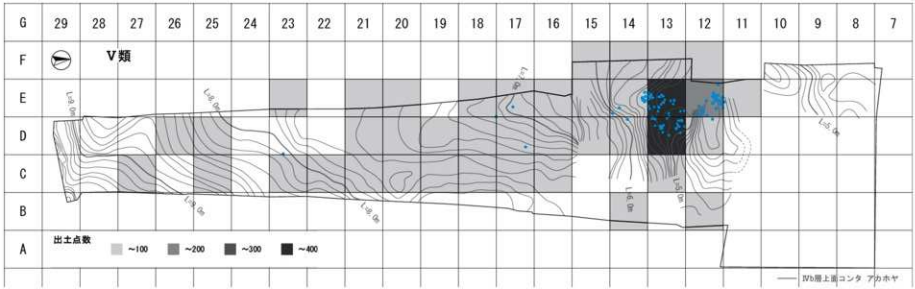


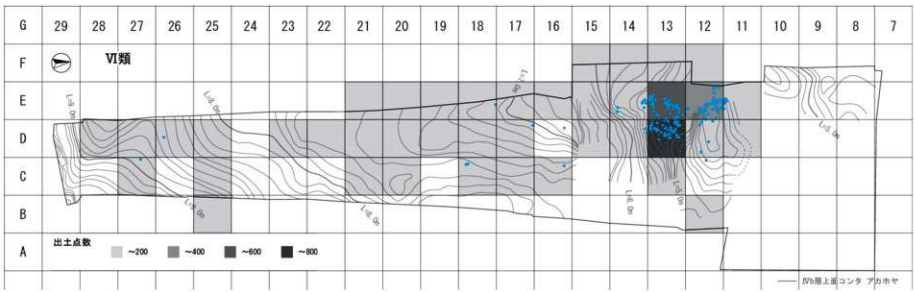
0 (1 : 1000) 40m

第2-26図　縄文時代後期土器（Ⅰ類・Ⅱ類）出土状況図



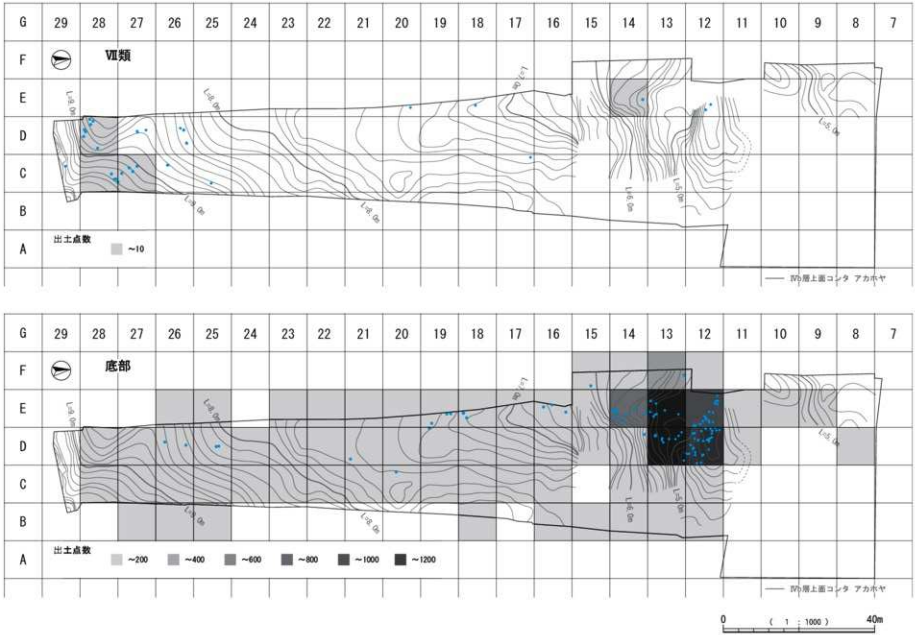
第2-27図　縄文時代後期土器（Ⅲ類・Ⅳ類）出土状況図

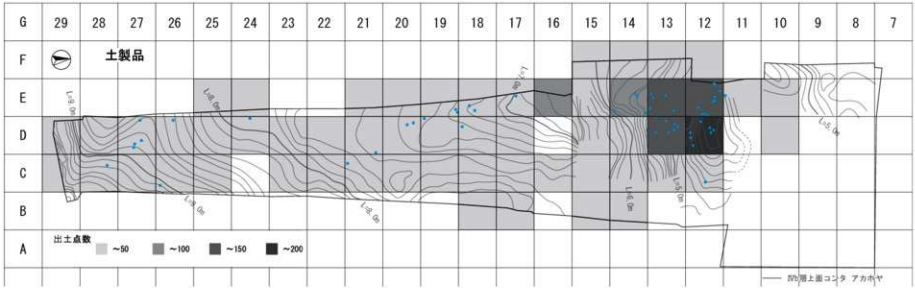


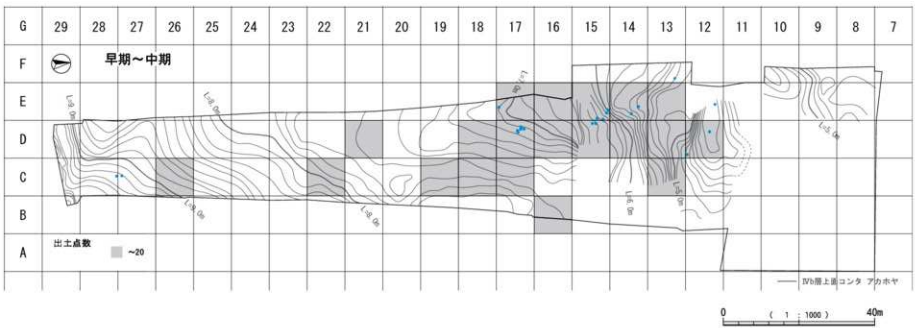


0 (1 : 1000) 40m

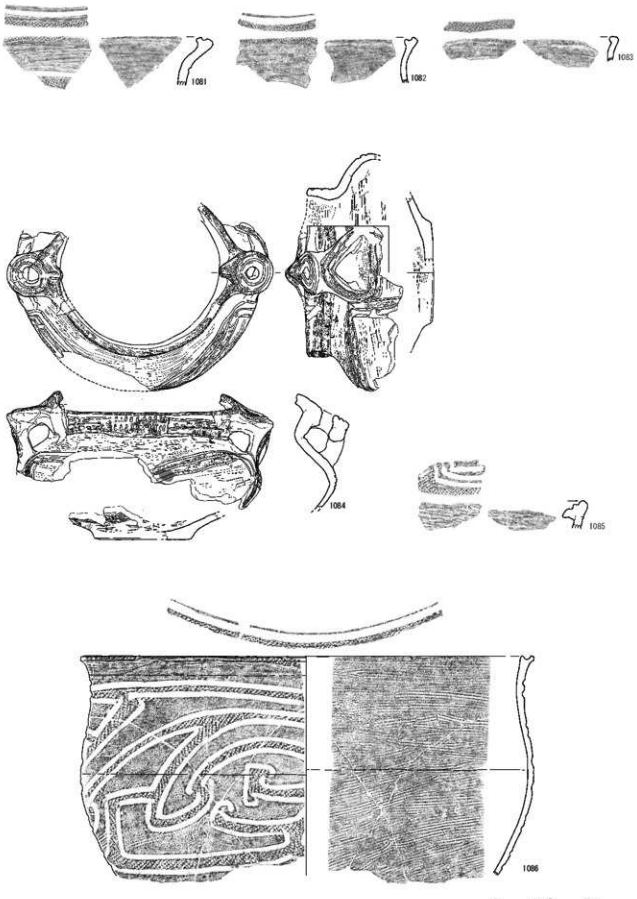
第2-28図　縄文時代後期土器（Ⅴ類・Ⅵ類）出土状況図


G 29 28 27 26 25 24 23 22 21 20 19 18 17 16 15 14 13 12 11 10 9 8 7
F
E
D
C
B
A
Ⅶ類
出土点数
~10
L=5.0m
L=5.1m
L=5.2m
L=5.3m
L=5.4m
L=5.5m
L=5.6m
L=5.7m
L=5.8m
L=5.9m
L=6.0m
L=6.1m
L=6.2m
L=6.3m
L=6.4m
L=6.5m
L=6.6m
L=6.7m
L=6.8m
L=6.9m
L=7.0m
L=7.1m
L=7.2m
L=7.3m
L=7.4m
L=7.5m
L=7.6m
L=7.7m
L=7.8m
L=7.9m
L=8.0m
L=8.1m
L=8.2m
L=8.3m
L=8.4m
L=8.5m
L=8.6m
L=8.7m
L=8.8m
L=8.9m





第2-30図　縄文時代後期土製品・縄文時代早期～中期土器出土状況図



第2-31図　Ⅰ類土器（1）

沈線と縄文で鉤手状の入組文が胴部下位まで施される。肥厚する口唇部には沈線が巡り，外端には縄文が施される。外面胴部には部分的に，内面には全面条痕が残る。1087～1089は口縁部片で，２本一組の沈線と縄文で文様を施すと考えられる。いずれも内面の口唇部直下に段をもたない。1087・1088は口縁部に幅広で深い沈線を巡らせ，口唇部から口縁部外端にかけて縄文を施す。内面には器面調整の条痕を残す。1089は口縁上部にも縄文を施し，内面には緩やかな稜をもつ。1090は口径が42cmで，波頂部が２か所残存する。残存する２か所の間隔から口縁部には３か所の波頂部をもつと考えられる。波頂部上面には口唇部と直交する押圧文を施す。口唇部に施される沈線は波頂部へと続き頂部手前で強く押されて止まる。外面には鉤手状の入組文が胴部中位まで施される。突起部の下位では横位の沈線が跳ね上がり，終点は刺突が施される。

1091～1104は，やや肥厚する口唇部に沈線が施されないものである。口縁部が外反・直立・内湾するものがある。1091～1098は，口縁部が外反もしくは外傾するものである。その中でも，1091～1094は平口縁，1095～1098は波状口縁となる。1091は破片のため全体の文様構成は不明だが，鉤手文や三角文が描かれている。沈線の端部は強く押圧される部分もある。1092は口縁部上位に横位の沈線が施され，端部は強く押され，跳ね上がる。また，その隣には円形の刺突が施される。1093は沈線と縄文が僅かに残り，内外面とも丁寧なミガキが施される。1094は外に開く口縁部で，ナデによる丁寧な器面調整が施される。1095は丸く収める口唇部に高さのない突起をもち，頂部には３列の押圧文が施される。胴部には入組文が施されるが，区画外にはみ出した縄文は磨り消されずに残る。また，区画内に縄文を施さない部分もある。1096は口唇部に高さのない波頂部をもち，４列の押圧文を施す。1095と同様に区画外にはみ出した縄文を磨り消さない部分もある。1097は波頂部で，部分的に欠損する。頂部に深い切り込みを入れ２分し，それぞれに３列の押圧文を施す。波頂部の直下には同心円状の沈線とそれ以外には沈線を曲線状に施す。所々に貝殻腹縁を使ったと考えられる擬縄文を施すが，詳細は不明である。1098は波頂部に３列の押圧文を，胴部は横位の縄文帯が施される。内面には条痕が残る。1099～1102は，直立する口縁部をもつ。1099～1101は，波状口縁である。1099は波頂部に３列の押圧文を施し，沈線の端部を押し込むように強く止める。1100・1101は，焼成後と考えられる穿孔が部分的に残る。1102は平口縁で，口唇部にはヘナタリによる刺突文を，胴部には細沈線とヘナタリの転圧文が施される。1103・1104の波状を呈する口縁部は，内湾する。いずれも内外面に条痕が残る。1103は波状を呈する口縁部で，波頂部には３列の押圧文が施される。波頂部に直下には三角文を，胴部には入組文を配する。1105・1106は，橋状把手である。いずれも把手の上面から穿孔をもつが，1106は貫通していない。1105は橋状把手の突起上面の孔に沿って円形の沈線を巡らせ，内外の側に縄文を施す。さらに，橋状把手の根元を囲い込むように曲線の沈線を施す。口縁部は外反し，端部が肥厚する。1106は，２本一組の沈線とヘナタリの転圧文で文様を構成する。橋状把手の突起部には両側から強い押圧文を施す。さらに，上面の孔を囲むようにヘナタリによる転圧文，突起部の根元には沈線を施す。内外面の一部に赤色顔料が残る。

1097・1106以外は，ＲＬの縄文原体を横方向に転がす。また，1086～1089・1091～1093・1100・1103は縄文を施した後，区画を設け，そして区画外を磨り消す。1090・1094～1096・1098・1099・1101・1104・1105は，設けた区画内に縄文を施す。

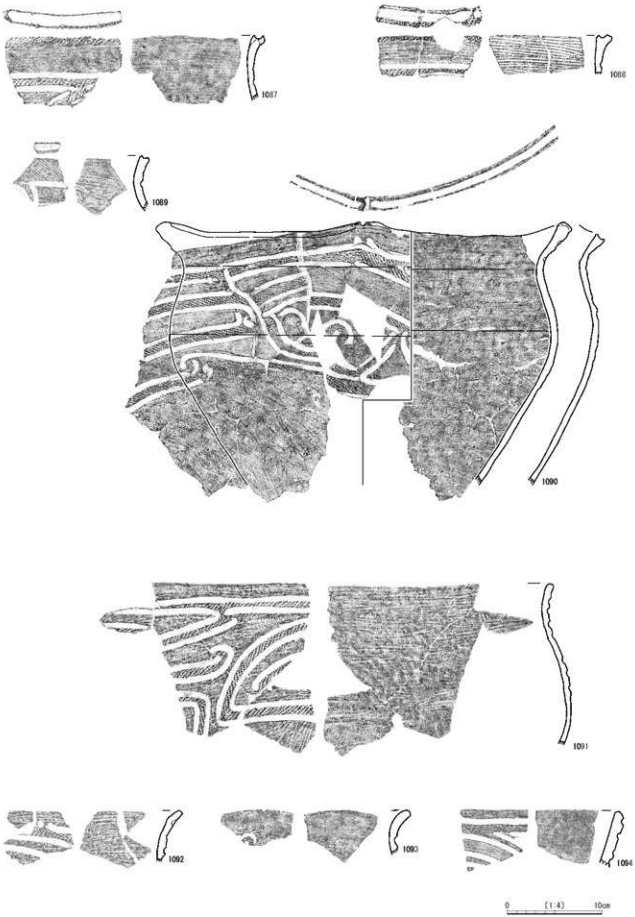
Ｉｃ類土器（第2-34図1107～1114）

1107・1108は，口縁部に矩形沈線を施す。1107は波状口縁で，内外面とも条痕が残る。1108は平口縁で，口唇部まで縄文が及ぶ。1109は，口唇部直下に円形の強い押圧文を施す。1110は，口縁部内面に緩い稜をもつ。1111は器面調整が粗く，縄文は残らない。1112は，口唇部直下に円形の強い押圧文が施される。1113は，波頂部にらせん状の沈線が施される。1114は波頂部に３列の押圧文，口唇部に沈線が施される。

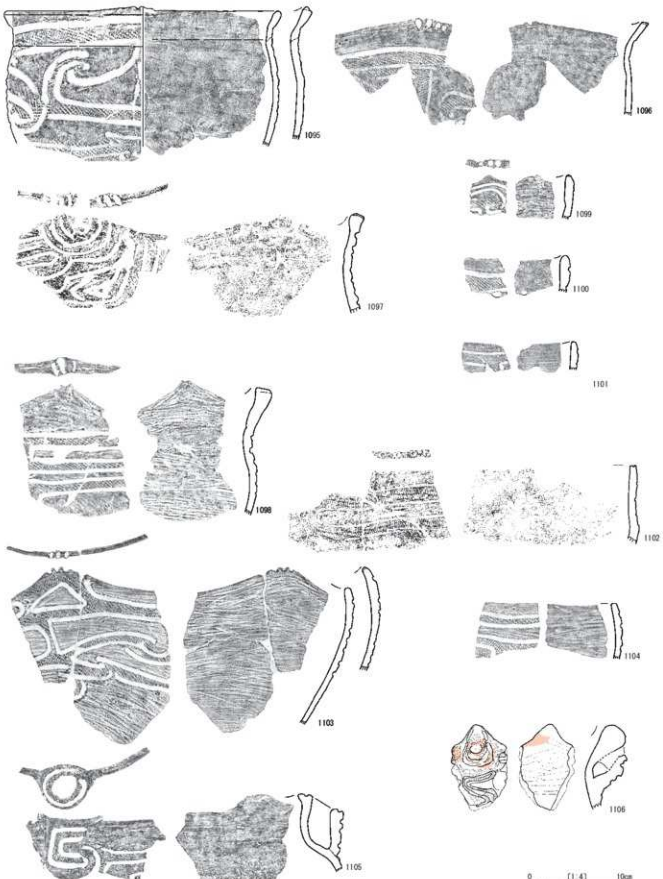
1111・1113以外は，ＲＬの縄文原体を横方向に転がす。また，1107は縄文を施した後，区画を設け，そして区画外を磨り消す。1108～1110・1112・1114は，設けた区画内に縄文を施す。

Ｉｄ類土器（第2-34図1115～1122）

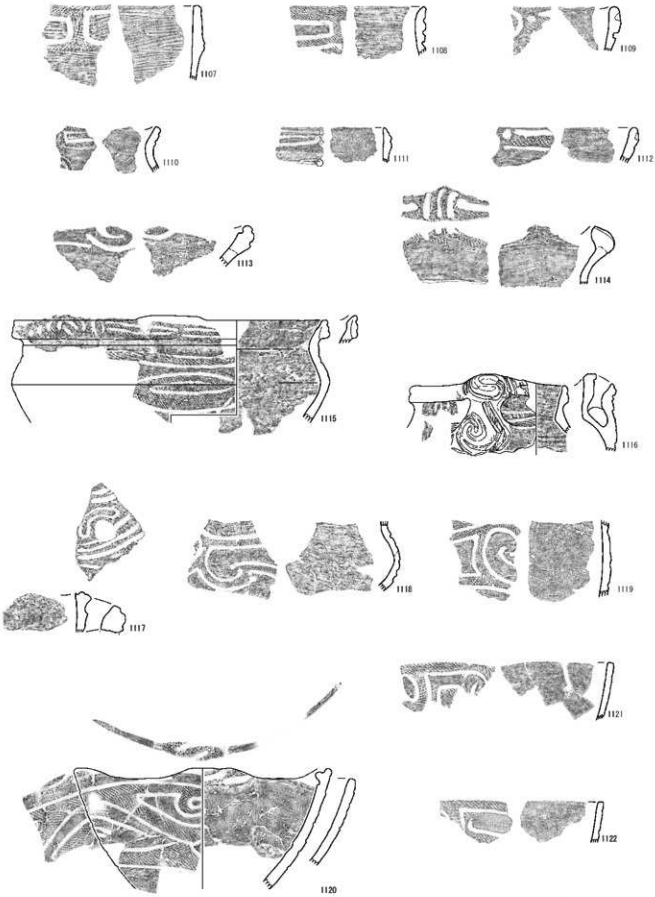
1115は口縁端部を肥厚させ，外面に沈線と縄文を施文する。また，高さのない突起をもち，内面に７列の押圧文を，外面に半月状の沈線を向かい合う様に施す。胴部には大きめの渦巻き文を配する。口縁部は外反し，胴部が膨らむ器形をもつ。1116は橋状把手をもち，突起部には穿孔を施し，突起を囲むように円形の沈線を配する。突起直下には渦巻文が施されるが，縄文が全面に施されない区画もある。口縁部は帯状に肥厚し，沈線を横位に巡らす。1117は橋状把手の突起部で，1116と同じように穿孔を施す。1118・1119は胴部片で，渦巻文が残る。沈線の端部は，強く押し込まれる。1120は口縁部から胴部下半に向かって，やや膨らみをもちながらすぼまる器形である。高さのない突起が１か所残存する。この上面に内外面から棒状工具を斜めに押圧し，粘土紐が「Ｓ」字状に貼り付けられたように作る。さらに，内面の突起直下にも沈線が施される。残存する口唇部の厚みから突起は４か所あったことが考えられる。胴部の主文様は土器片の接合状況が良好でないため明確ではないが，横に広い渦巻き状の文様を施す。1121・1122は1120と類似する



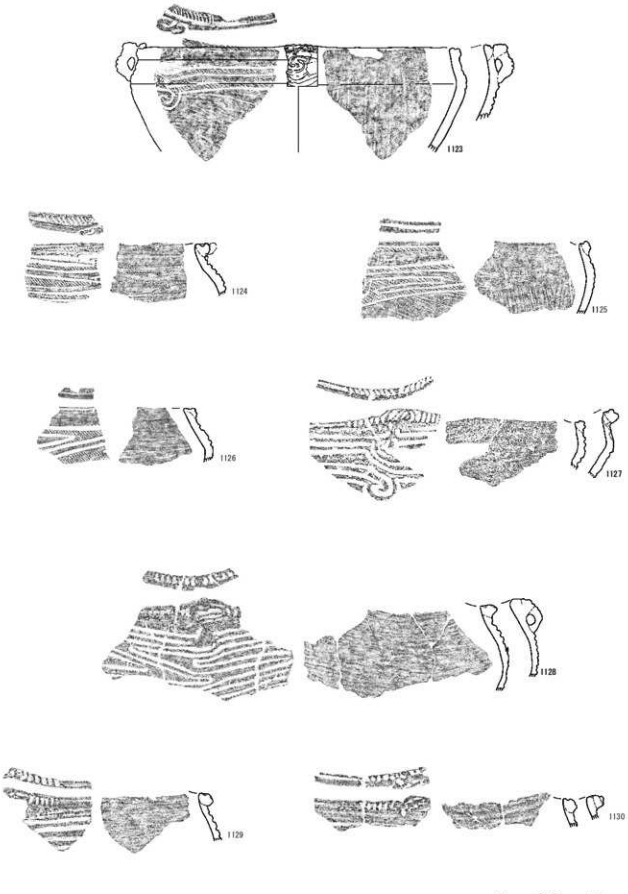
第2-32図　Ⅰ類土器（2）


1095
1096
1097
1098
1099
1100
1101
1102
1103
1104
1105
1106
0 (1:4) 10cm

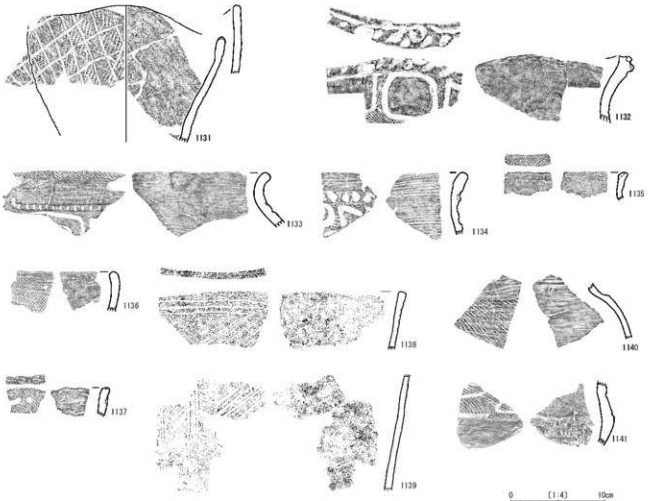
第2-33図　Ⅰ類土器（3）


1107
1108
1109
1110
1111
1112
1113
1114
1115
1116
1117
1118
1119
1120
1121
1122
0 [1:4] 10cm

第2-34図　Ⅰ類土器（4）



第2-35図　Ⅰ類土器（5）



第2-36図　Ⅰ類土器（６）

器形・胎土・施文のため，ここに掲載した。

1115・1116・1118～1120は，ＲＬの縄文原体を横方向に転がす。1117は，単節Ｒの縄文原体を横方向に転がす。1121・1122は，ＲＬの縄文原体を縦方向に転がす。また，1116・1119～1122は縄文を施した後，区画を設け，そして区画外を磨り消す。1115・1117は，設けた区画内に縄文を施す。

Ⅰｅ類土器（第2-35図1123～1130）

1123は口縁部が波状を呈し，胴部が膨らむ器形をもつ。肥厚する口縁端部の外面には沈線と縄文を，口唇部には沈線を巡らす。さらに波頂部付近の口唇部には沈線を縦位に施す。波頂部直下には横状把手を貼り付け，外面に渦巻文と刺突を施す。胴部には４本一組の平行沈線を横位に施す。平行沈線で設けられた３つの区画の内，上下の区画には縄文を施し，中央の区画は磨り消される。また，横状把手の直下には渦巻文が描かれる。波頂部及び横状把手は，４か所と考えられる。1124は，波頂部に近い部分の口縁部片である。胴部には６本の沈線が施され，３つの縄文帯をもつ。器形・文様構成とも1123と類似する。1125は，器形・文様構成とも1124と類似する。渦巻文と考えられる文様がわずかに残る。1126は口縁部外端に粘土を貼り付け，肥厚させる。この口縁部の外端と上面に沈線を施す。胴部は横位及び斜位の沈線と縄文で文様を構成する。斜位の沈線の交点には方形の刺突が施される。1127は波状を呈する口縁部の端部を肥厚させ，その外面と口唇部に沈線を巡らす。波頂部の外面には半月状の押圧文を向かい合う様に配し，口唇部の内面側にも押圧文を施す。胴部は平行沈線を密に施し，縄文とともに文様を構成する。波頂部の下には渦巻文を２か所施す。1128と1129は，同一個体と考えられる。1128は波状を呈する口縁部は端部で肥厚し，押圧文を施す。波頂部には横状把手を貼り付ける。胴部には横位や斜位の沈線を密に施すが，沈線間の縄文は磨り消される。1129は，密な沈線だけで文様を構成するものである。1130は表面が摩耗して詳細は不明だが，1128と同様の器形や文様構成と考えられる。

詳細の不明な1130を除いて，設けた区画にＲＬの縄文原体を横方向に転がす。

Ⅰｆ類土器（第2-36図1131～1141）

1131は波状口縁で，波頂部は４か所と考えられる。口縁部は，丸く収め，バケツ状の器形をもつ。口縁部から胴部にかけて沈線と縄文で斜格子目文を構成する。1132は，波頂部付近の外面に粘土を貼り付け肥厚させる。粘土を貼り付けた部分には縄文，押圧文の順に施文する。波頂部を中心に渦巻文，口唇部には沈線を巡らす。波頂部下には沈線で方形区画を設ける。1133は外反する口縁部をもち，胴部へは膨らむ器形である。口唇部は丸く収め，縄文を施す。端部が跳ね上がる横位の沈線上に刺突を行う。1134は口縁部の上端２cm程度を肥厚させ，その肥厚帯に沿って円形の押圧文，その下位に沈線と縄文で文様を構成する。1135は，口唇部に縄文を施す。1136は，外面に縄文を施す。1137は，口唇部にヘナタリによる押圧文を施す。1138・1139は接合はしないが，胎土・色調・文様構成等から同一個体と考えられる。いずれも沈線とヘナタリによる転圧文で文様を構成するが，磨消しが不十分である。1138は，口唇部にも転圧文が部分的に残る。1139は，縦位の沈線間に斜位の沈線を施す。1140は胴部と口縁部の境に段をもち，胴部には縄文を施す。1141は胴部に緩い屈曲部をもち，文様は沈線と縄文で構成される。

1131～1133・1135～1137・1140・1141はＲＬの縄文原体を横方向に，1134は縦方向に転がす。また，1131は縄文を施した後，区画を設け，そして区画外を磨り消す。1132・1134・1137・1140・1141は，設けた区画内に縄文を施す。1133・1135は，区画内に縄文は施文されない。

【Ⅱ類土器】

Ⅱ類土器は，口縁部文様帯の有無でⅡａ～Ⅱｃ類に細分した。

Ⅱａ類

口縁部に文様帯を区画する凹線や沈線をもたないものである。口唇部直下に凹点もしくは斜位の貝殻刺突を連続し，その下位に２本一組の凹線を横位に巡らせ，さらにその下位には２本一組の平行凹線で文様を構成するものである。口縁部は，外反する器形をもつ。器種は，深鉢と考えられる。

Ⅱｂ類

口縁部を凹線・沈線・突帯で区画したり，肥厚させたりして文様帯とするものである。さらに，文様帯に一つの文様を連続して施すものと文様帯に複数の文様を施すものがある。器種は，深鉢と考えられる。

Ⅱｃ類

Ⅱａ類・Ⅱｂ類に分類できないものである。具体的には文様帯が確認できないもの，凹線・沈線以外で施文されるものである。さらに，浅鉢もここに掲載した。以下，分類に従い記述する。

Ⅱａ類土器（第2-37図1142～1147）

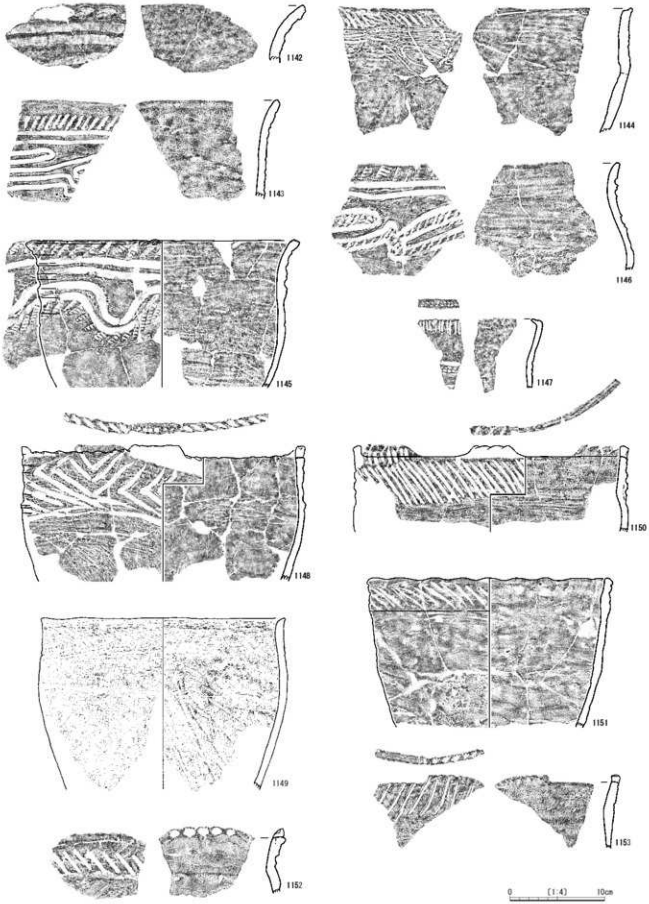
1142は，口唇部直下に凹点を連続して横位に施す。その下位には２本一組の凹線を横位に施す。口縁部は外反し，端部は丸く収める。1143は，口唇部からやや離れた位置に板状工具によると考えられる連続した斜位の刺突を巡らす。その下位には２本一組の凹線で文様を構成する。口縁部はやや外反し，その端部は丸く収める。1144は，口唇部直下に連続した斜位の刺突を巡らす。その下位には沈線で文様を描く。胴部がやや屈曲する器形で，口唇部を外側へ摘み出す。1145・1146は口唇部直下に斜位の貝殻刺突を横位に施し，その下に２本一組の凹線と押引状の貝殻刺突で文様を構成する。1145は平行曲線の下位の凹線に沿って押引状の貝殻刺突を配するが，部分的には凹線上にも貝殻刺突を施文するため凹線が消える。1146は，平行曲線の内部に貝殻刺突を施す。いずれも口縁部が外反し，胴部は膨らむ器形である。1147は器壁がやや薄く，外反する口縁部の端部を内側へ折り曲げ，棒状工具で２列の刺突を施す。口唇部直下は縦位の短沈線を連続して巡らせ，間隔を置いて２本の凹線間に棒状工具による２列の刺突が施される。胴部には補修孔の一部が残る。

Ⅱｂ類土器（第2-37～39図1148～1177）

1148～1161は，文様帯に斜位もしくは縦位の凹線や沈線の一つを連続して施すものである。口縁部は，直口もしくは外反する器形となる。

1148・1149は，文様帯に凹線で「く」の字状の文様を構成するものである。1148は横位の凹線で文様帯を区画し，文様帯には「く」の字状の凹線を組み合わせて文様を構成する。口唇部には台形状の突起をもつ。口唇部には斜位の刻みを，突起上面には刺突を施す。突起を何か所有するかは不明である。1149は幅が狭く，浅い凹線を「く」の字状に配する。文様帯の上下には明瞭ではないが，横位の凹線を巡らす。

1150～1153は，文様帯に縦位の凹線もしくは沈線で文様を構成するものである。1150は口縁部に粘土を貼り付け肥厚させ，直下に浅い凹線を巡らせ文様帯を区画する。文様帯には斜位の沈線を連続して密に施す。口唇部は平坦に仕上げ，粘土紐をひねるように貼り付け，方形状の突起を作る。突起外面には縦位の短沈線，突起上面には刻みを施す。1151は，胴部をケズリ出すことにより口縁部を肥厚させる。文様帯にはヘラ状工具による斜位の沈線を連続して密に施す。厚さの一定しない胴部はやや膨らみながら立ち上がり，口縁部はやや外傾する器形をもつ。口縁部は，細かく波打つような形状を呈する。1152は胴部をケズリ出し，口縁部を肥厚させる。さらに，肥厚部直下にごく浅い凹線を横位に巡らせ文様帯を作る。文様帯には斜位の幅の狭い凹線を斜位に連続して施す。口唇部は幅広く作り，そこに長さ８cmほどの粘土紐


1142
1143
1144
1145
1146
1147
1148
1149
1150
1151
1152
1153
0 (1:4) 10cm

第2-37図　Ⅱ類土器（1）

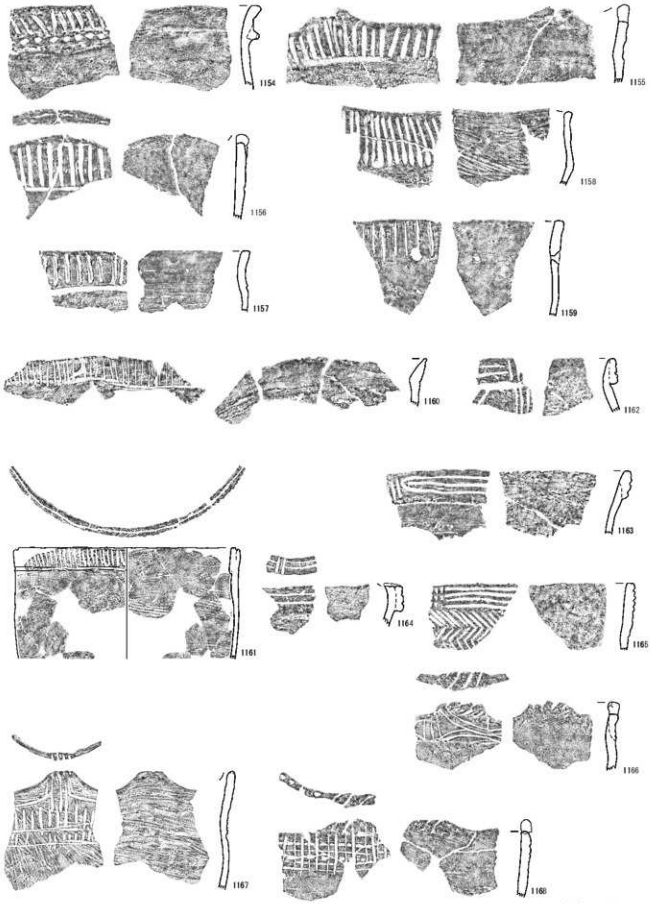
を貼り付け突起とするが，接合痕が明瞭に残る。突起上面の内側寄りには押圧による凹点を５個施す。1153は，口縁部文様帯を肥厚させる。口唇部は平坦に仕上げ，方形状の突起を付け，その上面には貝殻刺突を施す。文様帯には突起外面から連続した斜位の沈線を施す。

1154～1161は，文様帯に縦位の凹線もしくは沈線を連続して施すものである。1154は，凹点を施した突帯を横位に貼り付けて文様帯を区画する。文様帯には斜位の凹線を施す。直立する胴部に外反する口縁部をもつ器形である。1155は，凹線を横位に巡らせ文様帯を区画する。平坦に仕上げた口唇部に粘土を貼り付けて山形の突起を作る。文様帯には縦位の凹線を連続して施す。内面には稜をもつ。二次焼成のため，器面は摩耗が著しい。1156は文様帯を横位の凹線で区画し，縦位の凹線を連続して施す。口唇部には「U」字状の粘土紐を左右対称に貼り付け，波頂部とする。1157の文様帯はやや肥厚し，凹線で下を区画する。文様帯には縦位の凹線を連続して施す。口縁部は外反し，断面は方形を呈す。1158は口縁部をやや肥厚させ，文様帯とする。文様帯には縦位の凹線を施す。文様帯下部で屈曲し，やや内傾する口縁部をもつ器形である。波状を呈する口縁部にはススが付着する。1159の口縁部は，口唇部に向かって器壁が厚くなる。文様帯には縦位の沈線を施す。口縁部と胴部の境付近に外面から穿った補修孔が残る。1160は文様帯を沈線で区画し，縦位の沈線を連続して施す。口縁部はやや外に開き，口縁内面には稜をもつ。1161は幅の狭い文様帯をもち，文様帯は粘土を貼り付け肥厚させ，沈線で区画される。文様帯には縦位の沈線を施す。胴部がやや膨らみ，口縁部は直立する器形である。口唇部に沿って細沈線が巡る。

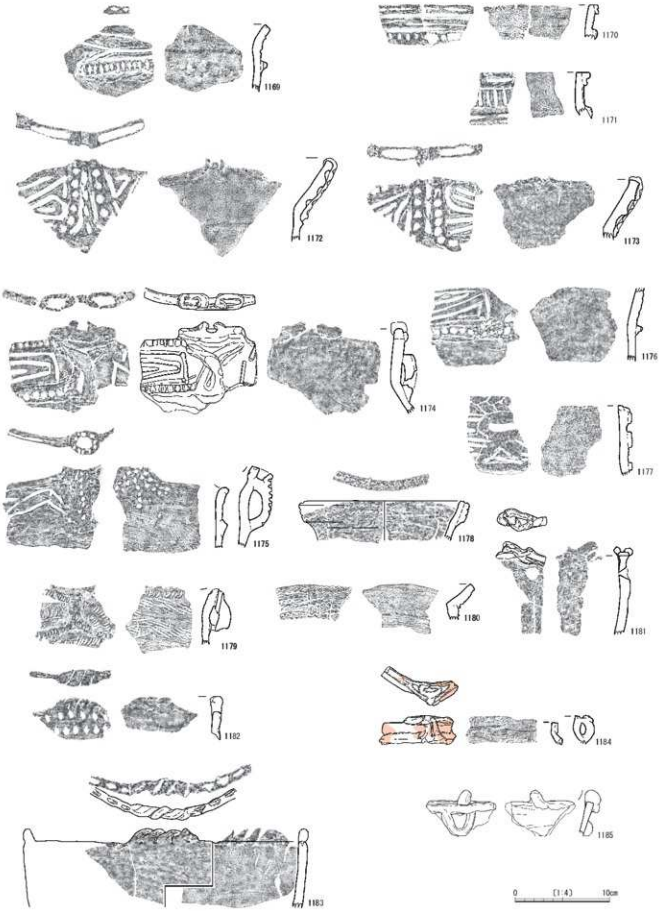
1162～1177は，文様帯に複数の文様を施すものである。1162は粘土を貼り付け肥厚させ，縦位と横位の沈線を配する。さらに，胴部には縦位と斜位の沈線を施す。内傾する口縁部は，端部で直立する器形をもつ。1163は粘土を貼り付け口縁部を肥厚させ，そこに縦位・横位の沈線で文様を構成する。1164は口縁部に粘土を貼り付けて肥厚させ，口唇部も幅広く作る。口唇部には区画する２条の沈線を配し，その両側に２条の沈線を口唇部に沿って巡らせる。文様帯にも２条の沈線を巡らせる。1165は口縁部を肥厚させ文様帯とするが，施文は胴部まで及ぶ。口唇部直下に縦３列の連点の横に４条の沈線を施す。その下に斜位の沈線を組み合わせて矢羽根状の文様を描く。細かく波打つような口縁部を呈する。1166は，文様帯と胴部の境に段をもつ。文様帯には沈線を縦位に３条，その横には２本一組の平行曲線を施す。口唇部には粘土紐をひねるように貼り付ける。1167は，やや薄手の土器である。口縁部は肥厚しないが，横位の沈線で区画して文様帯をつくる。口唇部に山形の波頂部をもち，刻みを施す。文様帯には縦位と横位の沈線で文様を描く。胴部はやや膨らみをもち，口縁部はやや外に開く。1168は，文様帯に沈線で格子目状の文様を描く。口唇部には粘土紐をひねるように貼り付け，山形の突起を作る。突起以外の口唇部には刺突が施される。1169は，刻目突帯を口縁部下端に貼り付け区画する。口縁部には沈線で文様を施す。口縁部には刺突が施される。1170は，口縁部の上端と下端に突帯を貼り付けて区画する。上端の突帯と突帯間には横位の短沈線を，下端の突帯には刻みを施す。1171は，口縁部上端と下端に突帯を貼り付け文様帯とする。突帯上には横位の短凹線を，突帯間には縦位の短沈線を施す。1172は，口唇部に向かって厚みを増す口縁部をもつ。文様帯には口縁部内面から貼り付けられた２条の突帯が垂下し，文様帯下辺で左右に分かれ横位に展開する。垂下する突帯には連続した凹点が，突帯の内側には突帯に沿った縦位の沈線を，その沈線間には強い刺突が施される。突帯の左右には，幅広い沈線で文様が構成される。幅広い口唇部には粘土を貼り付けて突起を作り，その上面には凹線を施す。外面の胴部と口縁部の境には段を，内面には稜をもつ。1173は，1172とほぼ同じような器形・文様構成をもつ。1174は，肥厚する口縁部の下端を凹点を施す突帯で区画する。口唇部に方形の突起を設け，粘土紐を周囲に絡ませるように貼り付ける。突起の下位には交差する粘土紐を把手状に貼り付ける。これの左右の文様帯には沈線で文様を構成する。膨らむ胴部は口縁部との境で屈曲し，口縁部は直立する器形である。内面には緩い稜をもつ。1175は，口縁部下端を三角突帯で区画する。文様帯には沈線で山形の文様を描く。波状口縁の波頂部には粘土紐を円形に貼り付け，上面には刺突を施す。さらに，波頂部から文様帯を区画する三角突帯までの把手を取り付け，刺突を縦に１列施す。刺突は波頂部内面にも施される。直立する口縁部は，その端部で外反する。1176は，口縁端部を欠損する。口縁部の下端を刻目突帯で区画し文様帯とするが，器壁の肥厚は見られない。文様帯には，沈線で方形に区画した中に斜位の沈線が施される。刻目突帯と連続して貼り付けられた粘土紐が部分的に残存するが，把手状に粘土紐を貼り付けた可能性も考えられる。口縁部がやや外に開く器形をもつ。1177は，文様帯のみ残存する。口唇部に２本の粘土紐を編み込む様に貼り付ける。さらに，これに接して粘土紐を「８」の字状に器面に接着する。周囲には横位や斜位の沈線が施される。口縁部は，ほぼ直立すると考えられる。

Ⅱｃ類土器（第2-39図1178～1185）

1178・1179は文様帯をもち，1181・1183は文様帯をもたず。1180・1182は文様帯の有無が不明なものである。1178は粘土を貼り付け文様帯を肥厚させ，貝殻刺突を横位に巡らせ，口唇部にも貝殻刺突を施す。1179は，口縁部上端と下端に突帯を貼り付け区画する。さらに，突帯


1154
1155
1156
1158
1157
1159
1160
1162
1163
1161
1164
1165
1166
1167
1168
0 (1:4) 10cm

第2-38図　Ⅱ類土器（2）


1169
1170
1171
1172
1173
1174
1175
1176
1177
1178
1179
1180
1181
1182
1183
1184
1185
0
(1:4)
10cm

第2-39図　Ⅱ類土器（3）

間に粘土紐を渡し，把手を作る。また，把手の上下接着面に焼成前の穿孔が残る。穿孔は上部から下部に向かって一直線に行われている。突帯・文様帯には爪形刺突が施されるが，施文は口縁部内面や文様帯外にも及ぶ。1180は口縁部から胴部にかけて貝殻刺突を横位に，その後に縦位・横位の沈線が施される。1181は口縁部の器壁が薄く，外面から内面に向けて焼成後の穿孔がある。口唇部には粘土紐を交差させるように貼り付けて突起を作る。1182の口縁部には１列目は斜め上方へ，２列目は斜め下方に刺突が施される。口唇部には粘土紐をひねるように渡して突起を作る。1183は，口唇部に粘土紐をひねるように貼り付けて突起を作る。突起以外の口唇部には刺突を施す。口縁部に文様帯はなく，無文である。

1184・1185は，浅鉢と考えられる。1184は口縁部が直立し，胴部が膨らむ器形をもつ。口唇部に粘土紐を貼り付け突起を作り，さらに突起から胴部屈曲部へ粘土紐を渡して把手とする。1185は，口唇部に粘土紐を摘み状に貼り付け突起を作る。さらに，粘土紐を口縁部外端に沿って突起の下方に「U」字状に貼り付ける。

【Ⅲ類土器】

口唇部直下に横位の沈線を２条巡らせ，その下に２本１組の沈線で多様な文様を描くものである。文様は胴部上位まで広がるもの，口縁部に集約するものがある。器種は深鉢，鉢，台付皿，小型土器，器台状を呈する土器等があり，多様性に富む。

深鉢は口縁部文様によりⅢａ類からⅢｄ類に分類し，Ⅲａ類とⅢｂ類はさらに細分した。深鉢の口縁部形態は多岐にわたり，くびれをもって外反するもの，直立するもの，内湾するものなどがある。また，胴部は張るものと張らないものがある。鉢はⅢｅ類とし，さらにⅢe-１類からⅢe-４類に細分した。鉢には把手をもつものともたないものがあり，把手がつくものは多様な形状をもつ。Ⅲｆ類は小型土器，台付皿，その他の土器を含めた。

Ⅲ類土器の分類は，次のとおりである。

Ⅲａ類土器

口唇部直下に横位の沈線を巡らせ，その下位に複数の文様を沈線で施すものである。Ⅲａ類は文様の及ぶ範囲と文様構成により２つに細分した。

Ⅲａ-１類　文様を施す範囲が口縁部から胴部上位に及び，複数の文様を施すものである。

Ⅲａ-２類　文様を施す範囲が口縁部に集約し，複数の文様を施すものである。

Ⅲｂ類土器

口縁部に単一の文様を施すものである。文様の及ぶ範囲で大別し，文様が口縁部に集約されるものを７つに細分した。

Ⅲｂ-１類　口縁部から胴部上位までの範囲に単一の文様が施されるものである。

Ⅲｂ-２類　文様が口縁部に集約し，靴形文を描くものである。

Ⅲｂ-３類　文様が口縁部に集約し，山形文を描くものである。

Ⅲｂ-４類　文様が口縁部に集約し，横「W」字文を描くものである。

Ⅲｂ-５類　文様が口縁部に集約し，波形文を描くものである。

Ⅲｂ-６類　文様がほぼ口縁部に集約し，平行沈線文の間に刺突を施すものである。

Ⅲｂ-７類　Ⅲｂ-１～６類に分類できなかったものである。

Ⅲｃ類土器

Ⅲａ類・Ⅲｂ類土器に含まれないものである。

Ⅲｄ類土器

無文の深鉢である。

Ⅲｅ類土器

鉢をまとめ，次のように細分した。

Ⅲe-１類　口縁部から胴上部の文様帯に複数の文様を施すものである。

Ⅲe-２類　文様体に主として靴形文・山形文・横「W」字文等の単一文様を施すものである。

Ⅲe-３類　文様帯に複数の沈線とその間に刺突を施すものである。

Ⅲe-４類　Ⅲe-１～３類に含まれないものと橋状把手をまとめた。

以下，分類に従って記述する。なお，掲載番号1213・1214・1239・1344は，放射性炭素年代測定を行った。

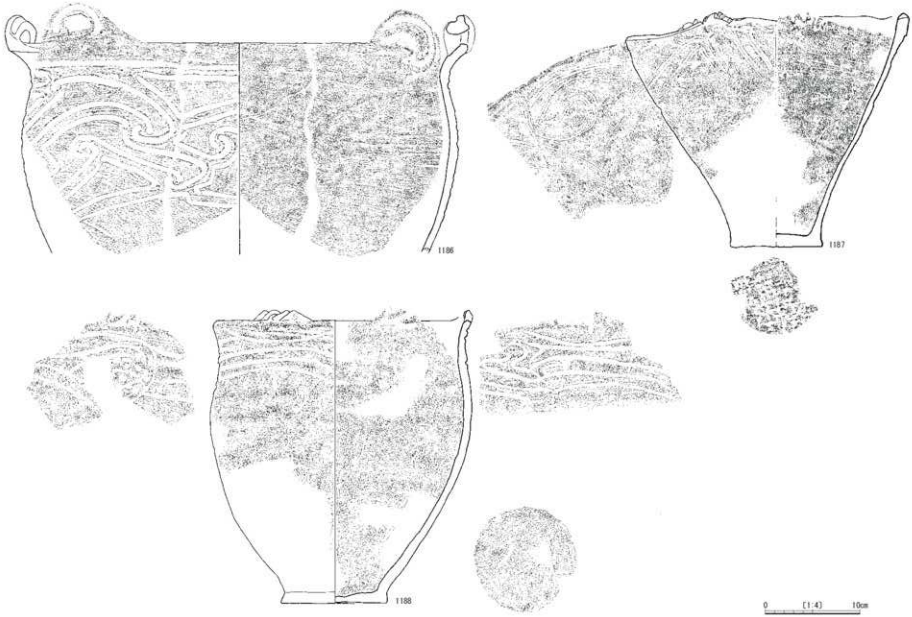
Ⅲａ類土器

Ⅲａ-１類土器（第2-40図1186・1187）

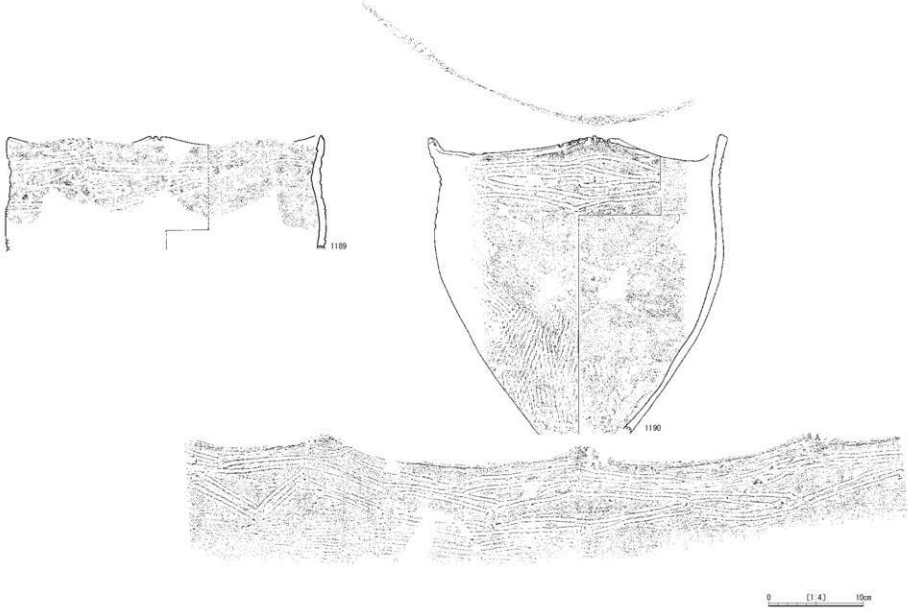
1186は口唇部直下に横位の沈線を巡らせ，その下位に太い沈線で曲線文，鉤手状の渦巻文，直線文を描く。胴部は緩やかに張り，口縁部は外反する器形をもつ。接合はしないが，同一個体と考えられる土器片も含め突起が２か所残存する。突起は口縁部の外面と内面を渡すように貼り付けられ，突起の中央部に２㎝程度の穿孔を施す。さらに，穿孔に沿うように半円形の沈線を内外面に描く。1187は，口縁部が直線的に外頻する。口縁部には渦巻文と山形文を施す。突起が２か所残存し，全体では３か所と考えられる。突起には５～６条の刻みが施される。

Ⅲａ-２類土器（第2-40～44図1188～1198）

1188～1190は，くびれをもちながら口縁部が外反するものである。1188は，口縁部に渦巻文・曲線文を描く。渦巻文の間には，刺突を行う箇所もある。口唇部に突起を３か所もつが，１か所は欠損する。突起は，２本の粘土紐を組紐状にねじって作る。口縁部は外反し，くびれ

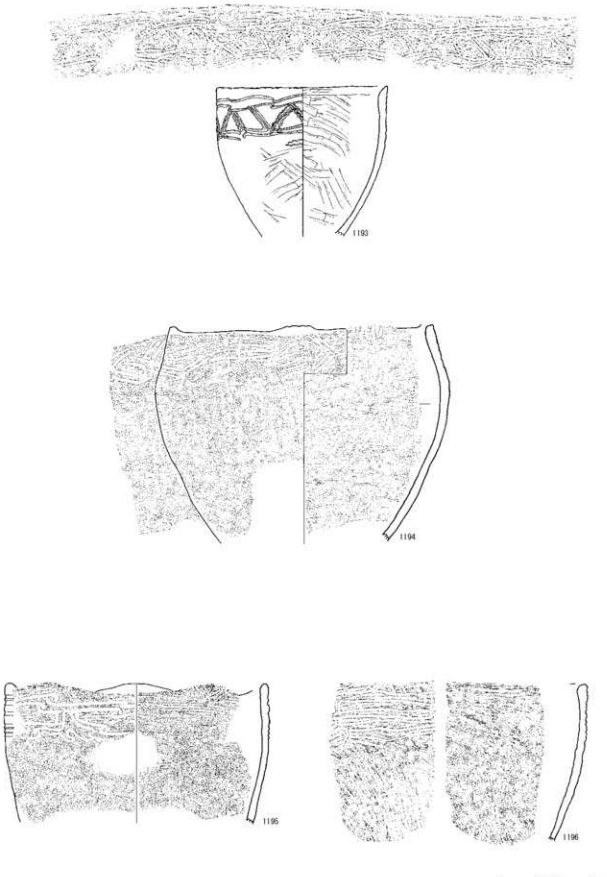


第2-40図　Ⅲ類土器（1）

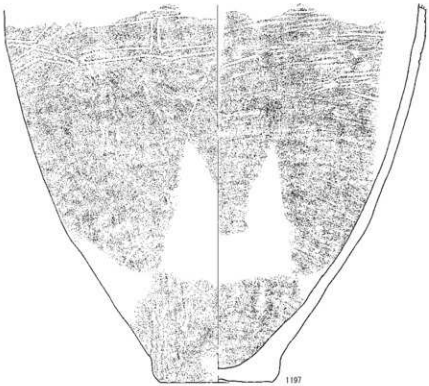


第2-41図　Ⅲ類土器（2）

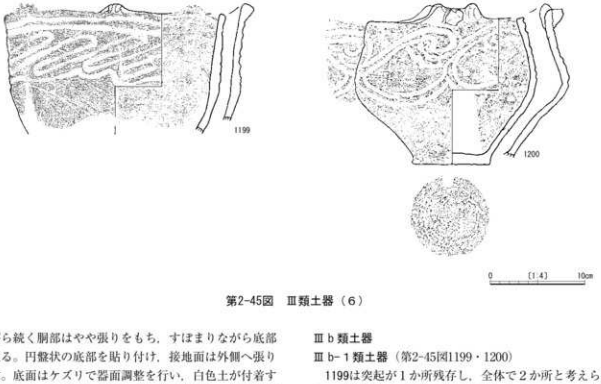
第2-42図　Ⅲ類土器（3）



第2-43図　Ⅲ類土器（4）



第2-44図　Ⅲ類土器（5）



第2-45図　Ⅲ類土器（６）

ながら続く胴部はやや張りをもち，すぼまりながら底部に至る。円盤状の底部を貼り付け，接地面は外側へ張り出す。底面はケズリで器面調整を行い，白色土が付着する。1189は，口縁部に渦巻文や曲線文を描く。波頂部が２か所残存し，全体で４か所と考えられる。波頂部の上面から外面にかけて４条の沈線を，波頂部の両側にも口唇部から内面に向けて２条の沈線を施す。波頂部直下の内外面には曲線文を施す。口縁部の内面には緩い稜をもつ。1190は，口縁部に山形文・鉤手文・方形状の文様を描く。波頂部が４か所残存し，上面に貝殻刺突を５～９条施す。波頂部直下の外面に半円形の沈線を２条施す箇所もある。

1191～1197は，口縁部が内湾する。1191は，口縁部に横「W」字文や「S」字文，曲線文を描く。1192は，口縁部に「S」字文や楕円形の曲線文を描く。1193は口縁部の上下に２本一組の波形文を横位に配し，その間に斜位の沈線を施す。その後貝殻刺突による山形文を施す。口唇部の１か所に２条の刻みを施すが，文様を展開させる起点にしたと考えられる。1194は口縁部に渦巻文や菱形文等を描き，突起が２か所残存する。1195は，口縁部に鉤手文や曲線文を描く。波頂部は，１か所残存する。1196は，口縁部に三角文や方形状の文様を描く。1197は口縁部を欠損するが，内湾する器形と考えられ，「X」及び「I」字状の文様を描く。

1198は口縁部が短く外反し，胴部が張る器形をもつ。口縁部内面には稜をもつ。口縁部のくびれ部には２条の沈線を巡らせ，その下には渦巻文・鉤手文・靴形文が施される。文様の割り付けを行っていると考えられる。

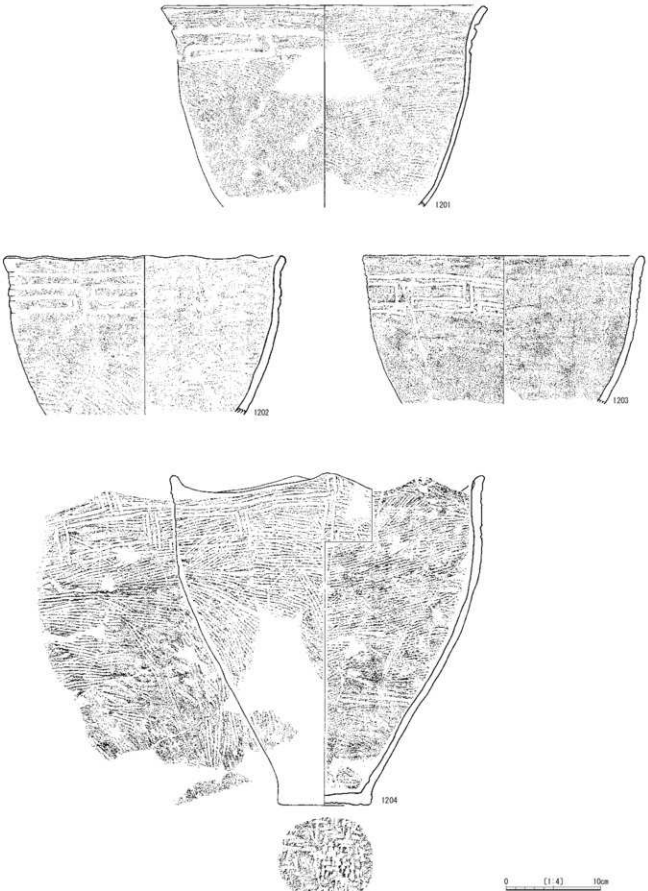
Ⅲｂ類土器

Ⅲｂ－１類土器（第2-45図1199・1200）

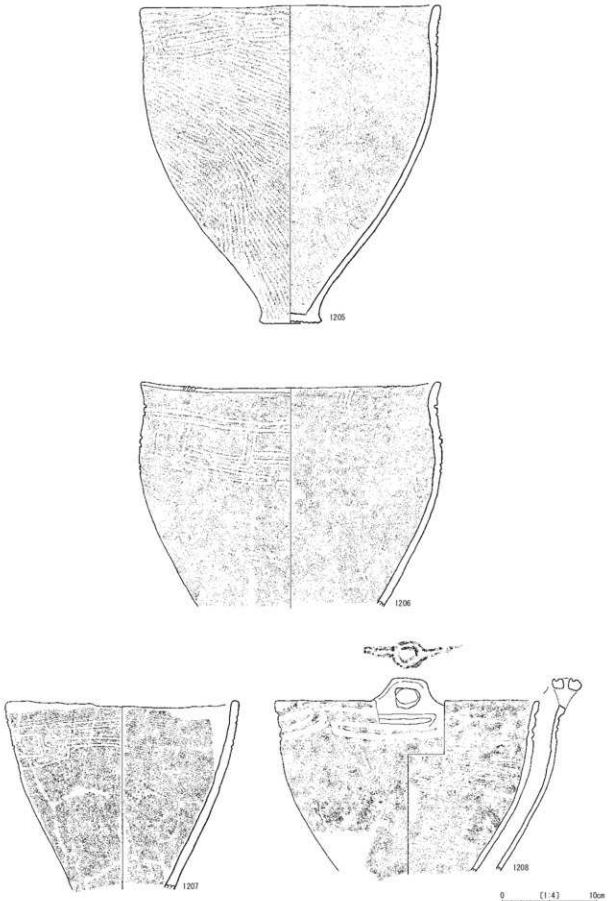
1199は突起が１か所残存し，全体で２か所と考えられる。口唇部直下に２条の沈線を巡らせ，その下に大波文，さらに下に波形文を施す。胴部の張りは緩く，口縁部はやや外反する。1200は底部から胴部へは直線的に開き，張り出す胴部と内湾する口縁部をもつ器形である。突起は２か所残存するが，１か所は痕跡が残る。それぞれの突起は頂部を２か所もち，２か所の頂部に直交するもう１か所の頂部を外面側にもつ。口縁部から胴部にかけて大振りな渦巻文を横位に展開する。底面には鮠骨の圧痕と白色土が残る。

Ⅲｂ－２類土器（第2-46～50図1201～1222）

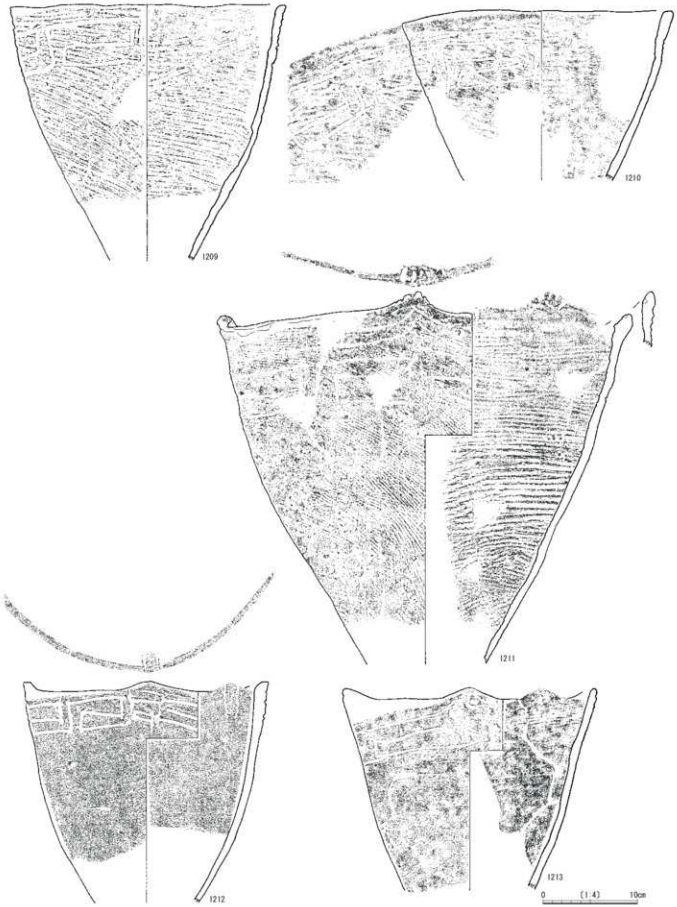
1201～1206は，口縁部が外反する。この中でも，1201・1202・1205・1206はややくびれながら外反する。1201～1204は靴形文が明確であるが，1205・1206は靴形文が変形する。1202は，胴下半に条痕が残る。1204は口縁部がやや外反し，波頂部を４か所もつ。波頂部外面には縦位の沈線を３条施し，これを起点に口縁部の文様が展開される。また，波頂部の内面には円形の刺突を１か所施し，ここから放射状に３条の沈線を配置する。胴部はやや張るが，底部へはすぼまりながら至る。円盤状の底部はやや摘み出すように貼り付ける。また，網代の圧痕が残る底部は，やや上げ底気味となる。1205は平口縁で，やや張りをもつ胴部から底部に向かってはすぼまる。口径に対して底径が小さい。外面には明瞭な条痕が，底部には網代痕が残る。1206は平口縁で，口唇部から内面にかけて縦位の沈線を３条施すが，全体で何か所に施されるかは不明である。この沈線の端部には半裁竹管文



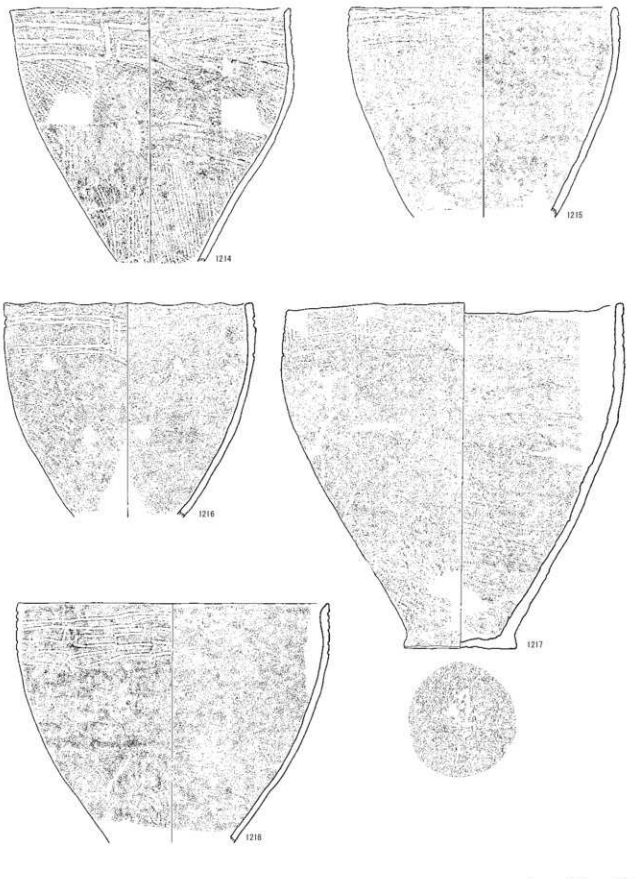
第2-46図　Ⅲ類土器（7）



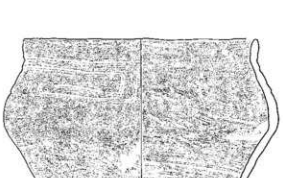
第2-47図　Ⅲ類土器（8）



第2-48図　Ⅲ類土器（9）



第2-49図　Ⅲ類土器（10）



第2-50図　Ⅲ類土器（11）

を施す。また，この沈線が起点となって口縁部文様が展開されてはいない。外面の文様は，靴形文で区画した中にも小さな靴形文を描く。

1207・1208は，口縁部が直立するものである。1207は平口縁で，口唇部は波打つ。横位の沈線を巡らせた下に靴形文を描くが，部分的に規格性が崩れる。1208は突起部をもつが，全体的な数は不明である。突起の中央部は円形に切り取られる。さらに，上面は円形に沈線を配した中にも孔をもつ。文様帯は狭く，口唇部直下の沈線と靴形文が一体化している。

1209～1213は，口縁部が直線的に外に開くものである。1209は，口縁部に靴形文を一定間隔で施す。しかし，一周した所に空白が生じるため鉤形の沈線で埋める。内外面とも明瞭な条痕が残る。1211は３か所の波頂部が残存し，全体では４か所と考えられる。波頂部の上面から内面にかけて５条の刻みを施した後，内面には２～５か所の刺突を行う。外面の文様は波頂部下に起点をもち，２条の並行沈線を巡らせ，その下位に靴形文を描く。文様の割り付けを行っていないため，部分的に文様の単位が小さくなる。外面は条痕後ナデ調整を行い，内面には条痕が明瞭に残る。1212は波頂部が２か所残存し，全体で４か所と考えられる。波頂部の内面には貝殻刺突を施す。波頂部が文様の起点とはならず，靴形文の単位幅が一定しない。1213は，波頂部直下の外面に変形した靴形文を描く。

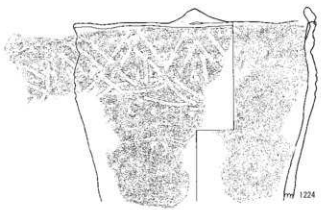
1214～1218は内湾する口縁部で，いずれも平口縁である。1217・1218の文様は，靴形文の変形である。1216は文様の割り付けを行っていないため，文様の単位が一定しない。口縁はやや波打つ。1217は，かなり歪な靴形文を施す。外面は条痕の後にナデ調整を，内面はケズリの後にナデ調整を行う。底部は網代痕をナデ消し，白色土が全面に付着する。円盤状の底部は，摘み出すように貼り付ける。底部の内面には指頭圧痕が，明瞭に残る。

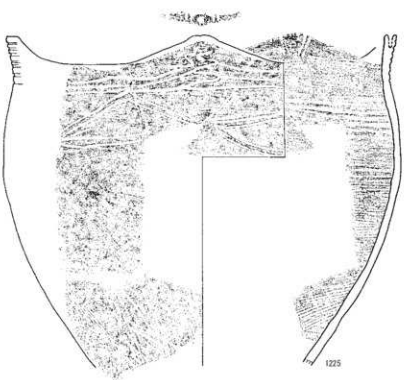
1219・1220は口縁部は短くやや外反し，胴部は強く張る。口縁部と胴部の境から胴上半に靴形文を展開する。1219は，胴部から底部に向かってすぼまる器形をもつ。口縁部にはススが付着する。外面の胴下半には条痕が残り，内面は条痕後ナデ調整を行う。1220は，靴形文の下位に鉤手文を配する。1221・1222は文様帯の幅が狭く，肥厚する。1221は，補修孔が残る。

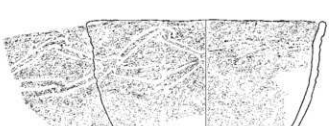
Ⅲb－３類土器（第2-51～53図1223～1236）

1223～1227は，口縁部がくびれをもって外反する。1223・1224・1226・1227は平口縁で，1225は波状口縁となる。1223は口縁部に山形文を組み合わせて菱形状の区画を設け，その中に２条の短沈線を施す。口唇部は平坦に仕上げ，口縁内面には緩やかな稜をもつ。口縁部には補修孔が穿たれる。1224は，1223と文様構成や胎土・色調が似ていることから同一個体と考えられる。突起が，１か所残存する。1225は，波頂部が１か所残存する。波頂部の口唇部には深い刺突を１か所，この両側には内面に向かって２条の短沈線を施す。波頂部直下の外面には横「W」字文を施し，その両側には横位の沈線を３条施す。さらに，その下位には山形文を横位に展開する。1226・1227は，口縁部に変形した山形文を横位に展開する。1227は内面に３～４条の沈線を４か所に施すが，４か所の間隔は不均等である。口縁部に変形した山形文を一定の間隔で巡らせるが，終点では文様の幅が狭くなる。底面には網代の圧痕が残るが，一部はナデ消しである。また，白色土が付着する。胴部は幾分膨らむが，左右でその度合いに違いがある。土器は自立するが，その座りは悪い。

1228～1233は，直立もしくは外開きになる口縁部をもつ。1228・1229・1231・1233は平口縁，1230・1232は波

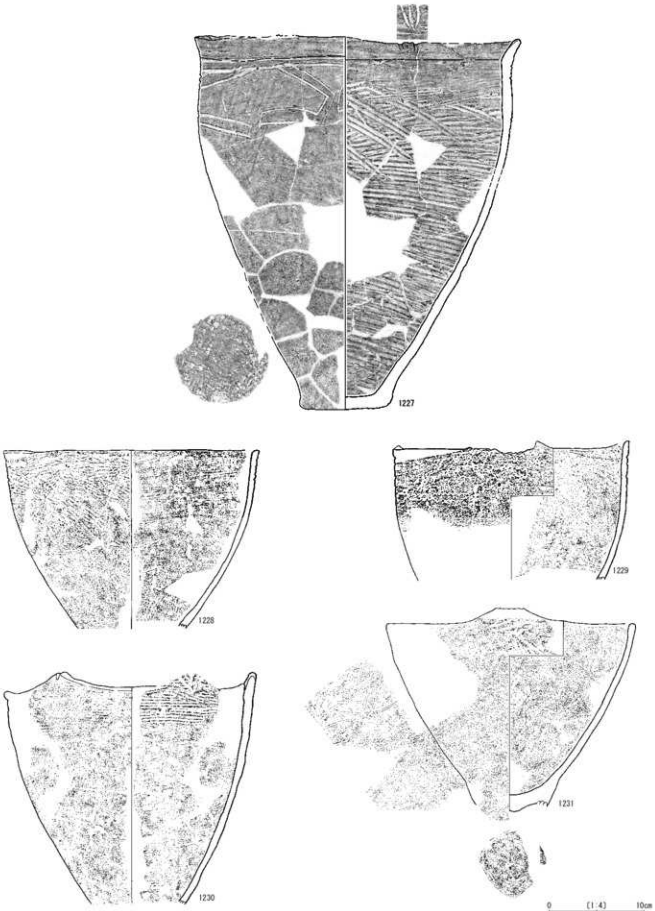




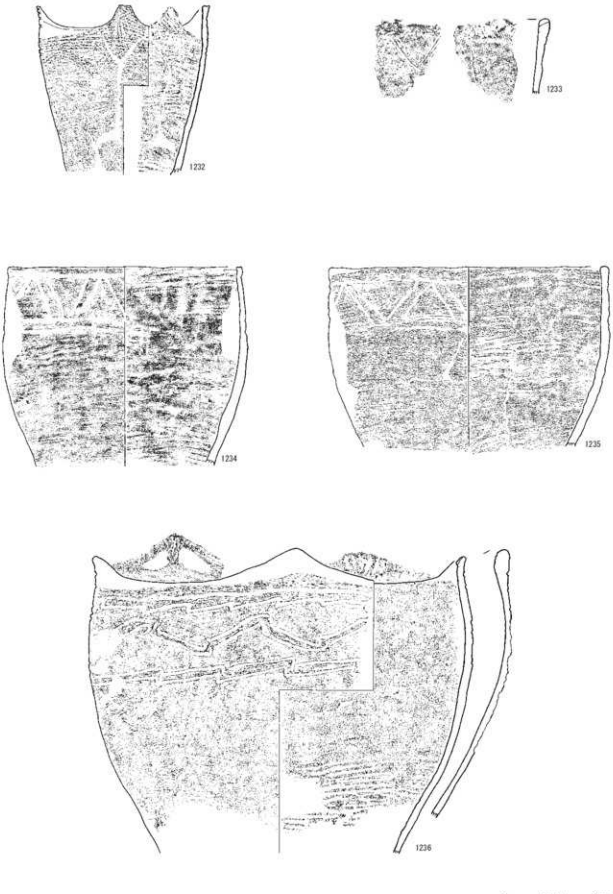


0 (1:4) 10cm

第2-51図　Ⅲ類土器（12）



第2-52図　Ⅲ類土器（13）



第2-53図　Ⅲ類土器（14）

状口縁となる。1228は横位に連続した貝殻刺突を２段施し，その下に貝殻刺突で山形文を横位に展開する。等間隔で文様は施されるが，終点と考えられる部分では文様構成が乱れる。1229は破損した突起の痕跡が２か所残存し，その間隔からは全体で３箇所の突起を想定できる。貝殻刺突の山形文を組み合わせて菱形状の文様を横位に展開する。1230は，波頂部が３か所残存する。波頂部の内面には縦位とその両側に斜位の刻みを施す。波頂部の外面直下には平行沈線で「Ｖ」字状の文様を施す。さらに，その下には山形文を横位に展開した後，口唇部直下に横位の平行沈線を施す。1231は突起が１か所残存するが，上部は破損する。口縁部の一部に山形文が施されるが，他は無文である。底部も欠損するが，中空か脚台が付くと考えられる。底面には白色土が付着する。1232は台形状の波頂部をもち，口縁部には貝殻刺突で山形文を横位に展開する。1233は内頸した平坦な口唇部には斜位の沈線を重ねて山形文を，口縁部には平行沈線で山形文を施す。口唇部には突起をもつ。

1234～1236は，内湾する口縁部をもつ。1234・1235はいずれも口唇部直下に１条，口縁部下位に２条の沈線を配し，その間を２条の沈線で山形文を施す。1236は３か所の波頂部が残存し，全体で２対の４か所と考えられる。１対は低い山形の波頂部で，内面に貝殻刺突を縦位に施す。もう１対の波頂部は高さがあり，内面の両脇をえぐり取る。口唇部直下に横位の沈線を１条，その下に鉤手状の沈線を巡らす。主文様の山形文は，鉤手状の沈線を組み合わせて描く。

Ⅲｂ－４類土器（第2-54～56図1237～1249）

1237～1242は，くびれながら口縁部が外反するものである。1237は平口縁で，口唇部は平坦となる。外面は条痕が全面に残り，横位に横「Ｗ」字文を施す。1238は波頂部を４か所もち，ここを起点に口唇部直下に横位の沈線を巡らす。横「Ｗ」字文を一定の幅で施すが，狭くなる部分もある。波頂部内には，「Ｘ」字状に貝殻刺突を施す。1239は外面に横「Ｗ」字文を展開するが，波頂部の内外面には沈線を山形に重ねて施す。1240は波頂部が１か所残存し，全体では４か所と考えられる。波頂部には５条の刻みを施し，内面に渦巻文を描く。口唇部直下に１条の沈線を横位に巡らし，波頂部の直下は鉤形の施文を行う。横「Ｗ」字文は，一定の間隔で施される。1241は，２か所残存する波頂部に５条の刻みと貝殻刺突を施す。さらに，内面には曲線文と貝殻刺突で文様を構成する。外面には波頂部を起点に施文する。２組の横「Ｗ」字文は一筆描きで，その間は鉤形文を施す。1242は突起が１か所，突起の痕跡が１か所残存する。全体では３か所の突起をもつ。山形の突起は上部を肥厚させ，中央部を剥ぎ取る。横に間延びした横「Ｗ」字文を展開する。

1243は，口縁部が直立する。平口縁で，１か所の突起が残存するが，剥離の痕跡から全体では２か所と考えられる。突起の内面には，斜位の短沈線を６条施す。横「Ｗ」字文は規格性に乏しく，口縁部には指頭圧痕が残る。底部は，網代痕を削って器面調整を行う。器面には白色土が多く付着する。内面は，ケズリによる調整を行う。

1244～1246は，口縁部が直線的に外に開くものである。1244は，波頂部を４か所もつ。波頂部の外面には３条の沈線を縦位に，内面には４条の刻みを施す。波頂部を起点に鉤形の沈線を横位に施す。横「Ｗ」字文を施すが，文様が上下にずれる部分もある。内外面及び底面には条痕が明瞭に残る。底部から口縁部まで直線的に開く器形をもつ。丸底状の底部に円盤状の粘土を組み合わせて成形する。1245は４か所の波頂部をもつが，その間隔は一定でない。波頂部内面には刻みを施すが，その数はそれぞれ異なる。口縁部には焼成後の補修孔が２か所残る。

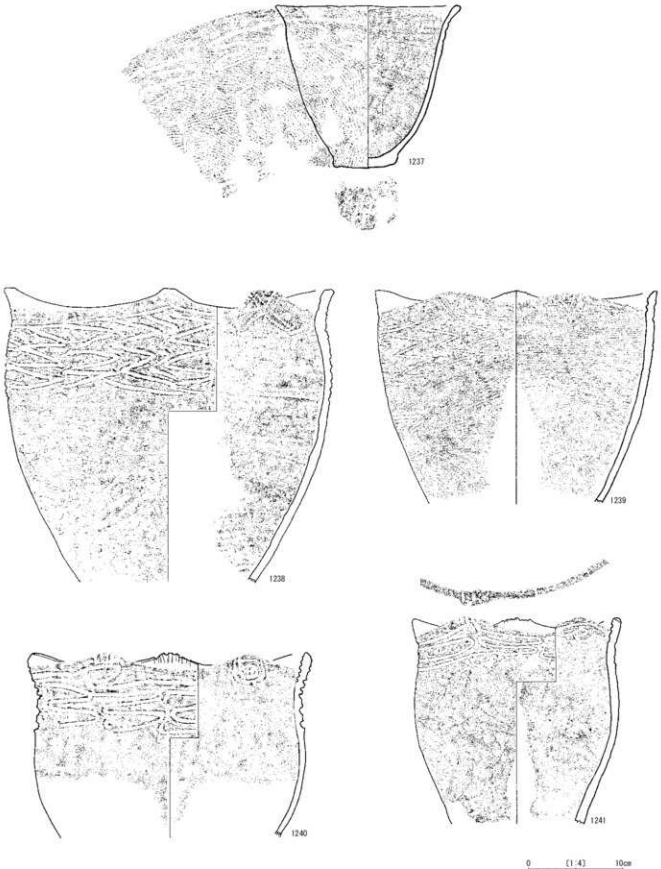
1247・1248は，口縁部が内湾する。1247は波頂部と突起が１か所ずつ残存するが，それぞれ２か所と考えられる。突起は，２本の粘土紐をねじって口唇部に貼り付ける。横「Ｗ」字文は規格性に欠け，突起や波頂部が外面文様の起点となっていない。1248は波頂部が１か所残存し，内面は斜位と縦位の沈線を施す。波頂部直下に互いに向かい合った２組の横「Ｗ」字文を一筆描きで施す。口縁部には焼成後の穿孔が１か所残る。胴部の張りがやや強く，ここに最大径をもつ。

1249は口縁部が短く，胴部が張る。短い口縁部は外に開き，内面に縦い稜線をもつ。胴部は強く張る器形で，ここに最大径をもつ。口縁部内面に横位の貝殻刺突を連続して２段施す。

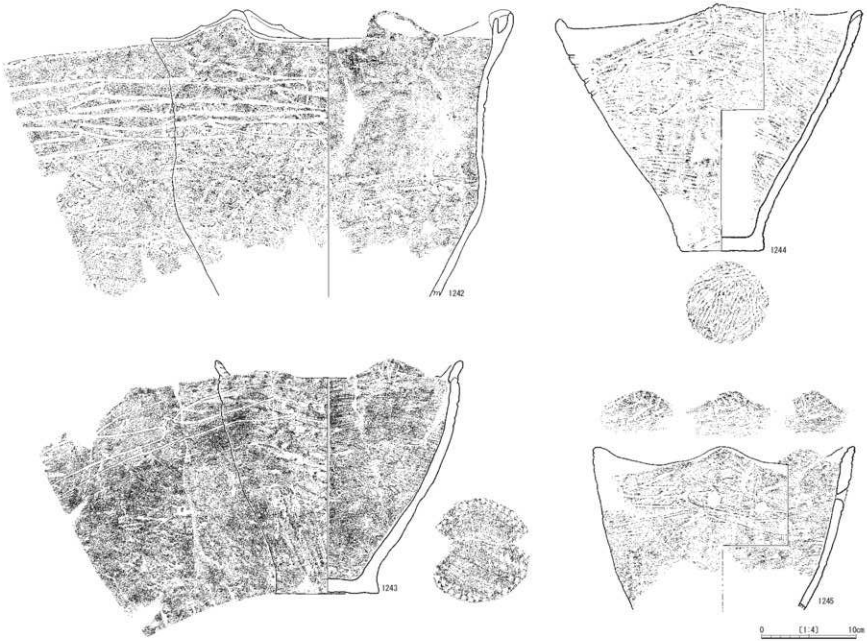
Ⅲｂ－５類土器（第2-57～58図1250～1268）

1250はくびれをもちながらやや外反する口縁部に，胴部は幾分張る器形である。口唇部直下に１条の沈線を巡らせ，その下に波形文を横位に展開する。

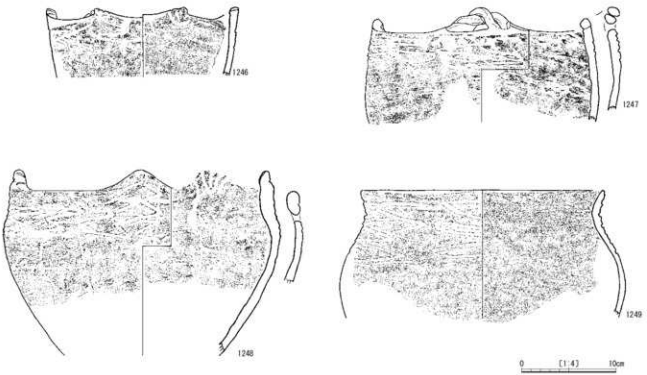
1251～1257は，直立する口縁部をもつ。1251は完形品で，波頂部を４か所もつ。１対は３条の沈線を施す山形の波頂部で，１対は粘土紐をねじって波頂部を作る。口唇部直下に横位の沈線を巡らすが，山形波頂部の直下では沈線が跳ね上がり，もう１対の波頂部の直下では沈線が折れ曲がる。横位の沈線の下には波形文を横位に展開する。1252は波頂部を４か所もつと考えられる。対角に高さが異なる波頂部には刻みを施す。不規則に折れ曲がる横位の沈線と山形状の波形文を展開する。1253は波頂部を４か所もつと考えられるが，１対は山形の波頂部，もう１対は粘土を貼り付けて肥厚させた低い波頂部である。横位の沈線と波形文で文様を展開する。1254は，波頂部を４か所と想定する。波頂部内面には円形の刺突と放射状の沈線を３条施す。口唇部直下に横位の沈線はなく，２条の波形文のみを展開する。上位の波形文は，波頂部が起点となって施される。1255～1257は，変形波形



第2-54図　Ⅲ類土器（15）



第2-55図　Ⅲ類土器（16）



第2-56図　Ⅲ類土器（17）

文を横位に展開する。1256は刻みを施す波頂部が2か所残存し，全体で3か所と考えられる。1257は刻みを施す波頂部を3か所もち，それぞれの波頂部には頂部が2か所ある。また，波頂部の上面と内面には短沈線を施す。口縁部には4条の波形文が展開するが，波頂部下では沈線が波頂部に向かって跳ね上がる。

1258～1264は，口縁部が直線的に外に開く器形をもつものである。1258は平口縁であるが，口唇部が波打つ。口縁部に2条の波形文を横位に展開するが，部分的に鉤形状の文様に変化する。1259は上部を欠損した突起を2か所残し，全体では3か所と考えられる。1260は刻みを施す突起を4か所もち，横位の沈線と波形文で文様を構成する。1261は波頂部1か所，波頂部の痕跡が1か所残存し，全体では3か所と考えられる。口唇部直下に横位の沈線を1条施すが，波頂部下で跳ね上がる。1262は突起を4か所もつと考えられ，4～5条の刻みを施す。口縁部には波形文の変形と考えられる渦巻文と横位の沈線を施す。1263は4か所の波頂部をもつと考えられ，変形した波形文を口縁部に施す。1264は口唇部に粘土を貼り付け，前後，左右方向，上方からも孔を貫通させた橋状の突起をもつ。

1265～1268は，内湾する口縁部をもつ。1265は平口縁で，口縁部に不揃いの波形文を施す。1266は，波頂部上面から内面にかけて縦位の沈線を5条施す。口縁部には明瞭な波形文を施す。1267は波頂部上面に5条の刻み，外面には刻みに呼応するような刺突を施す。横位に展開する波形文は，短沈線を組み合わせる。1268は波頂部に5条の刻み，波頂部外面には刻みと接して縦位の沈線を5条施す。口縁部に展開する波形文は，規格性に乏しい。

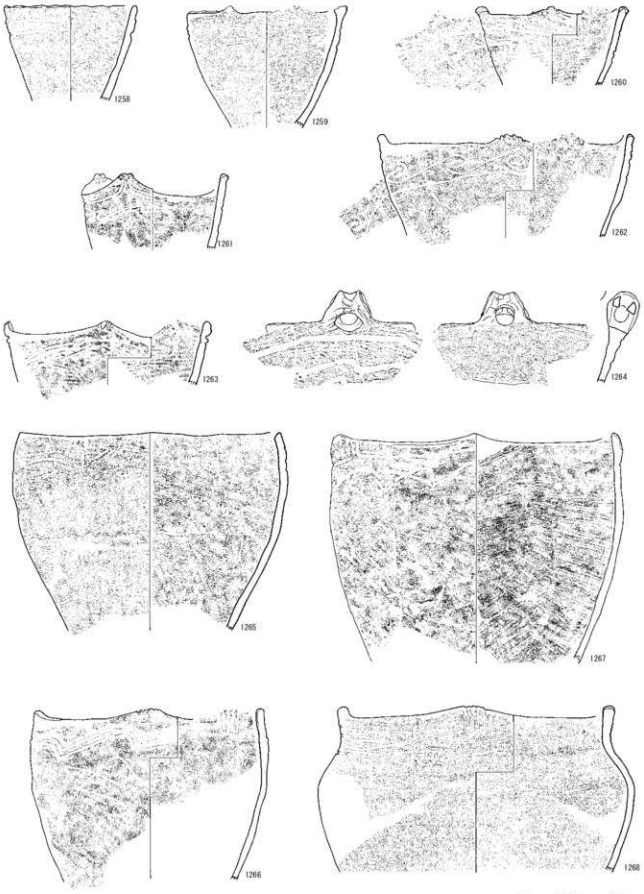
Ⅲb－6類土器（第2-59図1269～1274）

1269はくびれをもちながら口縁部が外反し，胴部はやや張り，すぼまりながら底部に至る器形である。波頂部が2か所残存し，全体では4か所と考えられる。波頂部内面に縦位の沈線を3条施す。口唇部の上面から内面にかけて刻みを密に巡らす。口縁部に波形文を2条巡らせ，その間には刺突を連続して行う。さらに，下位の波形文に接して1段3つの刺突を3段，6か所に施す。1270は，口縁部が直立する。上部を欠損する突起が残存し，ヒレ状の突起と考えられる。口唇部には刺突を連続して施す。口縁部には平行沈線で楕円形状の文様を描き，沈線間に連続刺突を行う。

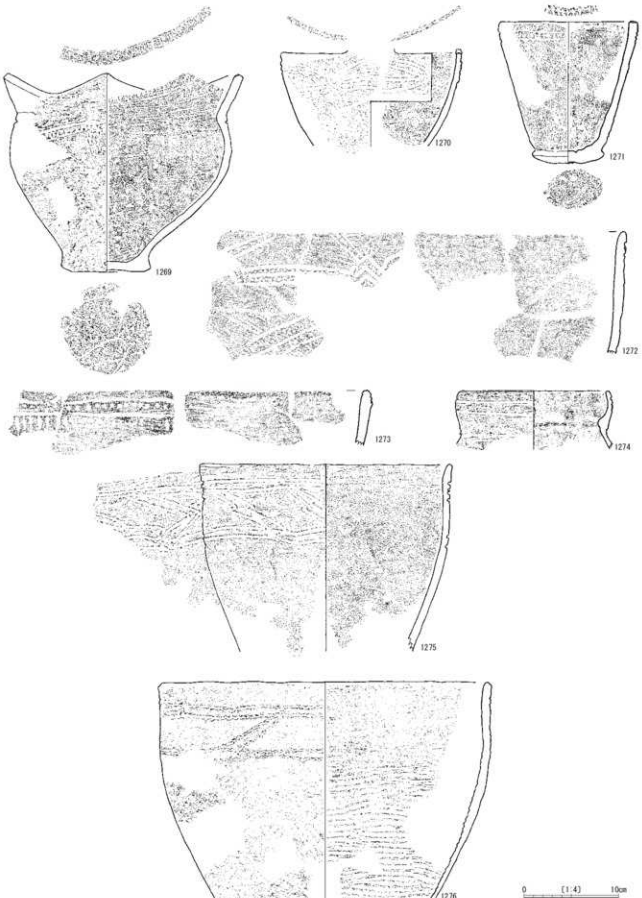
1271～1273は，口縁部がやや外に開く器形をもつものである。1271は，口唇部に刻みを施す。口唇部に接して縦位の沈線を2条施すが，全体で何か所になるかは不明である。底部からほぼ直線的に開く器形をもち，底部の端部が張り出す。底面はやや湾曲するため，土器の座りは悪い。1272・1273は全体的な文様構成は不明であるが，間に刺突を施す平行沈線が描かれていることからここに分類した。

1274は，口縁部が短く内湾する。胴部は欠損するが，

第2-57図　Ⅲ類土器（18）

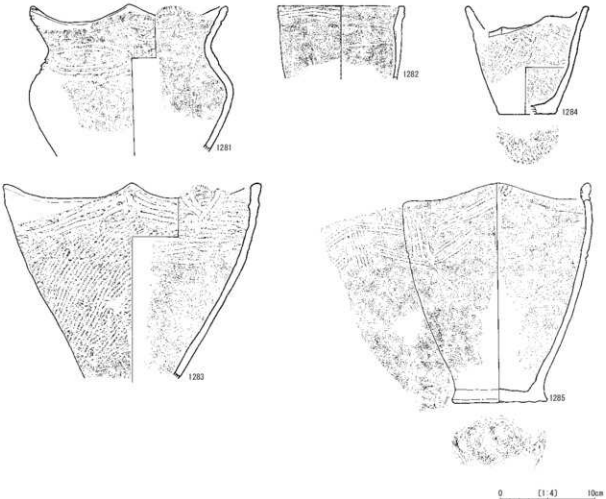


第2-58図　Ⅲ類土器（19）



第2-59図　Ⅲ類土器（20）

第2-60図　Ⅲ類土器（21）



第2-61図　Ⅲ類土器（22）

強い張りをもつ器形と考えられる。

Ⅲb-7類土器（第2-59～61図1275～1285）

1275～1278は主文様がなく，部分的に斜位の沈線や刺突が施されるものである。1275・1276はややくびれをもちながら口縁部が外反し，1277は口縁部が直立し，1278は口縁部が内湾する。

1279～1285は，不規則な文様が施される。1279～1281は胴部がやや張り，くびれをもちながら口縁部は外反する器形をもつ。1282・1283は口縁部が直立し，1284は口縁部が直線的に外に開き，1285は口縁部が内湾する。1279は横「W」字文に似た文様を施すが，場所によっては単なる曲線に変化し規格性はない。1280は，長楕円形の文様を２段にわたって施す。間隙に規則性がない波頂部が３か所残存する。波頂部の直下には焼成前の穿孔が残る。1281は長楕円形文と渦巻文が横位に展開し，下位に連続した鉤手文を横位に施す。波頂部は２か所残存するが，高さが異なる。２か所の波頂部の内面には鉤手状の渦巻文と曲線文を，高い波頂部の外面には曲線文を施す。口縁部に焼成後の穿孔が２か所と貫通しない穿孔が１か所残る。1282は，口唇部直下に２条の沈線を横位に巡らす。直立する口縁部はやや肥厚し，内面に稜をもつ。1283は波頂部が３か所残存し，全体では４か所と考えられる。波頂部内面には「V」字状の沈線を重ねて描く。口縁部外面には波頂部を起点に長方形状の文様を横位に展開する。外面と口縁部内面には条痕が明瞭に残る。1284は，沈線で格子目状の文様を描く。波状を呈する口縁部はかなりゆがみ，波頂部が何か所かは不明である。口縁部から胴部は被熱による器面剥離が見られる。底面には網代圧痕が残る。1285は，欠損する波頂部が１か所残る。波頂部上面には刻みを３条以上施す。口縁部には沈線で「↑」と「↓」状の文様を交互に描く。底面には網代圧痕が残り，白色土が付着する。

Ⅲc類土器（第2-62図1286～1292）

1286は口縁部に浅い沈線で文様を描くが，器面調整痕と同化して極めて不明瞭である。底面には圧痕があるが，不明瞭で詳細は不明である。1287は，突起を４か所

第2-62図　Ⅲ類土器（23）

もつ。突起の頂部に深い刺突をそれぞれ１か所，口唇部には刻みを施す。口縁部は，文様が施されない。底面には白色土が少し付着する。内外面とも器面調整は粗い。1288は口唇部に連続刺突を施し，口縁部外面は無文である。口縁部内面に半円状の沈線を４条，山形の沈線を２条施す部分が１か所ある。1289は，内湾する口縁部には凹点文が施される。1290は，波頂部が１か所残存する。波頂部外面に不定型な文様が沈線で描かれる。1291は波頂部が１か所残存するが，全体の数は不明である。波頂部上面に３条の刻みを施し，口縁部に縦位の短沈線を横位に展開する。白色土が，胴部外面の一部に付着する。1292は，波頂部の一部が残る。口縁部に曲線や直線を施すが，文様構成は不明である。

Ⅲｄ類土器（第2-63～65図1293～1317）

1293～1298は，口縁部が外反するものである。1293～1296は平口縁，1297・1298は波状口縁となる。1293は，胴部に施す縦位の条痕が文様化する。1294は器壁が薄く，底部がくびれ，白色土が付着する。1295・1296は，外反した口縁部の端部が短く直立する。胴部から底部に向かっては直線的にすぼまる。底面には網代の圧痕が残る。1295の口縁部外面にはススが付着する。1297は波頂部が１か所残存し，波頂部には２つの頂部をもつ。底面には網代の圧痕が残る。1298は波頂部が１か所残存し，口縁部がややくびれる。外面にはススが付着する。

1299～1303は，口縁部が直立する器形をもつ。1299～1301は平口縁，1302・1303は口唇部に突起をもつ。1299は底部が上げ底となり，内面に白色土が付着する。1300の外面にはススが付着する。1301は底面に網代痕が明瞭に残り，底面から胴部にかけて白色土が付着する。口縁部には補修孔が２か所残存する。1302は，突起を３か所もつ。底部は上げ底で，接地面に白色土が残る。1303は突起を２か所貼り付けるが，１か所は剥離する。突起は粘土紐を山形に貼り付け，中央部は三角形の空洞とする。底面はいびつな作りで，網代圧痕を部分的に削る。内外面にはススが付着する。

1304～1313は，口縁部が直線的に外開きになる器形をもつ。この中でも1304～1308は平口縁，1309～1311は口縁部に突起をもち，1312・1313は，波状口縁となる。1304は，底面に網代の圧痕が残る。1305の底面は上げ底で，食物種子と考えられる圧痕が残る。器壁は薄く，内面の一部にはススが付着する。1306は，外面にススが付着する。1307は，口径に対して底径が小さい。1308は，円盤貼り付けの底端部を摘み出す。内面は全面に条痕を残し，口縁部から胴上部はケズリが入る。外面にはススが付着する。1309は突起を２か所もつが，その距離２cmと極めて近い。外面は，橙色を呈する。1310は，突起と突起の痕跡が１か所ずつ残る。底面には，網代の圧痕が残る。1311は台形の突起と三角形の突起が残り，口縁部の内面に稜をもつ。1312は波頂部が２か所残存し，全体では４か所と考えられる。円盤貼り付けの底部は，接合面で剥離する。口縁部には，堅果類の圧痕が１か所残る。外面には破裂痕が残り，その内部や外面にススが付着する。1313は，一部欠損した波頂部が２か所残存する。波頂部は粘土紐を貼り付け，２か所の穴を作る。１か所の波頂部の両面には刻みを施す。

1314～1317は，内湾する口縁部をもつ。1314は胴部がやや張り，底部に向かっては急激にすぼまる器形をもつ。1315は，底面に白色土が付着する。1316は強く内湾する口縁部をもち，粘土紐の接合痕が一部剥離する。1317は突起が２か所残存し，全体では３か所と考えられる。突起は粘土紐を組紐状にひねって作る。

Ⅲｅ類土器

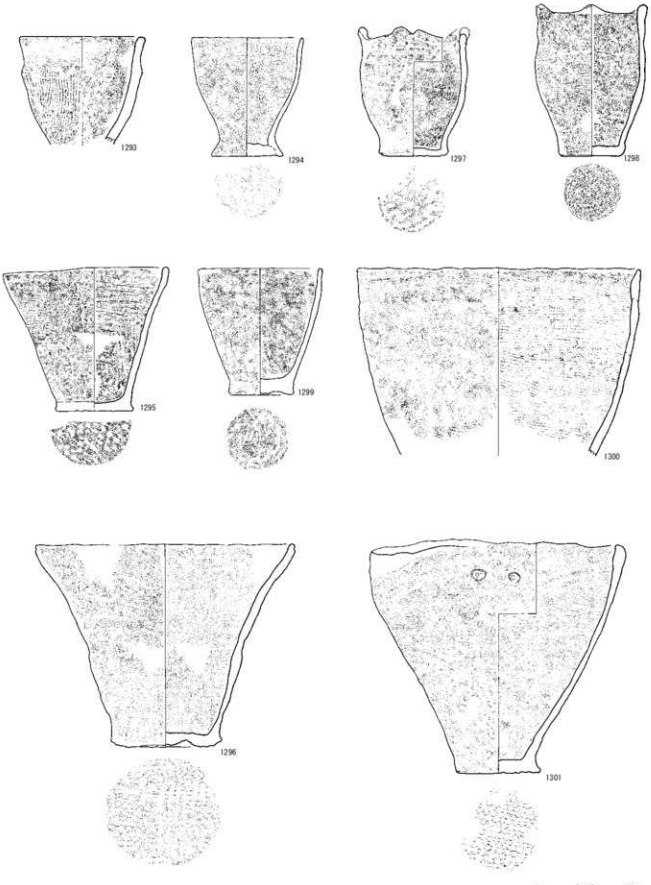
Ⅲｅ類土器は，鉢をまとめた。口縁部から胴上部に展開する文様構成で大別した。なお，掲載番号1344は，放射性炭素年代測定を行った。

Ⅲｅ-１類土器（第2-66図1318～1320）

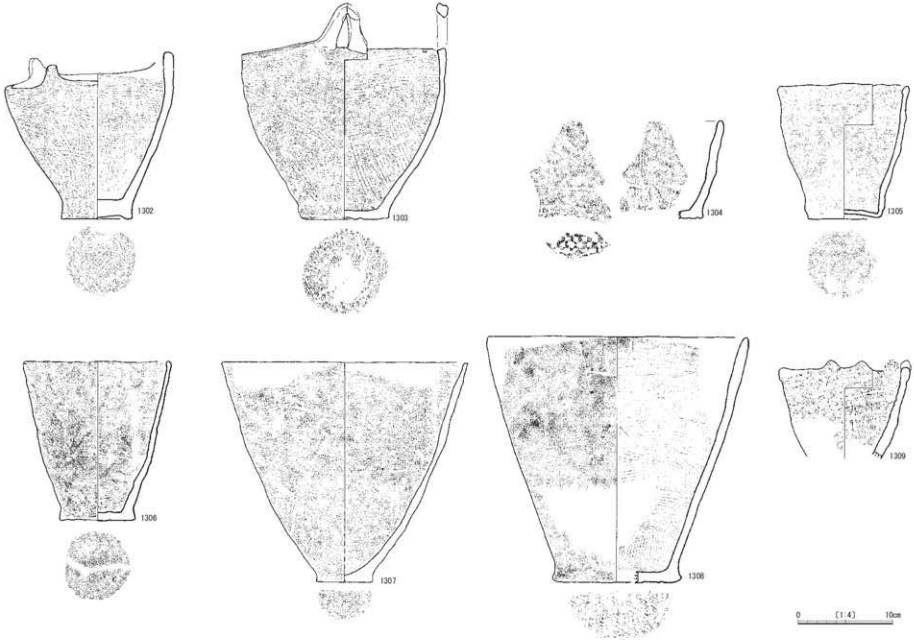
1318は口縁部が強く外反し，内面には稜をもつ。強く張り出した胴部に最大径があり，底部に向かって急激にすぼまる器形をもつ。胴上部と口縁部外端を繋ぐ橋状把手を２か所に貼り付け，これと一体化した円形の突起を口唇部に作る。円形の突起は中を空洞とし，上面には沈線を巡らす。橋状把手の上面・正面・下面には穿孔を行う。円形突起の内面には縦位の貝殻刺突，横位の沈線と貝殻刺突で施文する。橋状把手及び円形突起の外面には貝殻刺突を施す。外面の文様帯には沈線で長楕円形や逆「く」の字状の文様を施す。胴部の屈曲部には貝殻刺突を波状に巡らせ，文様帯の区画とする。1319は直立する口縁部から張りをもつ胴部へと続き，丸味をもって底部へと至る器形である。胴部から口縁部外端を繋ぐ橋状把手が１か所残存し，痕跡が１か所残る。橋状把手は，全体で２か所と考えられる。また，橋状把手と一体化した円形の突起を口唇部に作り，上面の中央に棒状工具による刺突を１か所，これを囲む沈線を円形に施す。文様帯のほとんどが欠損しているため詳細な文様構成は不明だが，複数の曲線文を描く。外器面は凹凸が激しく，被熱の影響と考えられる。1320はやや内湾する口縁部が波状を呈し，胴部は緩く張る。２本の粘土紐をねじって作る波頂部が１か所残存し，波頂部上面と内面及び口唇部には沈線と刺突が施される。文様帯には横「W」字文，鉤手状の入組文等が施される。

Ⅲｅ-２類土器（第2-66・67図1321～1338）

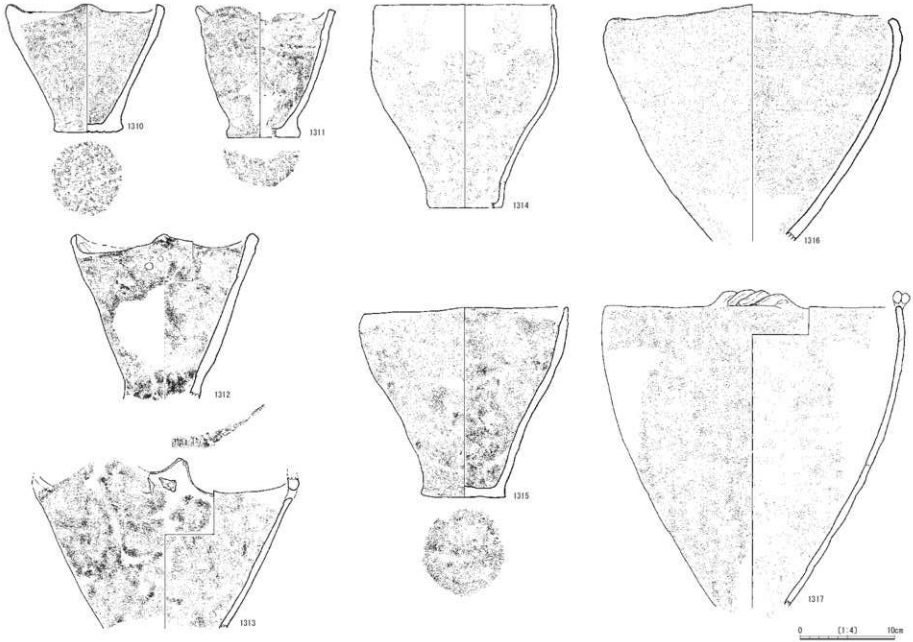
1321～1324は，文様帯に鞆形文を描く。1321は短く外反し，内面には稜をもつ。平口縁に山形の突起が１か所残存するが，上下に剥離面が残ることから橋状把手の可能性も考えられる。1322は，短く外反する口縁部と直立する胴部をもつ。平口縁に山形の突起が２か所に残存す



第2-63図　Ⅲ類土器（24）



第2-64図　Ⅲ類土器（25）



第2-65図　Ⅲ類土器（26）

るが，全体では３か所と考えられる。突起下部から胴部へ橋状把手を渡す。突起下部に三角形状の孔を，橋状把手上部と下部に楕円形状の孔を穿つ。突起内面には斜位の貝殻刺突を，口唇部の内面直下に２列の刺突を巡らす。1323は張りをもつ胴部から内湾しながら口縁部へ続き，口縁端部で外反し，内面には稜をもつ。平口縁に低い山形の突起が１か所残存し，頂部には３条の刻みと内面には「Ⅰ」字状の沈線を施す。突起下部から胴部へと橋状把手を貼り付け，この上面には縦に深い凹点を３か所と周りに沈線と刺突を施す。文様帯には変形した靴形文を描く。1324は口縁部が内湾し，胴部が強く張る。突起と一体化した橋状把手をもち，突起の中央と左右及び橋状把手にも２か所の穿孔を行う。また，突起と橋状把手には沈線が施される。文様帯には変形した靴形文が展開する。1325～1328は，文様帯に山形文を描くものである。1325は４条の刻みを施す低い波頂部が１か所残存するが，高さのある波頂部も部分的に残る。文様帯には２条の沈線で山形文を描く。1326は，口縁部を欠損する。口縁部は内湾し，内面に稜をもつ。沈線で文様帯の上下を区画し，区画の中に山形文を描く。1327・1328は変形した山形文を文様帯に展開するが，いずれも刺突と共に施される。1329～1331は，横「W」字文を文様帯に施すものである。1329は口縁部が短く外反し，胴部が張る器形をもつ。くびれ付近に横位の沈線を巡らせ，その下位には横「W」字文を展開する。1330は，強く張る胴部から口縁部は短く直立する。口唇部直下に鉤手状の文様を施し，その下位には変形した横「W」字文を描く。1331は，胴部が張りながら内湾する口縁部へと続く器形をもつ。波頂部は１か所残存し，１か所は痕跡が残る。波頂部の頂部から内面にかけてと波頂部の両脇に刻みを施し，波頂部内面には沈線で方形状の文様を描く。また，口唇部には貝殻刺突を施す。文様帯には変形した横「W」字文を展開する。1332～1338は，靴形文・山形文・横「W」字文以外の文様を施すものである。これらは平口縁で，1337と1338は突起をもつ。1332・1333は，口縁部が短く胴部が張る器形をもつ。1332は，文様帯に渦巻文を展開する。1333は，文様帯に鉤手文を施す。1334は胴部が張り，口縁部が内湾する。文様帯に波形状の文様を展開する。1335は，方形状の文様を施す。1336は内湾する口縁部をもち，口唇部の１か所に４条の刻みを施し，文様帯には波形文を描く。1337は，突起と一体化した橋状把手をもつ。突起の上面と左右に幅の広い刺突を施し，橋状把手の上面には２か所に穿孔を行う。詳細は不明だが，文様帯には1336と同様の文様を施すと考えられる。1338は橋状把手をもち，その上部には円柱状の突起を作る。把手上面や突起の内外面及び口唇部には，棒状工具による刺突を施す。文様帯には「く」の字状の文様を繰り返して施す。

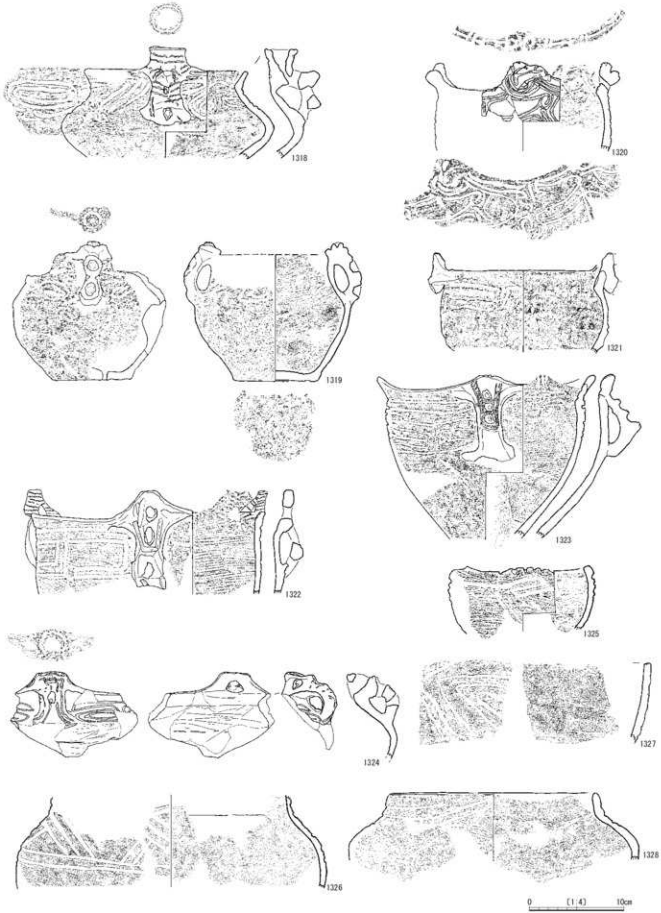
Ⅲ e-３類土器（第2-68図1339～1342）

1339は橋状把手が１か所，対面側にも橋状把手の剥離痕が残る。全体で橋状把手は，２か所である。橋状把手は胴部屈曲部と口唇部に作られる突起とを渡すように貼り付けられるが，突起の上部は欠損する。橋状把手には長さ２cm程度の透かしを縦位に２か所施し，さらに，把手下位の左右から胴部屈曲部へ斜めに粘土紐を渡す。口唇部内面には突起付近を除いて２列の刺突を横位に，橋状把手にも刺突を施す。口唇部直下と胴部屈曲部には間に刺突を施した２条の沈線を巡らせ，文様帯を区画する。文様帯には間に刺突を施した２状の沈線で山形文を展開するが，山形文の間に菱形文を小さく施す。1340・1341は，沈線間に爪形文を連続して施す。1341は，穿孔と深い凹点をもつ橋状把手と中央部に穿孔をもつ突起を作る。1342は，２条の沈線間に横位の貝殻刺突を施す。

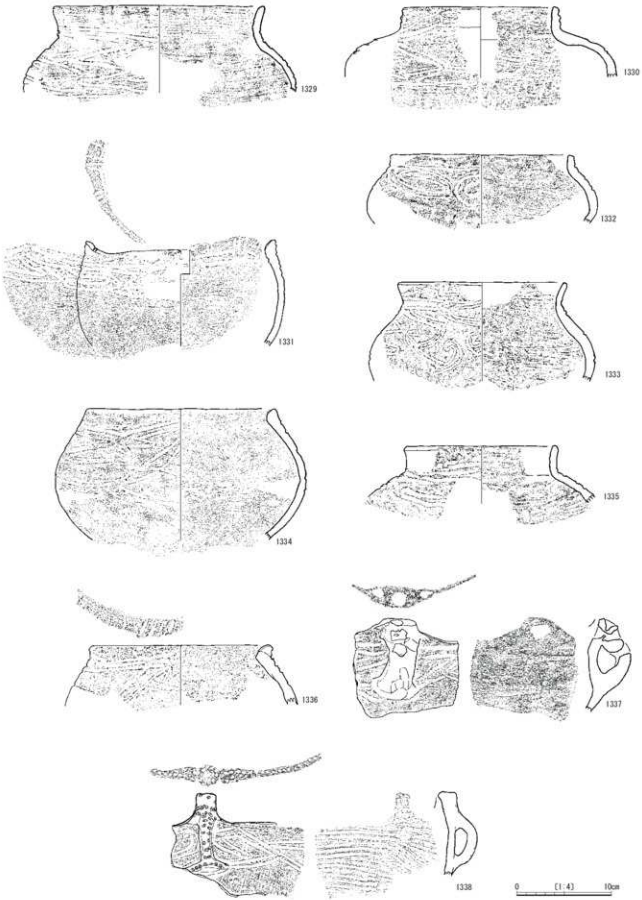
Ⅲ e-４類土器（第2-68・69図1343～1357）

Ⅲ e-１～３類に分類できなかったものと橋状把手をまとめた。1343は無文で，胴部が張りをもち，強くくびれながら外反する口縁部へ至る。上面に円形の平坦面をもつ突起と一体化した橋状把手が１か所残存する。橋状把手は，突起と口縁部と胴部を繋ぐように貼り付けられる。突起上面の平坦面には円形の沈線が施され，突起下位の口縁部に穿孔が行われる。橋状把手の外面には縦位の沈線が１条描かれる。1344は，短く外反する口縁部には方形状の突起が１か所残存する。突起に直交するように両端に粘土紐を貼り付け，突起と粘土紐の上面に沈線を１条ずつ施す。外面には縦位の沈線を密に施す。1345は外面に粘土紐を曲線状に貼り付け，その上面には深い沈線を施す。1346は内湾する口縁部外面に突帯状の肥厚部を２段作り，上段の肥厚部上面と肥厚部間に沈線を巡らす。なお，２段の突帯状の肥厚部間には赤色顔料が残る。

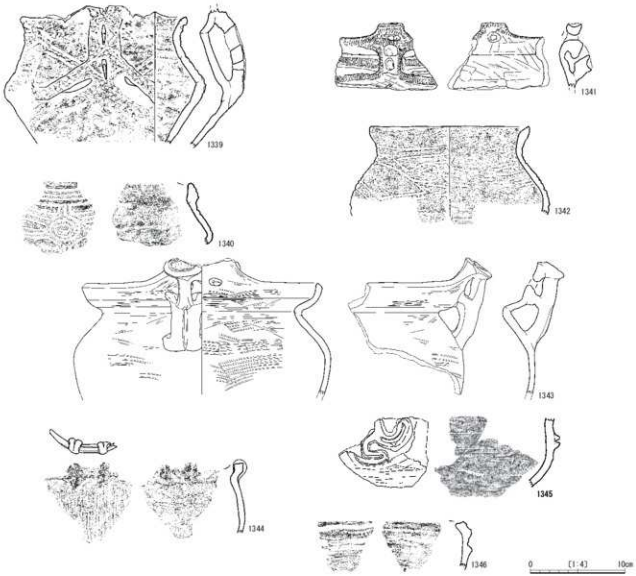
1347～1357は，橋状把手である。1347は把手上部に突き出す突起上面には刺突が，橋状把手外面には沈線が施される。1348は貝殻刺突が施され，穿孔が３か所残る。1349は，粘土紐を組合せて橋状把手を作る。橋状把手の外面には沈線を施し，球状把手と口縁部には穿孔が行われる。また，橋状把手の上部には棒状の突起を貼り付け，上面を窪ませる。1350は，橋状把手の外面に沈線と刺突を施す。口縁部と橋状把手の接合部分は欠損する。また，口縁部には穿孔が行われる。1351は，橋状把手の外面中央部が窪む。突起の頂部から橋状把手の外面には刺突が施され，両脇には沈線が施される。1352は，５か所の穿孔と沈線が施される。1353は橋状把手の上部を欠損し，外面には沈線で渦巻文が描かれる。1354は橋状把手の上部に直方体の突起を作り，上面から穿孔を，四方から透かしを施す。突起と橋状把手の外面には沈線を施す。1355は，橋状把手の上部を欠損する。把手に１か所粘土紐を貼り付け，外面には貝殻刺突を施す。1356は粘土紐



第2-66図　Ⅲ類土器（27）



第2-67図　Ⅲ類土器（28）



第2-68図　Ⅲ類土器（29）

を２本上下に渡して橋状把手を作るが，上部と下部が欠損する。口縁部には穿孔の痕跡が残る。1357は，丸い粘土紐をアーチ状に渡して橋状把手を作る。

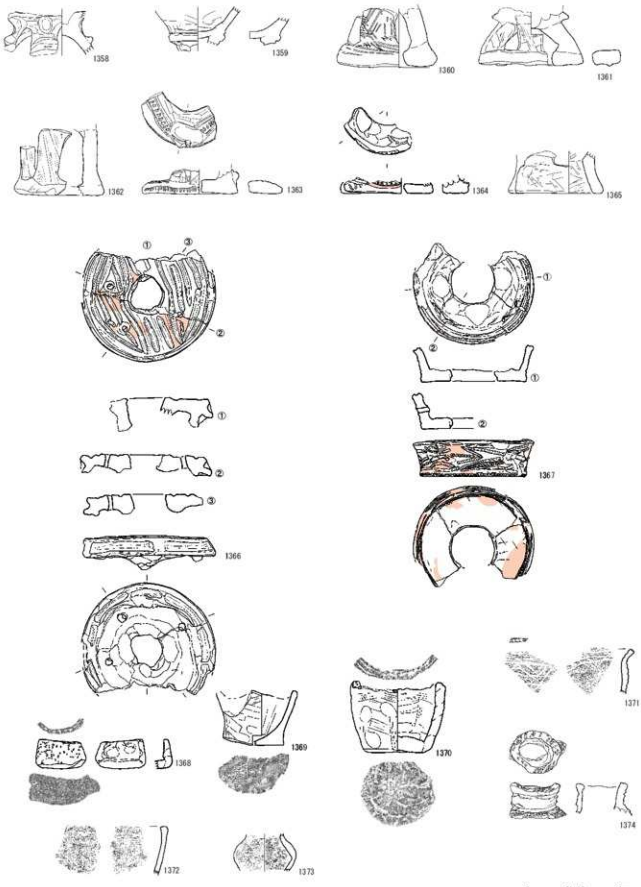
Ⅲｆ類土器（第2-70図1358～1374）

Ⅲａ～Ⅲｅ類に分類できなかったものをまとめた。

1358～1365は，鉢もしくは皿の上部構造に付属する脚台である。1358・1359は，上部構造の底面から脚部まで残存する。1358は脚が２本残存し，全体では４本と考えられる。脚と鉢部との境には粘土を貼り付け，その上から凹点を施す。脚の下位には三角突帯を貼り付ける。1359は，鉢もしくは皿の下部から脚の接合面まで残存する。破断面が３か所残ることから，３本の脚をもっていたことがわかる。上部構造と脚の境に２条の沈線を巡らし，沈線間を突帯風に作る。1360～1364は，ドーナツ状の底部に脚を乗せて脚台を作る。1360は脚が２本残存し，１か所に剥離痕が残ることから全体では３本の脚であったことがわかる。外面には浅く沈線を施すが，その後にナデ消している。1361・1362は，それぞれ２本の脚が残存する。1361は，脚と上部構造との境に三角形の突帯を巡らす。1363は，脚の一部が１か所残る。底部側面に連続刺突を巡らせ，上面には間に刺突を施す２条の沈線が脚を繋ぐように施される。脚の外面には縦位の沈線が施される。1364は，脚の剥離痕が底部に２か所残る。底部側面には沈線と刺突が施される。1365は中空の脚台で，透かし孔が１か所残る。

1366・1367は接合はしないが，胎土・色調・焼成等から同一個体と考えられるものである。1366が上部で1367が下部と考えられ，それぞれ中央部には孔をもつ。また，上部と下部を繋ぐと考えられる脚は欠損するが，それぞれに痕跡が４か所残る。1366は中央に上面全体に深い沈

第2-69図　Ⅲ類土器（30）



第2-70図 Ⅲ類土器（31）

線を施し，焼成前の上から下に向けた穿孔を４か所もつ。側面を４分割するような凹線を４条巡らすと考えられる。上面の一部には赤色顔料が残る。1367は，断面箱形を呈する。側面には横「V」字状と曲線の沈線文と刺突文を施し，下端には棒状工具による刺突を連続して巡らせる。さらに，側面には横に２cm程度の細長い透かしが２か所残る。口唇部に相当する上面には１条の沈線を巡らす。底面と側面に赤色顔料が部分的に残る。1367の上に円盤状の1366が脚で繋がる器台の可能性が考えられる。

1368～1373は，小型土器である。1368は手捏土器で，口唇部と胴部に刺突を施す。1369は波状を呈する口縁部をもち，底部は湾曲するため座りが悪い。1370は波状口縁で，口唇部に２条の沈線を巡らす。1371は外反する口縁部をもち，内外面には沈線が施される。口唇部には，刺突が残る。1372は，内湾する口縁部の外面に細沈線を施す。1373は，胴部が張る小型の鉢と考えられる。

1374は，深鉢もしくは鉢の突起部と考えられる。沈線と刺突を施す。

【Ⅳ類土器】

肥厚させた口唇部を文様帯とし，縦位の沈線・刻み・刺突と口唇部を巡る１条から数条の沈線により文様を構成する一群である。器種は深鉢・鉢・皿があり，そのうち深鉢を施文部位及び器形によりⅣａ・Ⅳｂ類に分けた。Ⅳａ・Ⅳｂ類に分類できないものをⅣｃ類とし，Ⅳｄ類に鉢などその他の器種を入れた。深鉢の器形は口縁部が外反し，口縁部下位がくびれ，胴部が張る。Ⅳ類土器の分類は，次のとおりである。

Ⅳａ類土器

肥厚させた口唇部に縦位と横位の沈線を，外面の口唇部直下に沈線を施すものである。口縁部はやや外反もしくは直立し，胴部はあまり張らない器形となる。

Ⅳｂ類土器

肥厚させた口唇部に縦位と横位の沈線を施し文様を構成する点はⅣａ類と同じだが，口唇部直下の外面に文様をもたないことを特徴とする。ただし，胴部に文様をもつものもある。口縁部はやや外反もしくは外反し，胴部が張る器形となる。

各文様構成や施文具により５つに細分類した。

Ⅳｂ-１類　口唇部に縦位の沈線もしくは刻みのみを施すものである。

Ⅳｂ-２類　口唇部に縦位の沈線もしくは刻みを施し，さらに横位の沈線を１条もしくは２条巡らすものである。

Ⅳｂ-３類　口唇部に縦位もしくは斜位の刺突を施し，さらに横位の沈線を１条から３条巡らすものである。なお，波頂部に刻みと貝殻刺突の両方を施すものもある。

Ⅳｂ-４類　口唇部に縦位もしくは斜位の沈線及び刺突を施し，さらに横位の沈線を巡らせ，沈線間に刺突を行うものである。

Ⅳｂ-５類　Ⅳｂ-１～４類に含まれないものである。

Ⅳｃ類

Ⅳａ・Ⅳｂ類に分類できなかったものである。

Ⅳｄ類

鉢形土器等をまとめた。

以下，分類に従って記述する。なお，掲載遺物番号1451は，放射性炭素年代測定を行った。

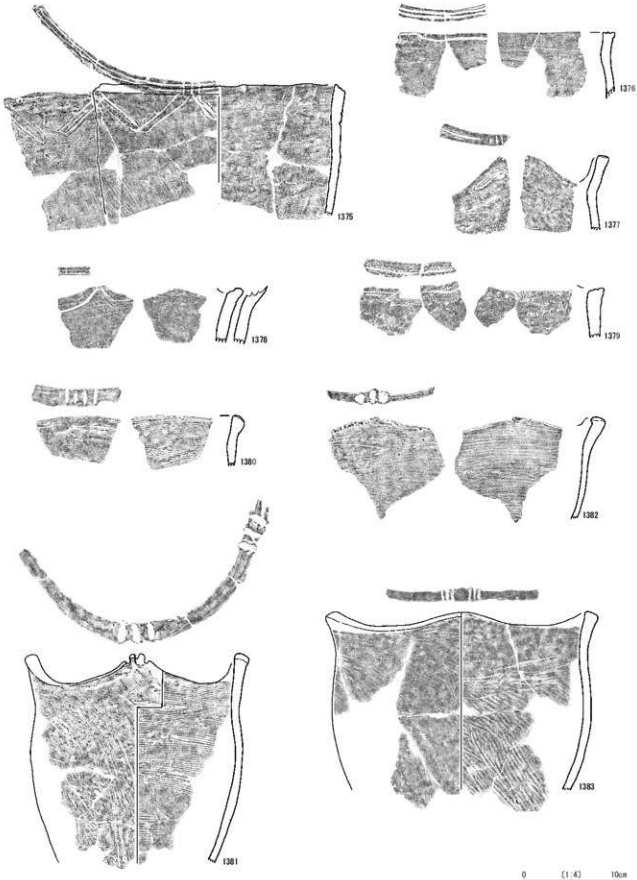
Ⅳａ類土器（第2-71図1375～1379）

1375・1376は，平口縁である。1375は口唇部に沿って２条の沈線を巡らせた後に縦位の沈線を３条，全体で４か所に施すと考えられる。上向きの口唇部は，途中で外向きへと変化する。さらに，口唇部直下の外面に平行沈線で鋸歯文を巡らす。なお，口唇部に施される縦位の沈線が起点となり，口唇部直下の文様が構成される。1376は口唇部に２条の沈線を，口唇部直下の外面に横位の沈線を１条巡らす。1377～1379は，波状を呈する口縁部をもつ。1377は突起部が半分程度欠損するが，突起部の左右に縦位の沈線をそれぞれ３条，口唇部に沿って１条の沈線を施すと考えられる。突起部直下の外面には矢印状の文様を沈線で描く。1378は突起部の内面を欠損するため，縦位の沈線の有無は不明である。内傾する口唇部には１条の沈線を巡らせ，口唇部直下を巡る横位の沈線は突起の頂部に合わせるように跳ね上がる。1379はやや内傾する口唇部に１条の細沈線を，口唇部直下の外面に横位の沈線を１条施す。

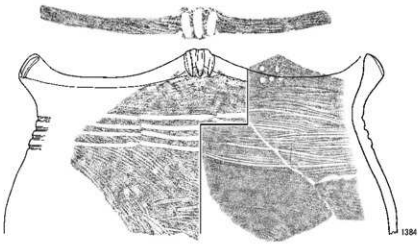
Ⅳｂ類土器

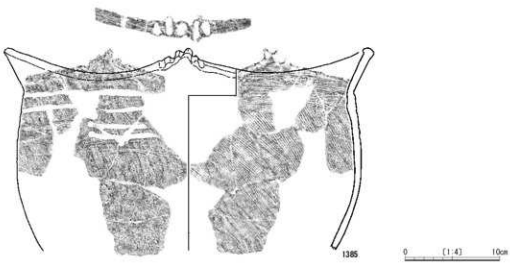
Ⅳｂ-１類土器（第2-71・72図1380～1385）

1380は平口縁で，丸く収めた口唇部に縦位の沈線を４条施す。1381～1385は，波状口縁となる。1381・1382は，押圧による刻みを波頂部に３か所施す。1383は，波頂部の左右に３条ずつの沈線を施す。いずれも波頂部は２か所残存し，全体では４か所と考えられる。1384・1385は，胴部に幅広の沈線を４条巡らす。1384は胴以下を欠損するが，口縁部は全て残存する。口径35.4cmを測る口縁部は外反し，胴部との境でくびれ，胴部は張りながら胴下部へ続く。同類と比べ口唇部が広く，外向きとなる。口唇部には波頂部を４か所もち，それぞれの頂部に押圧による刻みを３か所施す。さらに，波頂部内面には円形の刺突を上位に２か所，下位に３か所の２段にわたって施す。胴部には長さ15cm程度の沈線を４段施し，これを横位に展開して一周させる。部分的に端部を強く押し込む沈線もある。1385は，外反する口縁部の波頂部に押圧による刻みを５か所に施す。波頂部は，４か所と考えられる。口縁部と胴部の境から胴部にかけては長さ10cm以上



第2-71図　Ⅳ類土器（1）





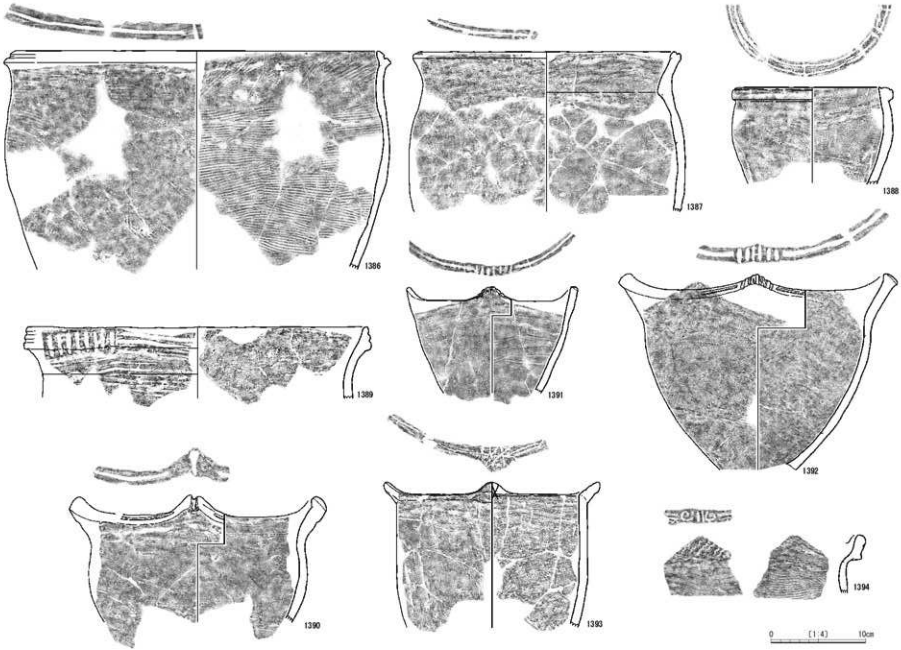
第2-72図　Ⅳ類土器（２）

の沈線を４段施し，これを横位に展開させる点は1384と同じと考えられる。また，沈線の端部付近には１列５個の円形の刺突を縦に２列配する。ただし，１列しか施さない部分もある。

Ⅳb－２類土器（第2-73図1386～1394）

1386～1389は平口縁で，肥厚させた口唇部に縦位の沈線もしくは刻みを施し，口唇部に沿って１条もしくは２条の沈線を巡らす。1386はやや外反する口唇部を肥厚させ，胴部はやや張りをもちながら胴下部へ至る器形である。口唇部に施される縦位の沈線付近が欠損しているため詳細は不明だが，縦位の沈線は２条以上と考えられる。横位の沈線は１条施される。1387は口唇部に施される縦位の沈線は２条以上，横位の沈線は１条である。口縁部は「く」の字状に外反し，内面には稜をもつ。1388は口縁端部を肥厚させるが，器壁の厚さが不均衡である。口唇部に縦位の沈線を２条施す。刻みは，全体で４か所と考えられる。横位の沈線は２条である。1389は外反する口縁部をもち，肥厚する口唇部は外向きとなる。口唇部に施される縦位の沈線は９条以上，横位の沈線は２条である。外面には明瞭な条痕が残る。

1390～1392は波状口縁で，波頂部に押圧による縦位の沈線を施し，口唇部に沿って１条の沈線を巡らす。1390は，口唇部に向かって口縁部を肥厚させる。口縁部下のくびれも明瞭で，胴部は張りをもつ。波頂部には押圧による深い刻みを，口唇部には１条の沈線を横位に施す。1391は，口縁部から胴下半に向かって直線的にすぼまる器形となる。波頂部は２か所残存するが，１か所には７つの刻み，もう１か所には５つの刻みが施される。また，口唇部に沿って１条の沈線が巡る。波頂部は４か所と考えられ，上面観は円形である。1392は円盤貼付の底部を欠損し，接合面で剥離する。口縁部は外反するが，胴部の張りは弱く，すぼまるように底部に向かう。波頂部に６か所の押圧による刻みを施す。口唇部に沿って１条の沈線を巡らすが，その端部は強く押し止める。



第2-73図　Ⅳ類土器（3）

1393・1394は文様構成が本類に近いことから，ここに掲載した。1393は胴部から口縁部にかけて直立し，波頂部は三角形状に粘土を貼り付けて外反させる。口唇部から続く波頂部内面を文様帯とする。波頂部内面に「X」状の短沈線を2か所，口唇部に沿って1条もしくは2条の沈線を施文する。1394は，強く外反する口縁部をもつ。波頂部には粘土を貼り付け肥厚させ，その外面に貝殻刺突を斜位に施す。波頂部に縦位の刻みを3か所，その両脇には渦巻状の沈線を配する。口唇部には2条の沈線を巡らせる。内面には明瞭な条痕を残す。

Ⅳ b-3 類土器（第2-74・75図1395～1407）

1395～1398は平口縁で，外反する口縁部をもつ。口唇部に刺突と沈線を施すものである。1395は口唇部に縦位の貝殻刺突を6か所，横位の沈線を2条巡らせ，その上下にも貝殻刺突を部分的に施す。1396は口唇部に貝殻刺突を「ハ」の字状に重ねて施し，横位の沈線を2条巡らせる。1397は口唇部に1列3か所の刺突を3列施し，横位の沈線を1条巡らせる。1398は口唇部に二叉状の工具で刺突を行い，その両側には端部を強く押さえた1条の沈線を巡らせる。

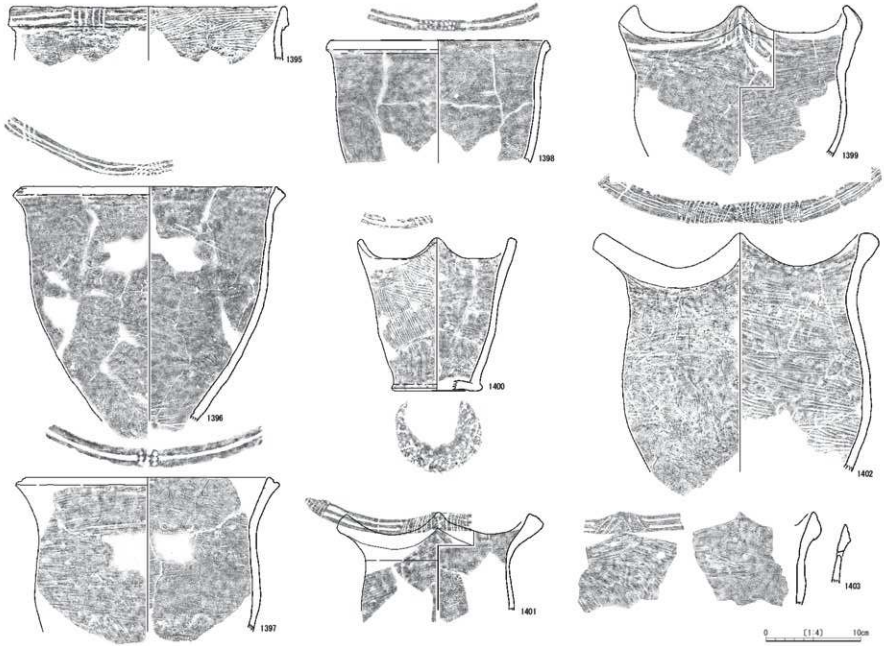
1399～1403は波状口縁で，波頂部に縦位または斜位の刺突を，口唇部に横位の沈線を施すものである。1399はやや張る胴部から口縁部で外反し，波頂部の端部は内湾する器形をもつ。波頂部には縦位の貝殻刺突を5～7か所施し，口唇部に沈線を1条巡らせる。1400は底面が張り出し，口縁部に向かって直線的に伸びる器形である。波頂部器面の半分ほどが剥落するが，貝殻刺突が4か所残る。口唇部には横位の沈線が1条施される。1401は波頂部の両側にそれぞれ8～10か所の刺突を縦位に施し，口唇部に2条の沈線を巡らし，その端部は強く押し止める。波頂部は4か所残存し，上面観は方形である。1402は4か所に波頂部をもち，上面観ははぼ方形である。張りをもつ胴部は頸部でややくびれ，口縁部は外反する。波頂部の両側に貝殻刺突を10か所以上施し，その両側には端部を強く抑える沈線を3条巡らす。1403は波頂部の両側に貝殻刺突を施し，口唇部に2条の沈線を巡らす。口縁部には焼成後の穿孔が残る。

1404・1405は波頂部に刺突と刻みを施し，口縁部に沈線を巡らす。1404は，波頂部に押圧による幅広い刻みを3か所施す。頂部の刻みの中に竹管文，両側の刻みの中には貝殻刺突文を施す。口唇部には横位の沈線を3条巡らせ，その端部には3本の沈線と呼応するように竹管文を施す。1405は，器壁の厚い底面から緩やかに膨らみながら立ち上がる。口縁部は口唇部に向かって徐々に肥厚し，波頂部は外反する。波頂部を4か所もち，頂部には棒状工具よる刺突を縦位に1列3か所，その両側に貝殻刺突をそれぞれ2か所施す。口唇部には1条の沈線を巡らす。さらに，口唇部外端に沿って横位の貝殻刺突を連続して施す。

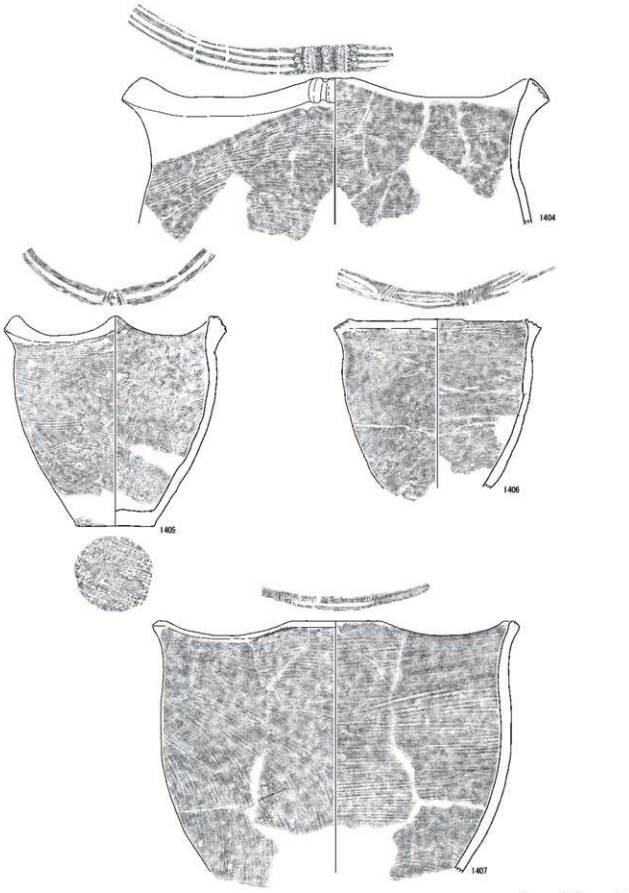
1406・1407は，高さのないヒレ状突起をもつものである。いずれも全体的には4か所の突起を想定するが，5か所の可能性もある。内外面には条痕が残る。1406は，口唇部を幅広く作る。ヒレ状突起の中央部に3条の沈線を，ヒレ状突起の左右の頂点付近には貝殻刺突を施す。口唇部には3条の沈線を巡らす。1407は，膨らみをもつ胴部からかすかにくびれながら緩やかに外反する口縁部へと続く器形をもつ。ヒレ状突起の口唇部に1条の沈線を施した後，左右の頂点付近に縦位の貝殻刺突を8～9か所施す。

Ⅳ b-4 類土器（第2-76～79図1408～1428）

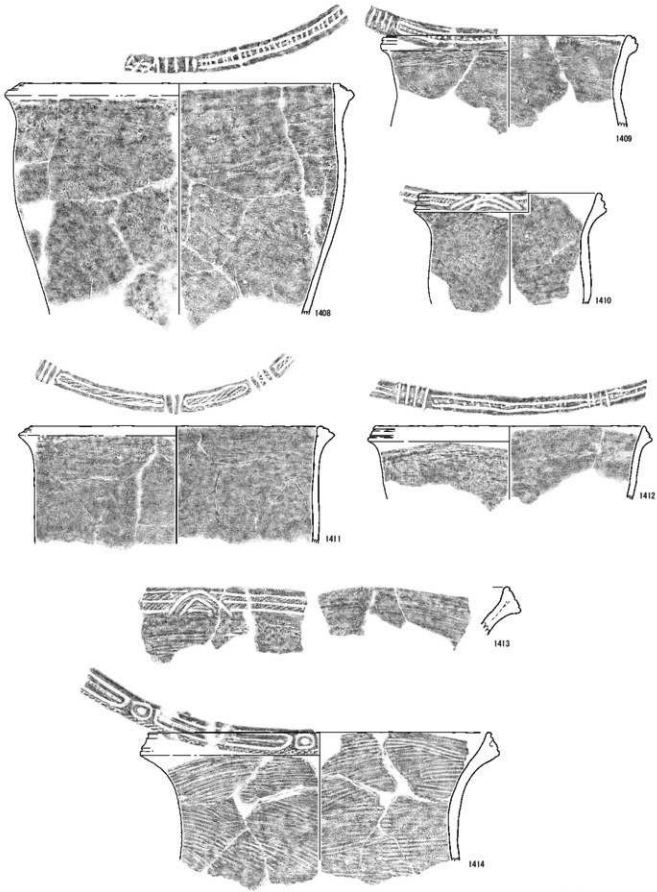
1408～1420は肥厚させた口唇部に沈線や刺突で構成する文様を起点とし，その両側に沈線を巡らせ，さらに沈線間に刺突を行うものである。1408はやや膨らむ胴部は口縁部との境付近でくびれ，口縁部は外反する。口唇部に縦位の沈線を5条，口唇部に沿って2条の沈線を巡らせ，横位の沈線間に貝殻刺突を施す。1409は口唇部に縦位の沈線を5条以上施し，その横に沈線で細長い楕円形状の区画を設け，その中に棒状工具で細かい刺突を行う。1410は，口唇部に山形の沈線を重ねて3条施す。ただし，最上位の沈線は口唇部上端までの施文で連続しない。さらに，横位の沈線を2条巡らせ，その間は貝殻で押引き状の刺突を行う。1411は口唇部に縦位の沈線を3条施すが，この沈線の間に貝殻刺突を施す部分と施さない部分がある。さらに，両側に設けた楕円形状の沈線の中に斜位の貝殻刺突を行う。1412は口唇部に縦位の沈線を4条，口唇部に沿って2条の沈線を施す。縦位及び横位の沈線間には棒状工具による刺突を行う。1413は，口縁部に粘土を貼り付け肥厚させる。口唇部の下端に配した1条の短沈線を覆う様に山形の沈線を2条施す。この上位の沈線の中には棒状工具による刺突を連続して行う。さらに，口唇部には3条の沈線を横位に巡らせる。口唇部に配した山形及び横位の沈線間には横位及び斜位の貝殻刺突を施す。横位の沈線の端部は，強く押し止める。1414は口唇部に沈線で方形状に区画し，その中に円形で深い刺突を行う。さらに，沈線で長楕円形に区画した中に横位の沈線を1条施す。この横位の沈線は連続刺突が上描きされる。口縁部下端にも連続貝殻刺突を行い，縄文を模倣する。1415は一部を欠損するが，3か所の波頂部が残存する。全体では4か所の波頂部をもち，上面観は方形である。幅広い口唇部に細長い楕円形の区画を設け，中に刺突を施す。波頂部の上下には，2条の半円形の沈線を重ね，それぞれの沈線の上下に刺突を施す。口径に対して胴径は小さい。1416は口唇部に斜位の沈線を「V」字状に重ねて施文し，その両側に2条の沈線を巡らせ，沈線間に貝殻刺突を行う。胴部から口縁部に向かって直線的に伸びる器形をもつ。1417は口唇部に



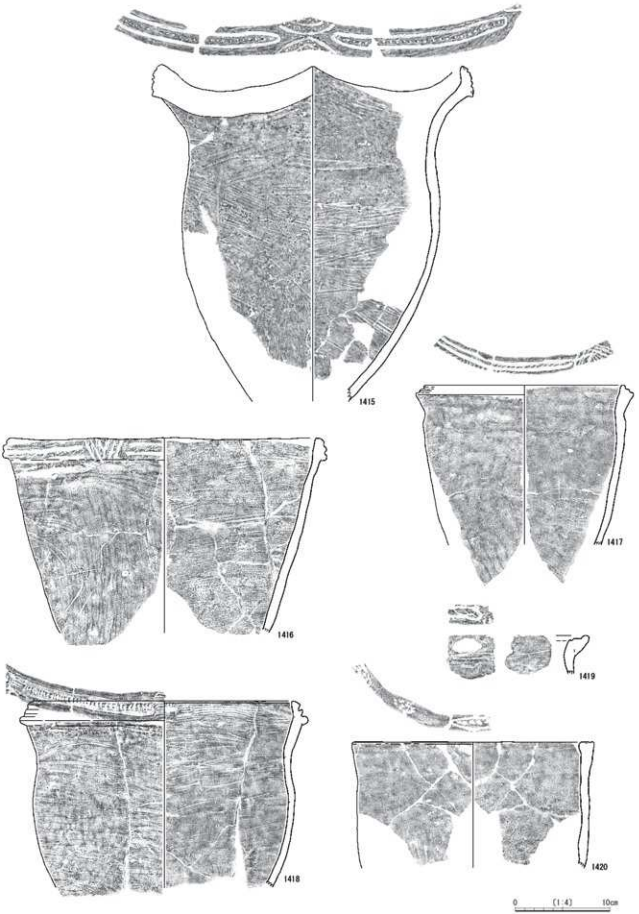
第2-74図　Ⅳ類土器（4）



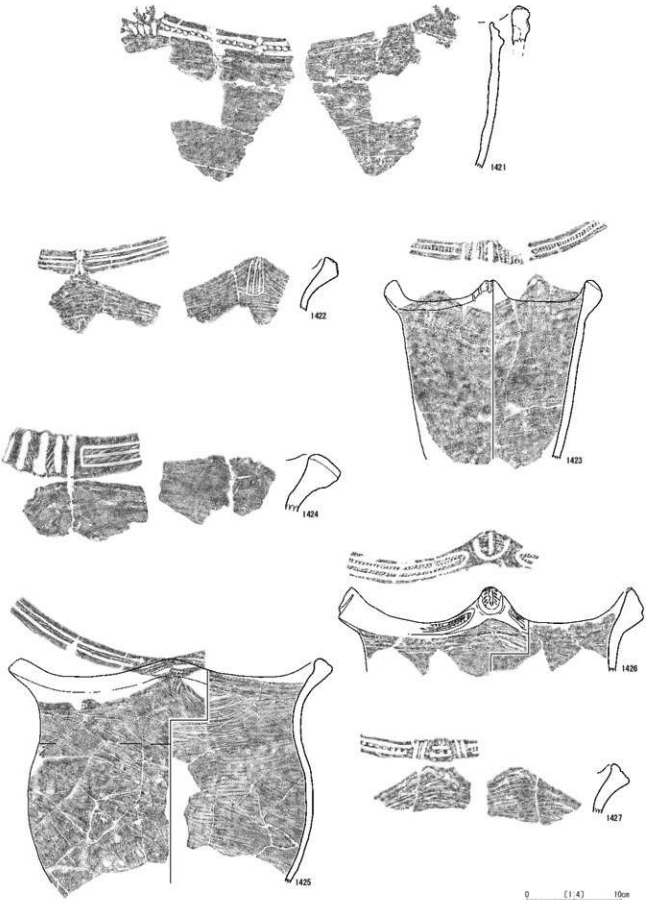
第2-75図　Ⅳ類土器（５）



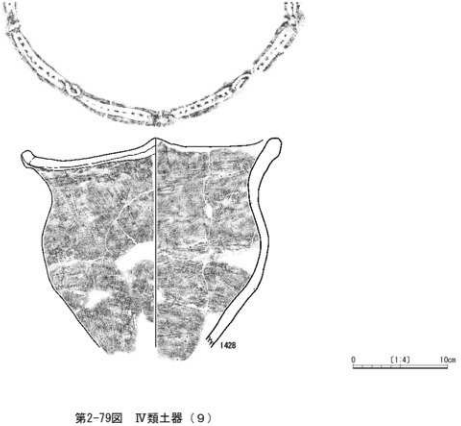
第2-76図　Ⅳ類土器（6）



第2-77図　Ⅳ類土器（7）



第2-78図　Ⅳ類土器（8）



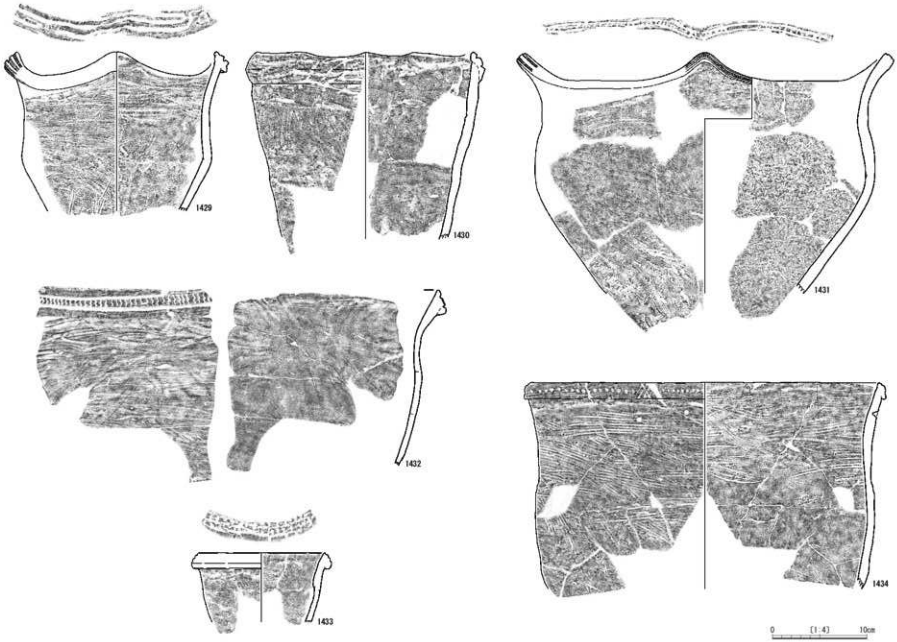
第2-79図　Ⅳ類土器（９）

斜位の貝殻刺突を「ハ」の字状に重ねて施し，さらに横位の沈線を２条巡らす。横位２条の沈線間と口唇部外端にも貝殻刺突を施すが，部分的である。1418は，口縁部に横位の貝殻刺突を縦１列に８～10回以上行う。その横には２条の沈線を施し，沈線間に貝殻刺突を連続で行う。1419は口縁外面を厚く肥厚させ，口唇部に幅広の平坦面をもつ。口唇部に縦位の貝殻刺突を２か所以上，沈線で楕円形状に区画される中にも貝殻刺突を施す。1420は口唇部に楕円形状に連点を，少し離れて楕円形状に施した沈線の区画内に刺突を行う。

1421～1428は波状口縁で，波頂部に沈線や刺突を施し，口唇部に沿って沈線を巡らせ，この沈線間や沈線上に刺突を行うものである。1421・1422は，波頂部に沈線を縦位に施すものである。1421は部分的に波頂部が欠損するが，縦位の沈線が４条残る。さらに，波頂部直下の外面に４条の短沈線を施す。口唇部に２条の沈線を巡らせ，その間に棒状工具によると考えられる刺突を行う。1422は波頂部に縦位の２条２段の短沈線，口唇部に沿って横位の沈線を３条施す。この沈線には刺突が上描きされる。波頂部内面に沈線で縦長三角形の区画を設け，その中に沈線と刺突を施す。1423～1427は，波頂部に沈線と刺突を施すものである。1423は，波頂部の一部が欠損する。波頂部に縦５条の幅の広い沈線を，口唇部には横位の沈線を施す。縦位・横位の沈線間には貝殻刺突を連続して行う。胴下半から口縁部にかけて直線的に広がる器形をもつ。1424は波頂部に縦位に５条以上の短沈線を施し，その間に貝殻刺突を行う。口唇部に沿って沈線で方形の区画を設け，その中に横位の沈線と連続する貝殻刺突を行う。1425は，波頂部に沈線と貝殻刺突を「ハ」の字状に配す。口唇部に沿った２条の沈線間には貝殻刺突を施し，この沈線の端部には円形の刺突を施す。1426は波頂部に「↓」状の沈線の間に横位の貝殻刺突，波頂部の両脇に沈線で細長い楕円形状の区画を設け，中に横位の沈線を１条と貝殻による連続刺突を行う。1427は波頂部に横位の短沈線を２条，その左右に縦位の短沈線を２条ずつ施す。横位の短沈線の間と口唇部に沿った２条の沈線間にも竹管文を連続して行う。1428は４か所の波頂部が残存し，上面観は円形を呈する。波頂部には棒状工具による刺突を縦位に２か所施す。さらに，波頂部と波頂部の中間地点にあたる谷部には「の」の字状の沈線，その両脇には沈線で方形の区画を設け，その中に棒状工具による刺突を施す。

Ⅳb－５類土器（第2-80・81図1429～1440）

1429～1434は，Ⅳb－１～４類に分類できなかったものである。口唇部に縦位の施文がなく，単一の文様を巡らせるものである。1429は口縁部が半分以上欠損しているため全体像は不明だが，波頂部をまたいで２～３条の沈線が施される。沈線間には部分的に貝殻刺突が施される。



第2-80図 Ⅳ類土器（10）

1430は口唇部に２条の沈線を横位に巡らせ，この沈線の上に斜位の貝殻刺突を連続して施す。器面調整は，極めて粗い。1431は，波頂部も含めた口唇部に２条の沈線とこの沈線間に刺突を施す。1432は平口縁で，口唇部に２条の沈線間に貝殻刺突を連続して施す。1433は，横位の沈線と刺突が口唇部を巡る。1434は口唇部に斜格子状の沈線を施し，さらに棒状工具による連続刺突を巡らせる。

1435～1437は，口唇部に横位の沈線を１条と刺突や刻みを施すものである。1435は口唇部に縦位の沈線を４条，その両脇に横位の沈線を巡らす。横位の沈線の外側には，縦位の貝殻刺突を連続して施す。1436は1435と同じ文様構成であるが，口唇部を巡る横位の沈線の外側には刻みを連続して施す。1437は口唇部に横位の沈線を巡らせ，その両側に刻みを施す。

1438～1440は，特異な突起部を図化したものである。1438・1439は，波頂部の先端に角状の突起をもつ。1438の突起は横位の沈線と貝殻刺突を施し，先端は窪ませる。口唇部には２条の沈線を巡らせ，沈線には貝殻刺突を沿わせる。1439は突起の外面に横位の沈線を互い違いに施し，先端は窪ませる。口唇部には横位の沈線と貝殻刺突を巡らせる。1440は波頂部の先端に２本の粘土紐を内外面を渡すように，さらに外面にはこの２本を繋ぐように１本の粘土紐を横位に貼り付ける。また，波頂部の先端から下方に向かって穿孔が行われる。口唇部には１条の沈線を施す。波頂部直下の口縁部外面には幅広い沈線がほぼ縦位に，内面にも沈線で文様を施す。1439・1440は，台付皿の可能性も考えられる。

Ⅳｃ類土器（第2-81図1441～1445）

Ⅳａ類とⅣｂ類に分類できなかったものである。1441は，口唇部に縦位の短沈線を巡らせる。1442は，粘土を貼り付けて波頂部を肥厚させる。波頂部に横位，その両脇に縦位の短沈線を配し，外面には沈線で不定形の文様を施す。1443は口唇部に斜位，不定形の沈線を巡らす。1444は口唇部に斜位の貝殻刺突を巡らせた後，口唇部の中央付近に長さ12～13cmほどの沈線を横位に施す。さらに２cmほどの間隔を おいて横位の沈線を繰り返し施す。沈線の端部は，強く押し込む。1445は，口唇部に２条の沈線とヘナタリによる回転押圧文を施す。

Ⅳｄ類（第2-81・82図1446～1453）

1446～1448は，直立する口縁部をもつ。1446は平口縁で，胴部はやや張る器形である。外面はケズリ後ナデ，内面は条痕後ナデの器面調整を行う。口縁部内面に緩やかな稜をもつ。1447は波状口縁で，２か所の波頂部が残る。全体では４か所の波頂部をもつと考えられる。一部，口縁端部が外反する所もある。内外面ともケズリ後ナデの器面調整を行うが，器壁の厚さが一定しない。1448は波状口縁で，波頂部には５条の刻みをもつ。内外面ともナデで器面調整を行うが，器壁の厚さは一定しない。

1449は，直線的に外開きになる口縁部をもつ。口唇部が幅広く作り，外向きとなる。上面観は歪な円形となる。

1450～1452は，外反する口縁部をもつ。1450は口唇部に丸味をもたせ，胴下部がやや張る。胴下部から底部に向かってすぼまる。1451は方形に近い口縁部断面で，内面には稜をもつ。外面はケズリ後ナデ，内面はケズリ及び条痕後ナデで器面調整を行う。内面にはススが付着する。1452の口唇部は幅広く，外向きとなる。

Ⅳｅ類土器（第2-82図1454～1457）

1453～1457は，鉢である。1453は強く張る胴部が最大径をもち，口縁部は内傾する。口縁部に２条の細い平行沈線を巡らせ，紐状の粘土紐を２か所貼り付ける。1454は口唇部に２条の沈線を巡らせ，その端部は強く押し止める。1455は，脚台付鉢である。波頂部に４～５条の貝殻刺突，口唇部に１条の沈線を施文する。口縁部はやや直立し，胴部は張らず脚台との境に向かってすぼまり脚台は直立する。底部外面に横位や斜位の貝殻刺突を施文する。1456は，鉢の把手である。把手を貼り付けた口縁端部が欠損していることから，突起部があったと考えられる。幅広い口唇部には縦位の沈線が施される。把手は口縁端部と胴部に２本の脚を渡し，さらに２本の脚を繋ぐように作られる。脚には沈線を施し，正面には渦巻文を描く。1457は台付皿で，口唇部に１条の沈線を巡らせる。脚台は欠損するが，破断面が摩滅していることから欠損後も利用した可能性も考えられる。

【Ⅴ類土器】

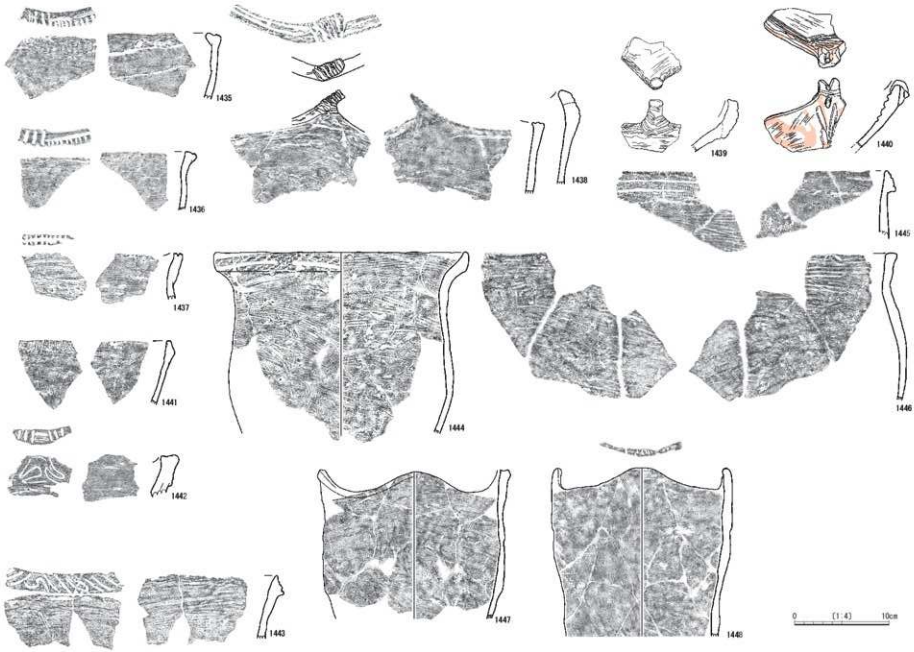
口唇部から口縁部にかけて文様帯に貝殻や竹管及びヘラなどの工具による連続刺突文を施す一群である。口唇部は肥厚し，口縁部は直立～外反し，胴部はやや張る器形をもつ。連続刺突文は縦位・斜位が多いが横向きや山形を呈するものもある。器種は深鉢，鉢，台付皿がある。深鉢を施文具によりⅤａ類とⅤｂ類に大別し，Ⅴｃ類に鉢及び台付皿をまとめた

Ⅴａ類土器

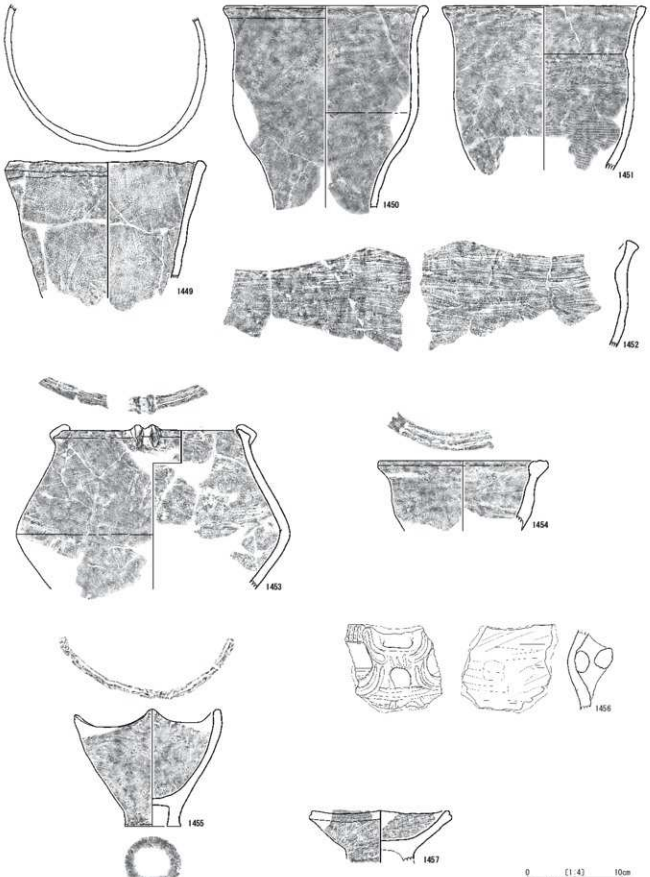
口唇部から口縁部にかけて文様帯に貝殻刺突文を連続して施すものである。施文部位及び器形により４つに細分した。

Ⅴａ－１類　口唇部上面の平坦面を文様帯とし，貝殻刺突文を連続して施すものである。口縁部は直立もしくはやや外反し，胴部はあまり張らない器形をもつ。口唇部は肥厚するものとしないものがある。

Ⅴａ－２類　肥厚し，外面端部がやや下がる口唇部を文様帯とし，貝殻刺突文を連続して施すものである。ただし，文様帯とする口唇部の幅があまり広くならないことを特徴とする。口縁部は直立もしくは外反し，胴部はやや張る器形



第2-81図　Ⅳ類土器（11）



第2-82図　Ⅳ類土器（12）

をもつ。

Ⅴa－3類　口縁部断面が二等辺三角形から直角三角形に近い形状を呈し，口縁部下端が強く張り出す面を文様帯とし，貝殻刺突文を連続して施すものである。口縁部は直立からやや外反し，口縁部下端部が強く張り出し，口縁部直下にくびれや段をもつものである。Ⅴa－2類より文様帯が広いことを特徴とする。

Ⅴa－4類　口縁部下端部が肥厚し，断面が細長い三角形状を呈する口縁部外面を文様帯とし，そこに貝殻刺突文を連続して施すものである。口縁中央が凹み，口縁部直下に段をもつものである。口唇端部の断面は，やや方形を呈す。口縁部は外反し，胴部はあまり張らない。文様帯がⅤa－3類よりさらに広くなることが特徴である。

Ⅴb類土器

文様帯に竹管及びヘラなどの工具により連続刺突文を施すものである。文様帯の形状や施文部位及び器形によりⅤa類と同様に4つに細分した。

Ⅴb－1類　口唇部上面の平坦面を文様帯とし，工具による刺突文を連続して施すものである。口縁部は直立もしくはやや外反し，胴部はあまり張らない器形をもつ。口唇部は肥厚するものとしないものがある。

Ⅴb－2類　肥厚して外面端部がやや下がる口唇部を文様帯とし，工具による刺突文を連続して施すものである。ただし，文様帯とする口唇部の幅があり広くならないことを特徴とする。口縁部は直立もしくは外反し，胴部はやや張る器形をもつ。

Ⅴb－3類　口縁部断面が二等辺三角形から直角三角形に近い形状を呈し，口縁部下端が強く張り出す面を文様帯とし，工具による刺突文を連続して施すものである。口縁部は直立からやや外反し，口縁部下端部が強く張り出し，口縁部直下がくびれ段をもつものである。Ⅴb－2類より文様帯が広いことを特徴とする。

Ⅴb－4類　口縁部下端部が肥厚し，断面が細長い三角形状を呈する外面を文様帯とし，工具による刺突文を連続して施すものである。口縁中央が凹み，口縁部直下に段をもつものである。口唇端部はやや方形を呈す。口縁部は外反し，胴部はあまり張らない。Ⅴb－3類より文様帯がさらに広くなることが特徴である。

Ⅴc類土器

鉢及び台付皿をまとめた。

以下，分類に従って記述する。なお，掲載番号1523は，放射性炭素年代測定を実施した。

Ⅴa類土器

Ⅴa－1類土器（第2-83図1458～1466）

1458～1461は，口唇部に貝殻による連続刺突を施す。1458は平口縁と考えられるが，波状口縁の可能性もある。口唇部に巻貝頂部による刺突を連続で行う。口縁部は直立し，外面に未貫通の補修孔が1か所と補修孔と考えられる欠けが1か所残る。1459は，口唇部に弧状の貝殻刺突を2条ずつ施文する。口縁部は直立し，内面に接合痕が残る。1460は貝殻復縁部を斜めにし，刺突幅を広くする。口縁部は，やや外傾する。1461は，口唇部に斜位の貝殻刺突を8mm程度の間隔で施文する。口径12cm，底径8.4cm，器高12.7cmを測る。口唇は肥厚させず，底部外端は外側へ張り出す。底面には白色土が円形に付着する。

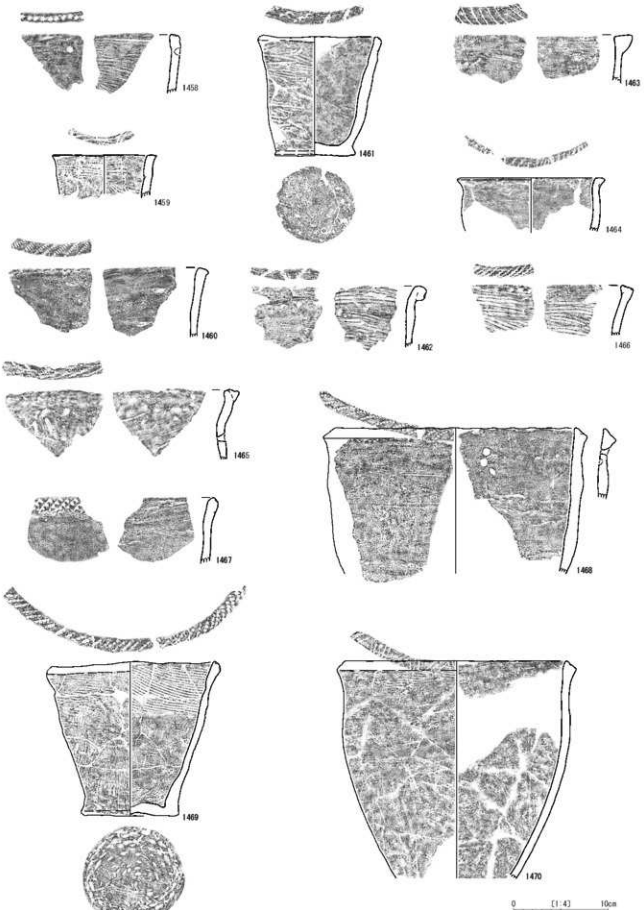
1462～1466は，肥厚させた口唇部に貝殻刺突を連続して施す。1462は，貝殻復縁部による刺突を鋸歯状に施文する。口唇部を外側に広く肥厚させ，直下に段を設ける。胴部割れ面に半分に割れた堅果類と考えられる圧痕が残る。1463は口唇部を広く外側に肥厚させ，口唇部に幅広の平坦面を作り貝殻復縁部による斜位の刺突を行う。肥厚部直下に段を設け，口縁部は直立する。1464は，貝殻の部位を施文場所によって使い分けている。口唇部は肥厚するが，いびつで口唇部の幅が場所によって異なる。1465は，口唇部に横「V」字状に連続刺突を行う。口唇部外面を肥厚させ，口唇部直下に段をもち，そこに接合面が良好に残る。口縁部は外反し，補修孔を1か所もつ。1466は，口縁部が外傾する。口唇部内面を肥厚させ，直下に段を設ける。

Ⅴa－2類土器（第2-83・84図1467～1477）

1467・1468は，口縁部がほぼ直立する。1467は口唇部外面がやや肥厚し，そこに貝殻腹縁部で刺突を行う。土器片の下辺が湾曲し，破断面が丸味をもつことから，円盤形土製品の未製品と考えられる。1468は，口唇部に貝殻腹縁部による深い連続刺突を行う。口縁部下位に焼成後の穿孔が1か所残り，内面には穿孔直下に未貫通の穿孔も残る。

1469は，口縁部が外傾する。口唇部に貝殻腹縁による連続刺突を行う。底面に網代編の圧痕が残るが，一部をケズリ消す。

1470～1477口縁部が外反し，そのうち1475～1477は強く外反する。1470は，口唇部に3～5条の鋸歯状の貝殻刺突を行う。胴部は直立し，底部に向かってすすぼまる。1471は，口唇部に約5mmの間隔で斜位の貝殻刺突を施文する。口唇部が波打ち，口唇部幅は12mmから17mmと一定しない。1472は幅の狭い口唇部に貝殻腹縁部による連続刺突を行うが，一部施文しない範囲がある。胴部の張りは弱い。口縁部から胴部内面に強い条痕が残る。1473


1458
1459
1460
1461
1462
1463
1464
1465
1466
1467
1468
1469
1470
0 (1:4) 10cm

第2-83図　Ⅴ類土器（1）

は，胴部が強く張る器形と考えられる。口唇部には斜位の貝殻刺突を密に施す。1474は，口唇部に２条ずつ弧状の貝殻刺突を行う。1475は，口唇部に貝殻復縁部の連続刺突を深く行った後にナデを施している。胴部が緩く張り，口縁部断面は方形を呈する。口縁部内面に稜をもつ。1476は口縁部内面がやや窪み，胴部が直立する。内外面には条痕が残る。1477は波打つ口唇部に５列以上の貝殻刺突を一組とし，間隔をあけて施文する。口縁部内面に稜をもち，胴部が強く張る。

Ｖａ－３類土器（第2-84～86図1478～1495）

1478・1479・1480・1481は，口縁部が短く外反する。1478は外面に吹きこぼれと考えられるススが残り，口唇部内外面は黒化する。1479は，底部を欠損する。文様帯には斜位の貝殻刺突を施す。内面には条痕が残る。胴部中位の内面に粘土の接合痕が一周残る。1480は，文様帯に横位の貝殻刺突文４列を施す。1481は文様帯に縦位の貝殻刺突を施すが，豆類と考えられる圧痕が残る。

1482～1491は，口縁部が外反するものである。1482は口径17.4cmを測り，口縁部が外反した後短く直立する。口縁部幅がやや狭く，胴部は張り，胴部内面にススが残る。1483は口縁部がやや外反し，口縁外面下端部を肥厚させ角張る。口縁部に巻貝による刺突を施す。胴部は緩く張る。1484・1485・1486は，口縁部に斜位の貝殻刺突文を施す。いずれも胴部の張りは緩い。1486は，文様帯に貝殻刺突を施した後ナデている。内面には条痕を残すが，器面調整は極めて粗い。1487は器面が粗く，一部剥落する。内外面とも胴部から口縁部にかけて条痕が残る。1488は，文様帯に深い貝殻刺突を施す。口縁部直下に明瞭な段をもつ。1489～1491は，文様帯が横向きとなる。1489は，貝殻刺突文７列を一組として一定間隔で施す。1490は文様帯に貝殻刺突を施した後，その上端に棒状工具による刺突を施すが，一部貝殻刺突とずれる所もある。1491は，口縁部直下に明瞭な段をもつ。

1492～1494は，外傾する口縁部をもつ。1492は，口縁部内面に粘土接合痕が良好に残る。文様帯に弧状の貝殻刺突を３重に施す。1493は，文様帯に貝殻押引文を施す。1494は口縁下端部がやや張り出し，口縁部が外傾する。文様帯に巻貝と考えられる工具による刺突を施す。

1495は口唇部に粘土を内向けに貼り付け，内湾させた面を文様帯とする。底部から口縁部に向かってまっすぐ外に開き，口縁部内面で強くくびれ，強い稜をもつ器形となる。断面形状は，逆「く」の字状を呈す。口縁部内面に指頭圧痕が残る。

Ｖａ－４類土器（第2-86図1496～1502）

1496は口縁部が直立し，1497～1502は外反する。1496は，文様帯が口径に対し幅広である。外面に吹きこぼれと考えられるススが残る。1497は文様帯下端に粘土を貼り付け，肥厚させる。文様帯には横位の貝殻刺突を間隔を空け施す。1498・1499は文様帯下端部が強く張り出し，直下に強い段をもつ。1499は，貝殻刺突をやや横向きに施す。1500は文様帯の中央付近が窪み，間隔の空いた貝殻刺突を施す。1501は，貝殻刺突をまばらに施す。1502は波状口縁で，文様帯の中央付近がやや窪む。口縁部直下も窪み，胴部が張る。

Ｖｂ類土器

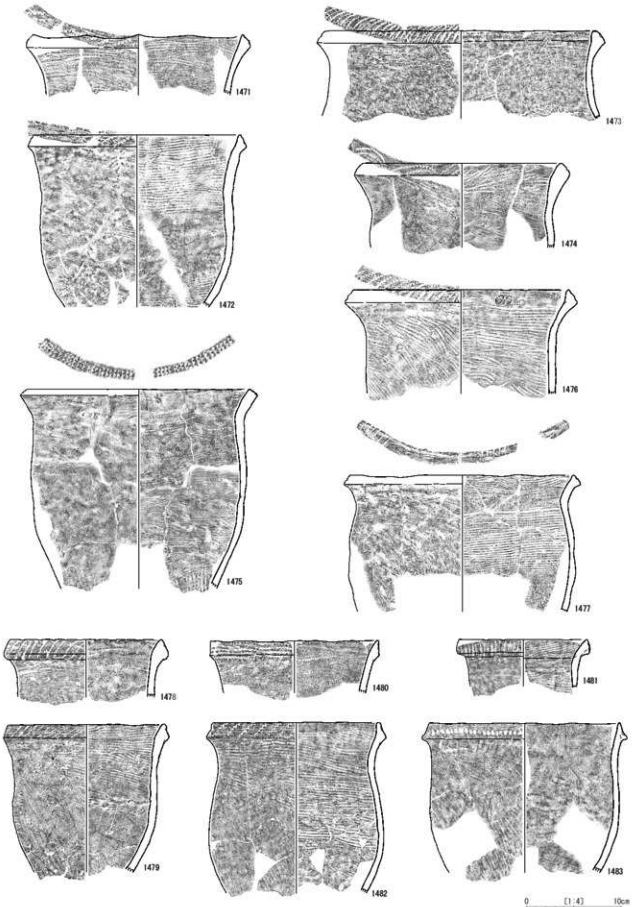
Ｖｂ－１類土器（第2-87図1503～1509）

1503～1505は，口唇部にヘラ状工具による刺突を行う。1503は丸い口唇部に粘土紐を貼り付け，斜位の刺突を向きを変えながら施す。口唇部内面の接合部は粗雑で輪積み痕が明瞭に残り，一部剥離する。口縁部はやや内湾する。外面は丁寧なナデ，内面はケズリで器面調整を行う。1504は，口唇部に刺突を連続して行う。口縁部は直立し，内面は一部摩滅する。1505は口縁部下位がくびれ，口縁部がやや外反し，胴部が張ると考えられる。口唇部を面取りし，そこに刺突を連続して行う。

1506～1509は，肥厚させた口唇部にヘラ状工具による連続刺突を行う。1506は，口唇部上面と口唇部直下の肥厚部に幅約８mmの工具による刺突を行う。口縁部下位はくびれ，その内面に稜をもつ。口縁部はやや外反し，胴部は張らない。1507は，上面にやや内下がりの平坦面を作出する。口唇部には幅約９mmの工具で斜め右方向から刺突を行う。口縁部は直立し，胴部の張りは少ないと考えられる。全体的に器面調整は粗雑で部分的に接合痕がみられ，特に口唇部外面の接合部には指頭圧痕が残る。1508は口唇部外面が肥厚し，口縁部がくびれる。口唇部に平坦面を作り，その中央を凹ませ爪形刺突文を施す。1509は口唇部外面に方形の粘土紐を貼り付けて肥厚させ，広い平坦面を作り，端部を面取りする。幅２cm程度の口唇部上面には幅1.5cm程の凹線を巡らせる。さらに，上面外端部には押圧状の浅い刺突を施す。口縁部に強いくびれをもつ。口縁端部の内面はやや凹み，内外面はケズリによる器面調整を行う。

Ｖｂ－２類土器（第2-87図1510～1518）

1510～1516は，平口縁となる。1510・1511は口縁部がやや内湾し，胴部が緩く張る。1510は，口唇部に先端の尖った工具による刺突を行う。1511は，肥厚させた口唇部外面にヘラ状工具による刺突を行う。外面には粘土の接合痕が良好に残る。1512は，口縁部が直立する。口唇外面を三角形状に肥厚させ，端部を角張らせる。半裁竹管文状の刺突を施す。1513は，口唇部に工具による深い刺突を行う。内面に植物の種子と考えられる圧痕が残る。1514は，口唇部に先端の尖った工具による深い刺突を施す。内外面に一部橙色を呈す部分がある。外面に指頭圧痕が残る。1515は口唇部に粘土を貼り付けて肥厚させ，先端が丸い工具で斜めに刺突を施す。1516は口唇部に竹管による刺突を施し，口縁部内面には凹みをもつ。


1471
1472
1473
1474
1475
1476
1477
1478
1479
1480
1481
1482
1483
0
[1:4]
10cm

第2-84図　V類土器（2）